

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

2. 研究および共同利用

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009561

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「機関研究（2016年度より「特別研究」）」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。

「機関研究」は近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。2016年度においては、第3期中期目標期間を通して、大学共同利用機関としての特徴を活かした研究の推進を進めるため、「機関研究」の枠組みを改め、「特別研究」として、研究プロジェクトの発展的改組を行った。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。特別研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、共同研究会のメンバーだけではなく、研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は、館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

館の研究活動である「特別研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者では「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、特別研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、特別研究プロジェクト、33件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性を担保していく上でも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2017年度には『国立民族学博物館研究報告』42巻1号～3号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報2016』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。本館では、それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有し、かつ後世に伝えるため、国際共同研究を組織し、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度となる2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する4件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾原住民や北米北方先住民に関する2件のプロジェクトが加わり、合わせて6件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。4年目となる2017年度から人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけられ、3件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト4件、強化型プロジェクト7件、合計11件のプロジェクトを実施した。各プロジェクトが標本資料のソー

スコミュニティなどと協業してデジタル博物館の構築を促進する取り組みを実施したことによりデータベース・コンテンツの格納件数が、12,093件（246,096レコード）となった。また研究の成果を企画展「カナダ先住民の文化の力——過去、現在、未来」や国際シンポジウム「カナダ先住民の歴史と現状」を通して公開した。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は寄贈資料としてアルメニアの十字架石碑やベネズエラ・コロンビアの生活道具、アメリカのキルト資料、中央・北アジアの衣装や装身具等を寄贈受入した。

本館は、民族資料や文化財、博物館資料を対象に、一次的な非破壊分析や材質分析がおこなえる非破壊分析・材質分析装置システムを所有している。このシステムを文化人類学やその周辺領域の学問分野において、さまざまな組織や研究者がより積極的に活用でき、科学的研究に基づいた共同利用の促進に資することを目的として、共同利用型科学分析室を設置した。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2017年度は、雑誌168タイトル、マイクロ資料約5,450件（北米学位論文約4,859件、図書20件、新聞雑誌106タイトル571件）を登録した。週及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internetを介して広く公開・利用されており、2017年度は、図書館間相互利用での現物貸借受付が660件、文献複写受付は4,025件と、大学間の共同利用に貢献している。また、一般利用者への貸出冊数は1,850冊であった。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、民族学資料（標本資料、文献図書資料、オリジナル映像・音響資料、研究アーカイブズ資料）の利用に関する問合せを1つの窓口で対応することで、サービス向上を図っている。2017年度には282件の問合せに対応した。

また、蔵書点検5年計画の最終年度として、約16万冊の蔵書点検を行った。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2017年度から、アーカイブズ部会において研究アーカイブズ資料に加え、映像音響資料の寄贈受入についても協議することとなった。また、引き続き未公開の資料について目録公開に向けた整理作業を行った。

2-1 みんなの研究

特別研究

●特別研究の意義

特別研究は、2016年度から始まった第3期中期目標期間の6年間を通じて、「現代文明と人類の未来——環境・文化・人間」を新しい統一テーマとして掲げ、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

近現代のヨーロッパに発する西欧文明および科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきた一方で、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言える。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題であり、これらの課題は人間生活のあらゆる面に影響を及ぼし、多くの問題をもたらしている。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直すために、特別研究を現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として位置づけ、環境問題や人口をめぐる地球規模の変動について直接的・間接的に起因する対立軸となる文化現象を設定する。グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代の問題系としてアプローチすることで、旧来の（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざす。

2017年度は、プロジェクト「生物・文化的多様性の歴史生態学——稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に」において、2018年3月に国際シンポジウム「歴史生態学からみた人と生き物の関係」を開催した。また、新たに、プロジェクト「食料生産システムの文明論」を立ち上げ、2017年11月にみんなく公開講演会「料理と人間——食から成熟社会を問なおす」を開催した。

2017年度特別研究一覧

プロジェクトリーダー	プロジェクト名	テーマ区分	研究年度
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学——稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に	環境問題と生物多様性	2016-2018
野林厚志	食料生産システムの文明論	食料問題とエコシステム	2017-2019

●特別研究のテーマ区分とプロジェクト

1 テーマ区分：①環境問題と生物多様性

プロジェクトリーダー：池谷和信・岸上伸啓

研究課題：生物・文化的多様性の歴史生態学——稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に

研究目的

本プロジェクトの目的は、先史から現在までの人間・環境関係の歴史生態学的アプローチを軸にして、稀少動物・稀少植物の利用や絶滅、保護の変遷およびそこでの問題を把握することを通して現代文明と環境との関係を考えることである。また、本研究は、寒冷地（極北）、島嶼・海洋（オセアニア、日本）、砂漠（中央アジア）、森林（アマゾン、熱帯アジア、日本）、内水面（中国）などの世界各地の環境特性へのヒューマンインパクトの歴史を把握することから、地球、大陸、地域レベルでの動物・植物と人間社会との相互関係について考える試みでもある。

実施状況

2018年3月19日～21日、国際シンポジウム「歴史生態学からみた人と生き物の関係」を国立民族学博物館にて開催した。1日目は、ウィリアム・バレー氏（トゥレーン大学）、ジョン・ナイト氏（クイーンズ大学ベルファスト）、黒澤弥悦氏（東京農業大学「食と農」の博物館）、M・O・ファルーク氏（バングラデシュ農業大学）、大橋麻里子氏（一橋大学）、小泉都氏（京都大学総合博物館）、ジョン・ナイト氏（クイーンズ大学ベルファスト）ら、2日目は、エドアルド・G・ネベス氏（サンパウロ大学・考古学民族学博物館）、中井信介氏（佐賀大学）、大石高典氏（東京外国語大学）、ウィリアム・バレー氏（トゥレーン大学）、ステファン・ロステン氏（国立科学調査センター）、市川光雄氏（京都大学）ら、3日目は、セルジュ・バウシェ氏（国立自然史博物館）、鈴木英明氏（長崎大学）らをゲストに、人と生き物の関係を、歴史生態学の視点から、各国の状況を比較しながら議論した。

研究成果の概要

今回の国際シンポジウムでは、民博における環境人類学研究（とくに人と生き物のかかわりに関する研究）の国際的な位置がみえてきた。これまで、民博では、過去40年の間、この分野にかかわる多数の研究が蓄積されてきたが、かならずしも世界的に研究成果が知られているとはいえない。しかも今回は、これまでの研究成果（とくに *Senri Ethnological Studies* の論文集）の動向を展望することから現在の民博の研究成果の位置がみえてきた。民博の環境人類学は、世界的にみて一定の評価を得ているが、国際発信がまだ十分でないことが明らかにされた。

特別研究に関連した成果の公表実績

「歴史生態学から見た人と生き物の関係」というタイトルの公開シンポジウムが開催された。ここでは、英語と日本語の間での同時通訳が行われることで、一般の方々を含めての数多くの参加者を得ることができた。また、今回の国際シンポジウムの内容については、人間文化研究機構や民博のHPを通じて海外に発信していく予定である。さらに、英文論集の出版については、3年目（2018年4月-2019年3月）に集中して行う予定である。

2 テーマ区分：②食料問題とエコシステム

プロジェクトリーダー：野林厚志

研究課題：食料生産システムの文明論

研究目的

人類にとって食とは生態学的、栄養学的充足を満たす以上の役割がある。すなわち、食とは最も原初的な富の

形態であり、生産（採集や狩猟も含む）、貯蔵、交換といった諸行為を通じて、より大きな経済活動を構築する端緒を与えた。同時に、地域の環境と密接にむすびついた食は、土地の人々にとって社会的、文化的アイデンティティの表明となり、同時に共食や贈与交換に代表されるコミュニケーション手段の役割も果たしてきた。これらはその範囲を広げることにより、国家や共同体の統合原理を構成する要素ともなり、近年では「ガストロディプロマシー（美食外交）」に見られる国家間の経済的、政治的関係を深めるための外交手段としても注目されている。

本来、食とは個体が生命を維持するための要素であり、地球の生態循環のなかで機能するものである。したがって、現代社会における大量生産、大量廃棄という食糧資源のあつかわれかたは、これまで人類社会が経験してこなかった文明の新たな暗部ともいえる。政治経済的な脈絡の中で生態学的適応に乖離している現代社会の食の実相が生成されるメカニズムを、従来のマクロな食糧問題へのアプローチに対し、文化人類学的な切口でとらえることが本研究の主要な目的である。

本研究課題では人類が食を操作してきた営みを批判的に検討する。具体的には、食料生産のシステムが、家庭、地域社会、国家、経済地域圏をどのように接合しているのか、個々のレベルで生じる格差と食料生産、供給、消費との関係、伝統文化、食文化の維持と食料生産システムとの矛盾等を核となるテーマとして設定し、文明社会を支えてきた文化的装置として食料の生産の将来におけるありかたを見直そうとするものである。

実施状況

(1) 国際シンポジウムのための準備会合

日時：2018年1月9日11時00分～12時30分

国際シンポジウムのテーマ設定のための企画立案

日時：2018年1月30日13時30分～15時00分

国際シンポジウムのテーマ内容についての原案の作成

(2) 国内・海外調査

班員の韓は、国内調査、研究懇談を実施した。具体的には、日本と中国における食文化の情報及びそれに関する研究動向について特に2016年に北京で行われた第2回『中国食文化研究会』やその成果論文集（2017）に関する論評を機関外の研究者と実施し、中国の食文化に関する学際的研究の特徴について議論を行った。また、大学等における人文社会系の図書室で日本と中国の食に関する人類学、社会学、歴史学及び民俗学の文献資料の渉猟を行った。

班員の宇田川は、イタリア、オランダにおいて、地中海料理・イタリア料理にかかわる政策や消費者運動に関する調査を行うとともに、ナポリ大学地中海食文化センター、ライデン大学において、当該分野を専門とする研究者と研究課題についての懇談、ならびに次年度、開催予定のシンポジウムの準備会合を行った。

(3) その他

班員の宇田川、河合、野林、濱田（大阪樟蔭女子大学）が編集幹事となり、丸善出版『世界の食文化事典』（編集代表：野林、国立民族学博物館編）の編集を開始した。本館の教員を中心とした編集委員会を組織し、執筆項目の選定、執筆候補者の人選を行なった。

研究成果の概要

本年度は、来年度に予定している国際シンポジウムのための準備作業、ならびにそれにとまなう基礎資料の収集を実施した。また、みんぱく公開講演会を通して、外部の研究者の協力を得ながら、本研究の課題に関する論点の深化をはかるとともに、一般社会の関心について、その傾向をとらえることができた。

特別研究に関連した成果の公表実績

出版

宇田川妙子

2018 「地中海料理の過去・現在・未来」『vesta』110：58-63、東京：味の素食の文化センター。

野林厚志（責任編集）

2018 「特集肉食と人」『vesta』108、東京：味の素食の文化センター。

公開シンポジウム

みんぱく公開講演会「料理と人間——食から成熟社会を問いなおす」日経ホール（2017.11.17）

野林厚志「文明と文化のはざまの料理」みんぱく公開講演会「料理と人間——食から成熟社会を問いなおす」日経ホール（2017.11.17）

宇田川妙子「イタリア料理からみるグローバル、ナショナル、ローカル」みんぱく公開講演会「料理と人間——食から成熟社会を問いなおす」日経ホール（2017.11.17）

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発WGを置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。併せて、ウェブサイト公開のため、既存紙ベース『月刊みんぱく』378冊について、写真のデータ化及びPDF化を実施した。

また、「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」及び「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」の4つの研究プロジェクトを開始し、ソースコミュニティとの共同作業、北アリゾナ博物館（米国）、アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）及び国立民俗博物館（韓国）との国際学術協定に基づく国際共同研究等を通じて、情報の多層化、多言語化を推進した。

2017年度は、4件の開発型プロジェクトと7件の強化型プロジェクトを実施し、多言語で多様なコンテンツを備えたデータベースの構築を行った。また、5つのデータベースの公開に伴い、標本資料12,093件（246,096レコード）の新たな文化資源情報を公開した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
伊藤敦規	北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	開発型	2014年6月～2018年3月
野林厚志	台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	開発型	2015年4月～2019年3月
齋藤玲子	民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	開発型	2016年4月～2020年3月
飯田 卓	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	開発型	2017年4月～2021年3月
岸上伸啓	北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に	強化型	2016年1月～2017年12月
横山廣子	中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2016年4月～2018年3月
飯田 卓	民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開	強化型	2016年4月～2018年3月
福岡正太	楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2016年4月～2018年3月
日高真吾	日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト	強化型	2016年4月～2018年3月
西尾哲夫	中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース	強化型	2017年4月～2019年3月
太田心平	朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	強化型	2017年4月～2020年3月

* 2017年度実施分

**開発型は4年以内、強化型は2年以内

「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

代表者：伊藤敦規 2014年6月～2018年3月

実施状況

プロジェクト全体を①ソースコミュニティの人々と実施した資料情報拡充のための協働調査と公開適正化作業、および②データベース開発に分ける場合、①は外部資金による研究プロジェクト（二つの科研費）との連携と展開を図ることで、当初の計画以上の大きな成果が得られた。②は三年度末に発生した問題の解決に向けた対応に追われた。

①を以下AからEの5点に分けて概説する。

①-A「資料熟覧調査」：今年度は11月末現在までの間に、新たに約700点の資料を対象とした熟覧調査を行った（4機関および個人蔵コレクション）。12月には4年間のプロジェクト期間を通して14機関目となる米国スミソニアン協会国立自然史博物館で、26点の熟覧調査を招聘した先住民ホピの人々と共に行った。

①-B「資料熟覧調査経験の教育利用」：海外の連携機関でワークショップを開催した。本プロジェクトで注目してきた主な資料に米国先住民ホピ製宝飾品がある。特殊な制作技法で有名で、その技法は1940年代にホピのアーティストFred Kabotieが確立した。その時参照したのがMimbres地域から出土した土器に描かれた具象的な意匠と白黒のコントラスト比であった。ワークショップ（WS01：博物館とデイセンダントコミュニティおよびソースコミュニティとの協働——米国ニューメキシコ州Mimbres遺跡出土資料熟覧と遺跡実見を介したアート作品制作と展示計画〈2017年8月28日～9月2日〉）ではKabotieがMimbres土器に着眼した足跡を辿り、実際に土器が出土した遺跡をホピの人々と訪問した。考古学者や国立森林局職員などの協力を得て、景観や歴史に関する専門的知識も学んだ。さらにニューメキシコ州立大学附属博物館とジェロニモ・スプリングス博物館の2機関で土器資料をハンドリングする熟覧調査を行うことで、Mimbres土器を、物質的、文化的、歴史的、景観的な側面から体験的に学んだ。WS01に参加したアーティストが講師を務める別のワークショップも開催した（WS02：博物館資料とソースコミュニティとの『再会』の地元教育現場への展開——米国先住民ホピの七〇年間にわたる銀細工制作を事例として〈2017年10月3日～4日〉）。WS02の主たる対象はホピの若手アーティストであった。WS01参加者が自身の経験を伝える事に加え、米国内とオランダから招聘した美術史家と考古学者による研究発表も行い、先住民アーティストは土器を触察し、研究成果からも知見を得た。WS01とWS02を通して、アート作品の創作活動への展開や、教育現場への活用も具体的に検討した。WS02の内容およびSERでの出版物などは、今後ホビ保留地内の私立学校Hopitutuquaiqiが教材として取り入れる予定なので、さらなる教育利用が期待できる。なお、WS01に参加した先住民アーティストが手がけた新規創作作品は、後述する①-Dのニューメキシコ州立大学附属博物館が展示会開催に向けて資料として購入（収集）する予定である。

①-C「協働編集作業および公開適正化作業」：前年度および今年度を実施した資料熟覧調査の動画について、文字起こししたテキストデータと動画を照合して発話内容をチェックした。また、その過程において、カルチャル・センシティブティへの配慮に基づく編集を行い、文化的な側面から公開適正化に務めた。

①-D「展示への展開」：ソースコミュニティと博物館資料との「再会」を展示活動として展開する計画があがった。2018年4月開幕予定の天理大学附属天理参考館の春の企画展（第81回企画展『大自然への敬意——北米先住民の伝統文化』）の一部と、2018年3月開幕予定の民博の特別展『太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』の一部である。2019年度開催予定の、米国ニューメキシコ州立大学附属博物館での企画展は、本プロジェクトを主題とする予定である。

①-E「成果出版」：ソースコミュニティと博物館資料との「再会」シリーズの2作目として、『天理大学附属天理参考館蔵「ホビ製」資料熟覧（国立民族学博物館調査報告SER）』を日英両言語でまとめ、7月初旬に民博出版委員会に投稿した。また、年度内にはシリーズ3作目の『国立民族学博物館蔵184点の「ホビ製」資料熟覧（281点の木彫人形資料を除く）』を同じく国立民族学博物館調査報告SERとして投稿した。紙媒体はオフライン環境での閲覧が可能なため、連携機関の収蔵庫や僻地のソースコミュニティでの共有を図ることができる。さらに、2014年10月と2016年2月に民博で実施した国際ワークショップの成果をまとめた論文集をSenri Ethnological Studies (SES)として投稿する予定である。

②データベース開発に際して生じた諸課題と対応。

②-A「システム開発」：前年度12月までに民博のシステム開発担当職員および外部業者とのインターフェースデザインに関する打ち合わせを重ね、2016年12月に担当職員が仕様書をまとめて民博調達係を通して外部業者に発注した。発注時点では、担当職員と元請負人（外部業者）が発注者（プロジェクトリーダー）に進捗状況を共有した上

で、何度か発注者に意見聴取を経て、発注者が指摘する修正案を反映させてから2017年3月半ばまでに納品し、館内公開へと移行する予定だった。ところが、担当職員や元請負人は、システム開発を行う上での前提となっていたデータベースのプログラム（ロジック）に関する国立情報学研究所との共同研究を実施したかどうかの説明もせず、書面による報告書もなく、発注者への納品以前の進捗状況の共有も怠り、インフォームド・コンセントを欠如した状態で納品した。こうした重大な問題が発生した後、急遽担当スタッフが改編された。発注者（プロジェクトリーダー）はすぐにインフォームド・コンセントを果たさずに納品されたデータベース納品物を仕様書と照合し、納品物の問題点や修正すべき点をリストにまとめ、新たに編成されたチームに対して提出した。新たに編成されたチームは、現在、そのリストを元に誠意作業を行っているが、プロジェクトリーダーは最終年度という非常に貴重な時間を8ヶ月近くも失うことになった。これによって本年度に計画していたデータ公開に関するプロジェクト進行上非常に重要な事案のいくつか（下記に詳述）は、実施することが出来なくなってしまった。

②-B「データベース公開にかかる著作権処理等公開適正化作業」：データベースを介したデータ公開に関して、前出①-Cに記載したようにカルチャル・センシティブティへの配慮という観点からの公開適正化作業は、ソースコミュニティの人々とこれまでに着実にやってきた。民博側のそうした働きかけについて、ソースコミュニティによる評価は高く、信頼関係が構築できたと思われる。また、資料熟覧者やワークショップ参加者に対しては、書面で利用許諾書にサインしてもらい、その原紙を民博研究協力課国際協力係で保管している。本プロジェクト期間に収録した動画データに関する肖像権や著作権は問題なく処理することができた。しかしながら、データベースを介した公衆送信の際に必要な著作権処理（モノ資料ならばその制作者等の著作権者、古写真などアーカイブ資料ならば撮影者等から構成される著作権者からの利用許諾の取得や、孤児著作物の場合の文化庁長官裁定制度への申請等）は最終年度の11月末日現在では、②-Aへの対応に時間を割かねばならなかったことに加え、対象資料数の割り出しが不可能だったため、実施できなかった（ただし、資料熟覧参加者が資料の著作権者である場合には、その人物から口頭で当該資料画像の公衆送信にかかる利用許可を取得した）。

最終年度に実施を予定していたものの実施不可能となった他の事案は、例えば、データベースの今後の利用や運用に関する連携機関との検討会や、プロジェクトに参加してくれたソースコミュニティに対するデータベース上のセキュリティの証明（カルチャル・センシティブティに関する配慮がシステム上どの程度反映されているのかの証明）に関する実演会、潜在的連携機関への研究広報活動などである。特に前二者を実施できなかったことは、これまでに構築してきたプロジェクト連携機関やソースコミュニティとの信頼関係を揺らがしかねない。

以下は、本年度の実施内容を時系列に則したものである。

4月： 科研費で米国ワシントンDCの国立アメリカンインディアン博物館を2週間程度訪問し、ホピ製宝飾品資料150点の写真撮影と採寸を行った。そこで得たデータをフォーラム型情報ミュージアムのデータとして整理した。

5月から6月末： 米国アリゾナ州のホピ保留地等を40日間程度訪問し、昨年度（2016年9月）に撮影したデンバーの3つの博物館が収蔵するホピ製宝飾品資料のデジタル熟覧（間接熟覧）を実施した。さらに、本年4月に撮影した国立アメリカンインディアン博物館収蔵資料等をデジタル熟覧（間接熟覧）した。また、これまでに実施した資料熟覧の動画と文字起こししたテキストデータを照合する協働編集作業とカルチャル・センシティブティへの配慮を含む公開適正化作業を、ソースコミュニティの人々と共に実施した。

7月： インフォームド・コンセントを経ずに改変されたデータベース納品物の問題点を整理し、新たに組織されたデータベース開発担当に提出した。また、2015年度に実施した天理大学附属天理参考館での資料熟覧調査の結果をまとめ、『国立民族学博物館調査報告（SER）』に投稿した。さらに、第1回デジタルアーカイブス学会に参加し（岐阜女子大学）、デジタルデータの公衆送信に絡む著作権処理の必要性や諸問題などに関する学会の最新の見解を知ることができた。

8月から10月末： 米国ニューメキシコ州とアリゾナ州を80日間程度訪問し、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトで実施してきた内容を、ソースコミュニティの伝統文化の復興や若手アーティストへの教育と結びつけるための二つの国際ワークショップを主宰した。また、これまでに実施した資料熟覧の動画と文字起こししたテキストデータを照合する協働編集作業を、ソースコミュニティの人々と共に実施した。

11月： 国際協力事業団（JICA）が主宰し、国立民族学博物館（民博）が中心となって実施している「博物館とコミュニティ開発」コースにて、世界中から集まった9名の研修生に対して、民族学博物館が収蔵する著作物的なものへの配慮の必要性について講義した。また、ザンビア、バヌアツ、パプアニューギニアといった国々の国立博物館などが実施しているカルチャル・センシティブティへの配慮を、本プロジェクトにおける公開適正化作業と比較検討した。

12月： 2週間程度、米国ニューヨーク（アメリカ自然史博物館およびスミソニアン協会国立アメリカンインディ

アン博物館主催の先住民アートショーの実見)とワシントンDC(国立アメリカンインディアン博物館でのプロジェクトの中間報告会の開催と、国立自然史博物館での資料熟覧調査)を訪問した。

2017年1月以降3月末まで：民博の外国人研究員として受入中の荒川史康准教授(ニューメキシコ州立大学附属博物館長)の協力を得て、これまでに実施した資料熟覧の動画と文字起こししたテキストデータを照合する編集作業を実施した。また、上記した3つの展示会の開幕に向けて調査・準備を行った。さらに2014年10月と2016年2月に民博で開催した本プロジェクトに関連する2つのワークショップの成果をまとめている。

成果

4年目となる2017年度の主な研究成果は以下である。北アリゾナ博物館と国立民族学博物館との学術協定に基づく国際共同研究の実施(国際ワークショップの共同主催など)、招待講演や国際ワークショップ等での口頭研究発表13本(年度末までの実施予定含む)、米国スミソニアン協会国立自然史博物館や国立スコットランド博物館など2カ国4機関の収蔵資料を対象としたソースコミュニティとの熟覧調査、10本の展示図録・エッセイ・新聞記事の執筆(年度末までの刊行予定含む)、3つの展示会の準備、3本の査読付き編著の投稿と1本の自家出版を行った(年度末までの投稿予定含む)。さらに、データベースのシステムデザインの監修を行い、昨年度に発生したデータベースシステム開発上の諸問題への対応を行った。

成果の公表実績

編著

- 伊藤敦規編 『国立民族学博物館収蔵184点の「ホピ製」資料熟覧(281点の木彫人形資料を除く)——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3(国立民族学博物館調査報告SER)』
(自家版) Atsunori Ito (ed.) *Mimbres Workshops 2017: Reconnecting Hopi Artists with Mimbres Landscape and Pottery Designs* (handout for the Mimbres Workshops 2017). (2017.8.10)
(投稿済み) 伊藤敦規編 『天理大学附属天理参考館収蔵「ホピ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」2(国立民族学博物館調査報告SER)』

エッセイなど

- (近刊) 伊藤敦規 「北米」、野林厚志編 『太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』、国立民族学博物館。
(近刊) 伊藤敦規 「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」『民博通信』160。
伊藤敦規 「アメリカ合衆国(ホピ族)」、中牧弘充編 『世界の暦文化事典』、東京：丸善出版、pp.342-345。
伊藤敦規 2017 「ソースコミュニティと博物館資料との『再会』(国立民族学博物館の収蔵品②)」『文部科学教育通信』422: 2、ジヤース教育新社。(2017.10.23)
伊藤敦規 2017 「アシウィ・アワン博物館・遺産センター」『月刊みんぱく』(第41巻第5号「新世紀ミュージアム」): 16-17、国立民族学博物館。(2017.5.1)

学会発表や招待講演など

- 伊藤敦規 2018 「博物館資料の人類学的ドキュメンテーションと共有」みんぱくウィークエンド・サロン、国立民族学博物館。(2018.3.18)
伊藤敦規 2018 「ソースコミュニティの人々との資料熟覧——博物館収蔵庫でのフィールドワーク」『ナレッジキャピタルナレッジキャピタル超学校シリーズ連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——フィールドワークを語る(第4回)」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F。(2018.1.10)
Atsunori Ito and Gerald Lomaventema 2017 “Reconnecting Hopi Silversmiths with NMAI Collections: Interim Report on the Collaborative Research Project” KAKENHI Project meeting (15KK0069; 26704012), Cultural Resources Center of the National Museum of the American Indian, Suitland, MD, USA. (2017.12.07)
Atsunori Ito and Fumiyasu Arakawa 2017 “Reconnecting Source Communities with Museums” KAKENHI Project meeting (15KK0069; 26704012), National Museum of Ethnology, Osaka, Japan. (2017.11.19)
Atsunori Ito 2017 “Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions” National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Source Communities with Museums for Education: Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions*, Museum of Northern Arizona, Flagstaff, AZ, USA

(2017.10.3)

- Atsunori Ito 2017 “Hopi Silversmithing and Mimbres: Fred Kabotie’s activities in the late 1940s” National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Source Communities with Museums for Education: Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions*, Museum of Northern Arizona, Flagstaff, AZ, USA (2017.10.3)
- Atsunori Ito 2017 “Introduction: Reconnecting Source Communities with Museum Collections” National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Source Communities with Museums for Education: Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions*, Museum of Northern Arizona, Flagstaff, AZ, USA (2017.10.3)
- Atsunori Ito 2017 “Reconnecting Hopi Artists with Mimbres Landscape and Pottery Designs” National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Archaeological Materials with Descendant & Source Communities: Collections Review, Field Trip, Art Work Creation, and Exhibition Planning*, New Mexico State University Museum, Las Cruces, NM, USA (2017.8.28)
- Atsunori Ito 2017 “Introduction of the Reconnecting Projects” National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Archaeological Materials with Descendant & Source Communities: Collections Review, Field Trip, Art Work Creation, and Exhibition Planning*, New Mexico State University Museum, Las Cruces, NM, USA (2017.8.28)
- Atsunori Ito 2017 “Reconnecting Source Community with Museum Collections and Anthropological Documentation”, *KAKENHI Project meeting (15KK0069; 26704012)*, National Museum of Ethnology, JAPAN. (2017.7.6)
- Atsunori Ito and Gerald Lomaventema 2017 “Revitalization of Hopi Jewelry: Through the Collections Review in the US and Japan”, *Museum of Northern Arizona 84th Hopi Festival*. (2017.7.2)
- Atsunori Ito and Gerald Lomaventema 2017 “Revitalization of Hopi Jewelry: Through the Collections Review in the US and Japan”, *Museum of Northern Arizona 84th Hopi Festival*. (2017.7.1)
- Atsunori Ito 2017 “Hopi Collections Review in the US and Japan”, *KAKENHI Project meeting (15KK0069; 26704012)* Cultural Resources Center of the National Museum of the American Indian, Suitland, MD. (2017.04.21)

展示活動

- 2018年4月開幕予定 天理大学附属天理参考館、春の企画展。
2018年3月開幕予定、民博特別展『太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』。
2019年度開催予定、米国ニューメキシコ州立大学附属博物館での企画展示

データベースの整備実績

標本件数：489点（民博木彫人形281点、天理大学附属天理参考館24点、民博人形以外184点）
レコード件数：59,793件

- 基本項目：7,824レコード（489件×以下の8項目×2言語）
- VR：40,745レコード（145画像×281件のみ）
- 熟覧動画：約1,600レコード（400熟覧×2種類の撮影方法×2種類の公開方法）
- 自己紹介動画：20レコード（1撮影×10人×2言語）
- 描き込みなど参考画像：約2,205レコード（281件×5人=1,405レコード+約50件×4人=200レコード+24件×2人+184件×3人）
- 熟覧要約：816レコード（200熟覧×2言語+24熟覧×2言語+184熟覧×2言語）
- 熟覧コメント：3,932レコード（200熟覧×2言語×5人+24熟覧×2言語×2人+184熟覧×2言語×5人）
- 自己紹介文：20レコード（5人×2言語+2人×2言語+3人×2言語）
- 用語集：2,631レコード（522単語×3言語+1種類+81単語×3言語+100単語×3言語）

「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

代表者：野林 厚志 2015年4月～2019年3月

実施状況

1) 昨年度に公開した台湾資料のプラットフォームのデータの精査を行うとともに、コレクション情報の追加のための資料整理と調査を実施した。具体的には、国文学研究資料館寄託の台湾関係資料ならびに東京大学人類学教室寄託の台湾関係資料の収集時の記録を整理し、精度確認のための調査を実施した。

2) 本プロジェクト推進のための国際学術協定にもとづき、国立台湾歴史博物館の研究者2名を科研費プロジェクト基盤研究A「ネットワーク型博物館学の創成」との協働で招聘し、次年度以降にプラットフォームへの組み込みを検討している学術アーカイブス（内田コレクション）の基礎調査を共同で実施した。

3) 本プラットフォームを参照した熟覧調査を台湾から2件受け入れた。

4) 年度内に台湾においてビレッジミーティングを苗栗県のタイヤル族居住地域で実施し、多言語化した資料データベースをソースコミュニティの当事者と共同利用し、インターフェイスの検証と知識の共有の実践的手法について検討した。

5) 琉球島嶼部の資料の基礎調査を行い、次年度以降のプラットフォームへの追加を検討した。

成果

本年度は研究計画にしたがい、1) 台湾資料に関する情報収集のための現地調査。ビレッジミーティングの実施、2) 台湾資料、琉球列島資料に関する情報整理ならびに日本語、中国語による資料台帳の作成は継続しており、さらに通文化的な比較研究を可能にする文化項目コードの中国語訳を完了、3) 台湾資料に関するコレクション情報の精査と追加を、国文学研究資料館寄託ならびに東京大学人類学教室寄託の台湾関連資料で実施、4) 学術交流締結機関である国立台湾歴史博物館との共同調査を実施、5) 台湾資料の双方向型多言語DBの改良を、データの精査を通して実現している。

成果の公表実績

2018年2月の期間中に台湾におけるビレッジミーティングを実施した。今年度の年内をめどに精査できたデータを1月中旬に更新し、プラットフォーム全体の精度を上昇させた。

データベースの整備実績

標本件数：

中英翻訳由来	5,671件
東大資料由来	467件
旧文部省資料館由来	1,084件
合計	7,222件

レコード件数：

中英翻訳由来	11,342件
東大資料由来	1,868件
旧文部省資料館由来	6,504件
合計 標本件数	19,714件

「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」

代表者：齋藤玲子 2016年4月～2020年3月

実施状況

データベースの基礎情報として、昨年度に引き続き、民博が所蔵しているすべてのアイヌ資料について、既存の標本資料詳細データベース（館内版）の情報をベースに、関連文献等を探してつきあわせ、データの入力・修正作業を進めた。併せて、文献の関係箇所のデジタル化を進めた。

関連文献のなかでも、東京大学理学部人類学教室旧蔵資料のうち1000点（アイヌのみではなく、世界各地の資料）を掲載した『内外土俗品図集』（寶雲舎 1938-39年）については、館内での試験的公開に向けて整備した。

さらに、共同研究員とともに特定の資料（今年度は刀掛け帯／エムシアットと背負い紐／タラ）についての熟覧調査をおこない、情報の付加に努めた。

北海道アイヌ協会から派遣された工芸家とともに現行の衣服関連資料データベースを使い、改善点等を検討した。

加えて、アイヌ語訳の準備として、（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構の工芸品展の図録をはじめ近年の文献

から資料のアイヌ語名を拾い出す作業をおこなった。

館外の大学、博物館、アイヌ関係団体等の研究者・職員を共同研究員として、進捗状況をふまえて、有用なデータベースにするための議論もおこなった。

概要

上記のとおり、本年度も情報の収集と確認をおこない、既存のデータベースで不明だった年代や地域等の情報の修正・追加入力を進めた。標本資料について書かれた文献を収集しつつ、デジタル化もおこなった。

また、共同研究員とともに刀掛け帯（エムシアッ）と背負い紐（タラ）についての熟覧調査をおこない、技法や素材について新たな情報を付加することができた。

さらに、北海道アイヌ協会から派遣された工芸家とともに、衣服関連資料のデータベースに望むポイントについて調査・検討することができた。

成果の公表実績

「旧蔵者からの再調査の可能性」（仮）『民博通信』160号（2018年3月発行予定）

データベースの整備実績

『内外土俗品図集』掲載資料（東京大学理学部人類学教室旧蔵の世界各地の標本資料）および、衣服関係資料

標本件数：1,200件

レコード件数：12,000件

「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」

代表者：飯田 卓 2017年4月～2021年3月

実施状況

本プロジェクトで対象とするのは、民博が収蔵しているサハラ以南アフリカ資料20,737点である。現在日本語で読めるようになっているデータベースから、これらの資料に関するレコードをすべて抽出し、一定の方針のもとに日本語資料名を付与しなおして、英語訳をおこなった。これをもとに、来年度のはじめ頃には、新名称を含む日本語データベースと最低限の情報を反映させた英語データベースを構築する。民博の標本資料に関する研究のプラットフォームとしてそれを利用し、次年度以降に研究を展開していくことができる。

本年度はまた、次年度以降の研究展開のための準備として、ガーナ（飯田、吉田）、ベナン（飯田）、カメルーン（飯田、戸田）、エチオピア（飯田、川瀬）の4ヶ国で研究者交流をおこない、今後の共同研究の可能性について議論した。その結果、標本資料に関する共同研究のみならず、民博のアーカイブズ資料に含まれる江口名誉教授が録音した音声資料や、文化現象全般に関する映像など、民博が有する多様な学術資源についての共同研究が提案された。

成果

日本語資料名を精査し英語資料名を確定できたことは、今年度の大きな成果である。これをもとにして、最低限の情報を反映させた英語データベースを構築し、日本語話者以外のアフリカ研究者と共有することが可能になる。本来ならば、フランス語などの他の言語についても翻訳を済ませたかったが、英語データベースだけでも館外の研究者と共有したうえでそれを活用した共同研究をおこない、同時進行するかたちで他の言語への翻訳作業を進めたほうが効果的に成果をあげられると判断した。

データベースの整備実績

標本件数： 約20,000点

レコード件数：（日本語項目）20,000×13=260,000

（英語項目） 20,000×11=220,000

（合計） 20,000×24=480,000

（参考）日本語の項目は、①標本番号、②新資料名、③旧資料名、④現地名、⑤モチーフ、⑥作品名、⑦用途、⑧使用者、⑨素材または支持体、⑩収集者名、⑪収集地名、⑫使用民族名、⑬使用状況。英語の項目は、①

標本番号、②資料名、③現地名、④モチーフ、⑤作品名、⑥用途、⑦使用者、⑧素材または支持体、⑨収集者名、⑩収集地名、⑪使用民族名。

「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に」

代表者：岸上伸啓 2016年1月～2017年12月

実施状況

- (1) 2016年度に引き続き、公開予定の情報データの内容を精査し、修正するとともに、文献情報を付加するなど情報の高度化を行った。また、多言語化（おもに英語化）を行った。その結果、2975件の文化資源に関するデータベースコンテンツを完成させた。
- (2) 2017年7月29日から8月7日までのカナダ北西海岸地域バンクーバー島での調査においてアラートベイのウミスタ文化センターやキャンベルリバー博物館等でクワクワカワクウに関する情報を収集し、作成中のデータベースに反映させた。
- (3) 上記の(1)と(2)の調査結果を利用して企画展「カナダ先住民の文化の力——過去、現在、未来」(2017年9月7日から12月5日まで)を実施するとともに、展示場にて日本語版のデータベースの試験的公開を行った。また、同年9月9日に国立民族学博物館第4セミナー室において一般公開国際シンポジウム「カナダ先住民の歴史と現状」を開催した。シンポジウムやシンポジウムの開催によって成果の一部を発信した。
- (4) 構築したシステムを介して、2018年3月までにデータベースを一般公開した。

成果

民博が収蔵するアラスカ、カナダからグリーンランドにかけての2,975件の北米北方先住民の文化資源に関して、基本情報を精査し、修正するとともに、文献情報などを新たに付加し、民族名、資料名、キーワードで検索できるフォーラム型のデータベースを構築し、公開した。現地語の記載に関しては、対象民族が40以上におよぶため不十分な部分もあるが、日本で初めての北米北方先住民の文化資源に関するデータベースであるとともに、同情報をソースコミュニティのみならず、一般の方々や研究者、学生と共有することができるようになった。

また、データベースに基づいて企画展示やシンポジウムを開催し、その成果をネット以外でも広く公開した。

成果の公表実績

データベースの公開以外に、下記の成果がある。

出版物

岸上伸啓

2017 「民博収蔵の北米北方先住民族資料の高度情報化と情報発信」『民博通信』156: 10-11。

2017 「カナダの先住民社会——多様な文化の展開」細川道久編『カナダの歴史を知るための50章』pp. 34-39, 東京：明石書店。

展示

国立民族学博物館2017年度秋季企画展「カナダ先住民の文化の力——過去、現在、未来」(2017年9月7日から12月5日まで)

公開シンポジウム

一般公開国際シンポジウム「カナダ先住民の歴史と現状」2017年9月9日、国立民族学博物館第4セミナー室

電子媒体

国立民族学博物館2017年度秋季企画展「カナダ先住民の文化の力——過去、現在、未来」(2017年9月7日から12月5日まで)の解説

<http://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/thematic/canada20170907/commentary>

データベースの整備実績

標本件数：2,975件

レコード件数：44,625レコード

実施状況

新構築後の「中国地域の文化」展示場の展示をウェブ上で公開し、国内外の研究者やソースコミュニティの人々、一般の人々との間での双方向的情報交換をおこない、それを通して中国地域の文化への相互理解を促進するとともに、標本資料に関する情報の充実もはかることが本プロジェクトの目的である。

昨年度において、本プロジェクトで対象とする展示資料の範囲を定め、展示場とは異なるウェブ公開の特質を考慮してウェブ用の「展示単位」の枠組みを設定し、対象となる標本資料のキャプションの3言語4字体（日本語、英語、中国語簡体字、中国語繁体字）によるデータの準備が整い、本年度は、その基礎の上に、ウェブ公開への準備を進めた。

まず、ウェブ上のシステムデザインを本フォーラム編集部ならびにシステム開発作業業者とともに具体的に検討し、本データベースに適したデザインを策定した。それに基づき、全体の展示場見取り図や本プロジェクトの扉頁のアイコンをデザインし、ファイルデータを作成するとともに、イントロダクションと9セクションで合計10ある各部分を展示場の展示に沿ってわかりやすく提示するために、セクションの下位区分としての「ウェブ分類」を検討し、設定した。それに基づき、各標本資料、展示単位について、写真やイラストなど画像データの選定ならびにエクセルファイルへの整理をおこなった。他方、以上の新たな作業部分について、必要なキャプションを作成し、3言語4字体で発信するために翻訳作業をおこなった。他方、昨年度にいちおう点検や翻訳の作業が終了した全標本資料の3言語4字体のデータについて、最終確認のための点検をおこない、必要な修正を施した。

成果

本年度末にはウェブ公開するために必要な全ての作業を、注意深く進め、目標を達成した。合計1,160件近くある本プロジェクトが対象とする全ての標本資料に関して、必要な3言語4字体のデータを整理した。

昨年度、基本的キャプションデータの翻訳作業は終了していたが、個々に点検作業を進めた結果、標本資料名の付け方などに関して、再考すべき問題点がわかり、より正確でわかりやすい表記に修正した。また、展示単位を並べる順番について、展示の意図を十分に伝えるために必要な順番の修正をおこなった。

成果の公表実績

2017年10月7日から8日にかけて本館で開催された学術潮流フォーラムⅠ：人類基礎理論研究部・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」において、本プロジェクトの作業プロセスで判明した画像の活用に関する展示場とウェブ空間との違いについて、「『中国地域の文化』展示のフォーラム型情報ミュージアム（Info-Forum Museum for Regional Cultures of China Gallery）」と題する報告をおこなった。

データベースの整備実績

標本件数：標本資料数 1,159件

レコード件数：32,000件

実施状況

5月21日（日）と12月23日（土）の2回にわたって研究会を開催し、1975年に民博が国文学研究資料館史料館（旧文部省史料館）から受け入れた保谷民博資料のデータベースを公開する準備を実質的に進めていった。昨年度には、保谷民博の資料を収集するなどのかたちで貢献した人物（団体やエクスペディションも含む）についての人名データベースと、保谷民博の資料管理原簿をもとにした資料データベースの2つを構築したが、今年度はとくに、人名データベースを全面的に更新して公開する準備をおこなった。

人名データベースの更新にあたっては、人名の正しい読みかたや生没年を確認するとともに、著作や参考文献などを整理し、事績やコレクションとの関係についても詳細に記述して、インターネットや出版物でも読める体裁に整えていった。また、これらの情報を英語でも読めるよう、翻訳などの段取りも進めていった。いっぽう、資料データベースに関しては、必要最小限の変更を加えるにとどめた。特定の人物が集めた資料は画像でも一覧できるので、

英語読者であっても、一定のレベルの情報を得られるようになってきている。これらのデータベースは年度末にインターネットでも利用できるよう、最後の作業を進めているところである。

成果

データベースの整備実績で述べるとおり、公開用のデータベースとして、人名データベース（日本語）と人名データベース（英語）、資料データベース（日本語）の3つを完成した。初年度末に構築したデータベースには、公開すると問題が生じかねない人名が含まれる場合があるため、当初は人名や資料の取捨選択をおこなって公開用データベースを構築する予定だったが、人名の検討が進んだ結果、「採集者」欄に登場するすべての人名とすべての資料を公開することにした。ただし、資料に関する記述の一部を伏字にした。この結果、人名324個人24団体を詳しく紹介するようにしたほか、その他の169個人も検索用見出しとして表示するようにし、21,310点の資料（正確には、資料管理原簿の記述件数）についての情報を公開することができた。

成果の公表実績

初年度（2016年度）の報告書を書き終えた後、年度末になってから、国立民族学博物館調査報告（SER）の一冊として飯田卓・朝倉敏夫（編）『日本民族学協会附属博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』を刊行した。これは、以前におこなっていた研究プロジェクトから引き継いだ作業の成果でもあるが、本プロジェクトが対象としているコレクションのうち、民博に所在していながら登録されていなかった資料634点の履歴を明らかにしたものである。

2年間のプロジェクト期間を通じて、刊行できたのは上記のみである。公開シンポジウムを開催するには時間が不足していたが、もし許されるのであれば、本プロジェクトをもう1年延長して、データベースの普及も図るようなシンポジウムも開催したいと思っている。

データベースの整備実績

標本件数： (人名) 約348件 (資料) 21,310件 (推定)
 レコード件数： (人名・日本語) 348件×4項目=1,392件
 (人名・英語) 348件×2項目=696件 (他の2項目は日本語と共通)
 (資料) 21,310件×40項目=852,400項目 (ただし空欄も含む)

「楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」

代表者：福岡正太 2016年4月～2018年3月

実施状況

楽器資料についてのデータを研究機関間で共有し、共同でデータの付与や修正をおこなえるようにすることを目指し、以下の作業を進めた。

(1) 基礎となる楽器データの作成

近い将来の寄贈受入を想定している2つの楽器コレクションについて、データ作成をおこなった。奈良市の故大西尚明氏のコレクション75点と神戸市の立田雅彦氏のコレクション約1,300点について、1. 整理番号の付与、2. 写真撮影、3. 資料データの作成（楽器分類コード、分類名、現地名、推定使用地域、寸法等）をおこなっており、2017年度中に基礎的データを完成させた。ただし、どちらのコレクションも研究者の収集によるものではなく、収集時の調査データに欠けている。このプロジェクトにより作成したシステムにより、プロジェクト終了後も専門家の協力を得て、データを充実させていく予定である。

(2) データベースの設計開発

民博内外の複数の研究者等の協働によるデータ作成を可能とするため、オンラインでデータ入力を可能とするインターフェースを2017年度内に開発する予定で、現在最終的な仕様をまとめた。

(3) 共同による楽器データ作成の試み

上述の大西コレクションおよび立田コレクションについて、データの充実をはかるため、収集者とそのご家族にはデータのとりまとめを依頼している。また、2018年度秋に民博で開催を予定している南アジアの弦楽器をテーマとした企画展のデータとりまとめにもこのシステムを利用し、関係者の協力を得てデータの充実をはかる予定である。いずれも、上述(2)のインターフェースが完成した時点で、フォーラム機能を利用してネット上でのオンライン入力を開始する。

成果

このプロジェクトでは、民博が所蔵する楽器資料に対し、ザックスとホルンボステルによる楽器分類コードと地域・民族分類（OWC）コードを付与した楽器データベースを作成することで、楽器資料を体系的に検索できるようにした。このことにより、一定の地域や民族の楽器を網羅的に調査したり、同種の楽器の広がりを調査したりすることが容易となり、所蔵資料を音楽文化の研究に活用する可能性を大きく広げることができた。

またフォーラム機能により、インターネット上で研究者等が協働してデータ入力をおこなうインターフェースを開発することにより、多くの研究者等の知識をデータベース上に蓄積していくことが可能となる。これは楽器の分布と関連、材質や構造、演奏法など、多様な観点からの比較研究をうながして楽器研究を一層深めていくことを可能にするとともに、展示活動や資料の保存管理に研究者等の知識を生かしていくことにもつながるだろう。

成果の公表実績

「楽器資料のフォーラム型情報ミュージアム構築の試み」東洋音楽学会第68回大会発表、沖縄県立芸術大学当蔵キャンパス、303教室（2017.11.12）

「新世紀ミュージアム 浜松市楽器博物館」『月刊みんぱく』41(11): 16-17（2017.11.1）

「楽器の分類とデータベースの作成」『民博通信』158: 10-11（2017.9.29）

データベースの整備実績

標本件数：1,375

レコード件数：7,000

「日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト」

代表者：日高真吾 2016年4月～2018年3月

実施状況

研究最終年度となる2017年度は、文化庁による民俗資料分類をもとに、民博の展示内容に準じた分類項目を作成し、全展示資料の分類を完了した。そして各分類項目については、研究者、大学生、日本文化に関心をもつ市民を射程に、簡単な解説を加えることとし、さらにこれらの解説、資料情報をすべて英訳し、英語ページを作成し、国際的にも利用できるDBへと成長させた。また、ここで試みた資料分類をもとにした台湾の民俗資料への展開の可能性と、国内に多数存在する学校所在の民具の資料整理を試みる準備を整え、学校教育で利用できるDBの制作と教育ツールとしてのアウトプットの方法論の策定へと展開する準備を整えた。

次に2017年度に公開予定のパノラマムービーをもとにしたバーチャルミュージアムDB（仮称）とリンクづけをおこなうことで、展示資料の関連映像も提供できるDB環境を整備するとともに、本DBに全国の県立博物館のDBのリンクづけを呼びかけ、協力いただける博物館のDBをリンクづけする準備を整えた。

成果

本プロジェクトの研究成果としては、文化庁の民俗資料分類をもとにした、民博版の資料分類項目を設け、本DBの対象資料の分類を完了した。これらの作業では、国立歴史民俗博物館、東北学院大学、京都造形芸術大学、東北歴史博物館と連携するとともに、地域コミュニティとして研究代表者がフィールドとしている気仙沼の市民の方々と分類項目の内容や資料情報の示し方について意見交換をおこない、内容を整理し、まさにフォーラムの研究環境のもと、DBの制作を実現できた。その結果、本DBにおいて検討した民俗資料分類において、従来おこなわれている一資料一分類という排他的分類法では、資料の持っている文化情報を伝えるには不十分であり、生活文化を軸とした資料分類では、一資料に複数の資料分類をもたせる重複的分类法が適切であることの可能性を新たな学術的知見として発見した。

成果の公表実績

10月21日、22日に別府大学において、国際フォーラム「地域文化の再発見——大学・博物館の視点から」を開催し、趣旨解説の中で本事業を紹介するとともに、日本と台湾の事例を比較しながら日本の文化展示資料が表象する地域文化を発見するための大学機関の役割について議論を進めた。また、日本民具学会の学会誌である『民具研究』に査読論文「国立民族学博物館「日本の文化展示場」の展示資料をデータベース化する試み」を投稿し、掲載が認められた。論文は、今年度中に「民具研究」157号に掲載されることとなっている。

データベースの整備実績

標本件数：2,012件

レコード件数：152,912件

「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」

代表者：西尾哲夫 2017年4月～2019年3月

実施状況

本プロジェクトは、①片倉もとこ名誉教授が収集したアラビア半島遊牧社会に関連する資料コレクションに関する調査ならびにデータベース化、②近現代イラン民衆工芸品であるグラック・コレクションに関する調査ならびにデータベース化、③中東地域からグローバル化したコーヒー文化にかかる標（しめぎ）コレクションに関する調査ならびにデータベース化の三つのサブプロジェクトから構成されるが、本年度においては、三つのサブプロジェクトに共通する入力項目リスト、ならびに実際の入力作業に向けたサブプロジェクト毎の入力用テンプレートを、フォーラム型情報ミュージアム編集チームと共同で検討しながら作成し、基本情報データベース作成を開始した。

フォーラム的な情報収集作業を実践していくための体制作りのために、アラビア半島遊牧社会資料のデータベース化については、協力機関である片倉もとこ記念沙漠財団とサウジアラムコと共同で現地協力者を招へいし、ワークショップを開催するとともに、民博共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」との共同調査として、当該収蔵品の熟覧による資料確認と情報付加作業を実施した。グラック・コレクションのデータベース化については、協力機関であるイラン国立博物館と正式に学術協定を締結したうえで同博物館を含めて海外の美術館等に所蔵される類似のイラン工芸品コレクションの共同調査を開始した。コーヒーコレクションのデータベース化については、旧所蔵者の関係者や協力機関であるUCCコーヒー博物館との同コレクションの文化史的位置づけに関するワークショップならびに調査を実施し、その成果発信として同コレクションにかかる展示活動を実施する一環として、新規に受け入れた同コレクションの成立過程および各収蔵品にかかる基本情報の整理を実施した。

成果

全体に関わることとしては、データベースのフォーマットを確認し、データベース全体の設計をおこない、基礎的データの入力作業を開始するとともに、多言語化（英語に加え、収集／使用地域の言語＝アラビア語やペルシア語等）のフォーマットを整理した。アラビア半島遊牧社会資料のデータベース化については、約320件（民博所蔵200件、片倉もとこ記念沙漠財団所蔵約120件）の標本資料のデータベース化作業として、現地よりの被招へい者とともに共同研究の一環で熟覧作業と情報付加作業を開始した。グラック・コレクションのデータベース化については、176件の標本資料のデータベース化のために、イラン国立博物館所蔵の関連資料の熟覧調査ならびにグラック・コレクションに関する文献資料収集を開始した。コーヒーコレクションのデータベース化については、約300件の標本資料のデータベース化のために、標（しめぎ）コレクションの元所有者の方より各資料に関するより詳細な聞き取り調査をおこなうとともに、同コレクションの文化史的な位置づけに関する研究会ならびに展示活動をおこなった。

成果の公表実績

アラビア半島遊牧社会資料のデータベース化については、サウジアラビアを中心としてアラビア半島の文化遺産保護に関する研究者・研究機関および一般参加者を対象とした、国際シンポジウム「アラビア半島の文化遺産保護の現状と展開：サウジアラビアを中心として」を横浜情報文化センターにて12月16日に開催し、サウジアラビアのキング・ファイサルセンターとキング・アブドゥルアジーズ世界文化センターより学芸員を招へいし議論した。また12月19日に両者とともに本館のサウジアラビアの関連収蔵品にかかる情報集のためのワークショップを本館にて開催した。グラック・コレクションのデータベース化については、2018年3月にイラン国立博物館館長を招へいし、ワークショップを開催する。コーヒーコレクションのデータベース化については、開館40周年記念新着資料展示「標交紀（しめぎ ゆきとし）の咖啡（コーヒー）の世界」（9月28日～11月14日）を開催するとともに、関連するフォーラム的な一般公開ワークショップ「標交紀の咖啡とは？」（10月9日）を開催し、標交紀の数少ない弟子のひとり、門脇祐希氏を講師にお迎えして、標の生涯と世界各地のコーヒー文化について本館教員とトークをおこない、特に同コレクションの成立状況に関する貴重な情報を得ることができた。展示に関連して、ウィークエンド・サロン「アラビアコーヒーにみるアラブ世界のおもてなし文化」や「心の扉を開ける鍵としてのコーヒー——パレスチナ・イ

スラエルでのフィールドワークから」等を実施した。国立民族学博物館現代中東地域研究拠点と共同で、人間文化研究機構が学術協定を結んでいるフランス社会科学高等研究院（EHESS）より若手研究者の Laura Assaf 博士を招へいし、アブダビにおける若者文化のための公共空間を現出させているコーヒーショップの社会的役割の現代的変容に関する講演会を10月27日に開催した。さらに一般向けの講演会として、協力機関である UCC コーヒー博物館において同館開30周年を記念講演会「アラビアンナイトとコーヒー～禁忌から世界の嗜好品へ」（10月8日、講師・西尾哲夫）を実施、同じく同館ならびに UCC 本社の協力のと、みんぱく友の会との共同で第76回体験セミナー「発祥の地、アラブのコーヒー文化」を実施した。

「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」

代表者：太田心平 2017年4月～2020年3月

実施状況

本館が所蔵する標本資料のうち、朝鮮半島関連の3,000件について、標本資料DBに記載されている資料情報を強化した。

具体的には、これらすべての資料情報に、韓国政府が定めた「2000年式転写法」による現地語（韓国語）名称のアルファベット表記を付した。この作業は計画になかったものの、米国側の共同研究者たちとの議論の結果、国際的に使用できるデータベースには不可欠なものだという判断がくだったため、追加したものである。

また、予定していた作業も、当初の見込み以上の成果を達成できた。2,400件について、欠落していたハンゲル表記を追加し、カテゴリ検索のためのキーワードを付すことも出来た。さらに、日本語名称が問題をはらんでいた2件について情報を修正でき、記載されていた制作年に疑問があった2件について、米国と韓国の専門家の監修をえて、明らかな齟齬であることを立証した。

これらの作業により、現行の展示に用いられているすべての標本資料（1,099点）の資料情報すべてが、現時点で最善の状態に更新された。また、収蔵庫にある標本資料の欠落情報や情報齟齬も、予定以上の速度で整備されつつある。

成果

上記の作業を、米国と韓国の共同研究者たちを含めた議論をふまえて実施したことで、国際的に有用なデータベースにはどのような項目が必要となるかが明らかとなった。特に現地語名称の表記をするためには、カタカナ表記や、特殊記号を用いなければならない「マッキューン＝ライシャワー方式転写法」ではなく、韓国政府公認の「2000年式転写法」を用いてアルファベット転写すべきだとわかったのは、こうした議論の成果である。これにより、本データベースにより高い汎用性を整備できたものと考えられる。

また、上記の議論が効率的に進んだことにより、本年度に予定していた標本件数（1,200件）およびレコード件数（3,600点）を上回る、標本件数3,000件、レコード件数5,404点の整備を終えることが出来た。

そして、既存の資料情報に記載された制作年に疑問が呈されていた2件については、ソースコミュニティに属する韓国の共同研究者と、第三者という公平な立場にある米国の共同研究者の協力を得られたからこそ、訂正して整備できたものと評価できる。

ただし、計画時に示したとおり、本館で所蔵する朝鮮半島関連の標本資料のなかには、まだ数百件に資料情報の不備が見られる。また、本館で所蔵する朝鮮半島関連の標本資料すべてに「2000年式転写法」による現地語名称をつけるためには、まだ数ヶ月分の作業量が残されている。

成果の公表実績

太田心平 「日本国立民族学博物館の研究・展示・教育と韓国文化研究」、慶北大学人文学部コア事業、2018年2月5日。

データベースの整備実績

標本件数： 3,000件

レコード件数： 7,804点

共同研究

2017年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2017年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	合計	
一般	館内	課題1	1	0	10	13
		課題2	1	1	2	
	客員	課題1	1	1	0	2
		課題2	0	0	1	
	公募	課題1	6	2	11	14
		課題2	0	0	1	
若手	課題1	1	1	2	4	
	課題2	1	0	1		
計		11	5	28	33	

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
現代「手芸」文化に関する研究	上羽陽子	1	2014-2017
近世カトリックの世界宣教と文化順応	齋藤 晃	1	2014-2017
家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化/脱制度化を中心に	森 明子	1	2014-2017
○ 政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する	太田好信	1	2014-2017
○ 呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して	川田牧人	1	2014-2017
○ 資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から	長谷川清	1	2014-2017
○ モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	是澤博昭	2	2014-2017
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野泰彦	2	2015-2018
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾瑞穂	1	2015-2019
驚異と怪異——想像界の比較研究	山中由里子	1	2015-2018
応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽典生	1	2015-2018
○ 考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	ERTL, John	1	2015-2018
○ 宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田浩樹	1	2015-2018
○ 放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原聖乃	1	2015-2018
○ 医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働	飯田淳子	1	2015-2018
○ 個一世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤 剛	1	2015-2018
○ 確率的事象と不確実性の人類学——「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤潤平	1	2015-2018
● 高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究	呉屋淳子	1	2015-2017
捕鯨と環境倫理	岸上伸啓	1	2016-2019

世界のビーズをめぐる人類学的研究	池谷和信	2	2016-2017
もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究	卯田宗平	1	2016-2018
会計学と人類学の融合	出口正之	1	2016-2018
「障害」概念の再検討——触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	廣瀬浩二郎	1	2016-2018
○ 物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田浩志	2	2016-2019
○ 音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究	野澤豊一	1	2016-2019
○ 現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷幸代	1	2016-2019
● 消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	大石高典	1	2016-2018
● テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田晶子	1	2016-2018
博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から	園田直子	2	2017-2020
○ 人類学/民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生勝美	1	2017-2020
○ 文化人類学を自然化する	中川 敏	1	2017-2020
○ ネオリベラリズムのモラルティ	田沼幸子	1	2017-2020
● モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相	八木百合子	1	2017-2019

「現代「手芸」文化に関する研究」

本研究は、日本の手芸に相当する余暇的・趣味的仕事とその造形物の現代的展開を明らかにする。手芸とは、主に女性を担い手とする家庭内での商業化されていない趣味的な制作を意味する概念として明治期に形成された。そのため手芸の領域は、美的に評価された美術や利潤を生みだす工芸に比べて二重に周辺化されてきたといえる。しかし、現在、世界各地で、従来の日本の手芸概念ではとらえられない余暇的・趣味的仕事が多様な展開をみせている。それらは、男性も担い手に含み、アート、フェアトレード商品、エスニック雑貨などとして美術や市場の領域にも進出している。また、趣味を通じた人的ネットワークの形成や、それらの災害後におけるケアとしての機能などが注目を集めている。こうした従来の手芸概念ではとらえきれない新たな領域を「手芸」として捉え返し、その現代的展開を民族誌的に分析し、新たな「手芸」概念の創出を目指すものである。

研究代表者 上羽陽子

班員 (館内) 金谷美和

(館外) 蘆田裕史 五十嵐理奈 木田拓也 坂田博美 新本万里子 杉本星子 中谷文美
野田涼美 平芳裕子 ひろいのか 宮脇千絵 村松美賀子 山崎明子

研究会

2017年10月1日(日) 10:00~17:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

中谷文美 (岡山大学) 『飾る×画一化・過剰装飾・自己の空間』概説』

蘆田裕史 (京都精華大学)、山崎明子 (奈良女子大学)、上羽陽子 (国立民族学博物館) 『飾る×画一化・過剰装飾・自己の空間』諸相』

出席者全員「全体討論」

蘆田裕史 (京都精華大学) 『仕分ける×制度・アイデンティティ』概説』

木田拓也 (武蔵野美術大学)、南真人 (国立民族学博物館)、野田涼美 (京都市立芸術大学)、五十嵐理奈 (福岡アジア美術館) 『仕分ける×制度・アイデンティティ』諸相』

出席者全員「全体討論」

上羽陽子 (国立民族学博物館) 「今後の成果とりまとめについて」

2017年11月19日(日) 10:00~17:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

金谷美和 (国立民族学博物館) 『『つながる×社会・空間』概説』

杉本星子 (京都文教大学)・塩本美紀 (NPO 法人ウィメンズアイ)・山崎明子 (奈良女子大学) 『『つながる×社会・空間』諸相』

出席者全員「全体討論」

杉本星子 (京都文教大学) 『『教える×関係性・伝承』概説』

新本万里子 (広島大学)・齋藤玲子 (国立民族学博物館)・ひろいのぶこ (京都造形芸術大学) 『『教える×関係性・伝承』諸相』

出席者全員「全体討論」

上羽陽子 (国立民族学博物館) 『今後の成果とりまとめについて』

2018年1月21日(日) 10:00~17:00 (国立民族学博物館 第2演習室)

木田拓也 (武蔵野美術大学) 『『稼ぐ×社会的階層・プロとアマ』概説』

平芳裕子 (神戸大学大学院)・坂田博美 (富山大学)・村松美賀子 (京都造形芸術大学)・宮脇千絵 (南山大学) 『『稼ぐ×社会的階層・プロとアマ』諸相』

出席者全員「全体討論」

齋藤玲子 (国立民族学博物館) 『藤戸竹喜の木彫から』(企画展展示場)

出席者全員「成果出版に関する打ち合わせ」

成果

共同研究の最終年度である今年度は、3回の研究会を開催した。これまでの議論の中で「手芸」という概念・様態は、周囲との関係性とともにより柔軟な視点でみるために、一つのテーマとその周辺にあるキーワードを組み合わせて、トークセッションという形を採択した。第1回は、『飾る×画一化・過剰装飾・自己の空間』『仕分ける×制度・アイデンティティ』、第2回は、『つながる×社会・空間』『教える×関係性・伝承』、第3回は、『稼ぐ×社会的階層・プロとアマ』とした。各研究会の中で成果とりまとめに関する議論をすすめ、単行本として刊行することで合意を得た。タイトルは、『「手芸」のかたち——現代手芸を考えるための6つのアプローチ』(仮題)を予定している。

「近世カトリックの世界宣教と文化順応」

本研究は、16~18世紀のアジアとアメリカにおけるカトリック教会の宣教、とりわけ「順応」と呼ばれる政策に焦点を当て、ローカルな事例の比較とヨーロッパの世界観・人間観の検討を通じて、その歴史的意義を明らかにする。順応とは、宣教師が現地の規範や慣習を学ぶことで地元社会に溶け込み、現地人の改宗を促す政策である。言語、衣食住、礼儀作法、法律、学問など、現地文化の幅広い側面が対象となる。事例としては、アレクサンドロ・ヴァリニャーノの日本宣教方針やマテオ・リッチの中国古典研究など、アジアのイエズス会の政策が有名である。特に中国での政策は「典礼論争」というカトリック教会を二分する論争を引き起こした。

近世カトリックの宣教師の順応はしばしば今日の文化相対主義の先駆けとみなされるが、この評価は正しいのだろうか。両者の共通点と相違点はなんだろうか。今日の相対主義的文化概念が近世カトリックの世界宣教に負うものがあるとするならば、それはなにか。これらの問いに答えるため、本研究は、宣教師の順応をローカルなコンテクストに位置づけ、通文化的実践としてのその特徴を探る。同時に、宣教師が順応に与えた理論的根拠を世界の諸文化の多様性についてのヨーロッパの思索の流れに位置づけ、その思想史的意義を解明する。

研究代表者 齋藤 晃

班員 (館内)

(館外) 網野徹哉 井川義次 王寺賢太 岡美穂子 岡田裕成 折井善果 小谷訓子
鈴木広光 中砂明德 新居洋子 真下裕之

研究会

2017年6月17日(土) 13:00~19:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

共同研究員全員・研究成果の出版に関する全体会議

2017年12月23日(土) 13:00~19:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

共同研究員全員・研究成果の出版に関する全体会議

成果

本研究では最終成果として日本語の編著の刊行を目指しているが、本年度はその執筆・編集作業を調整し、前進させるための会合を2回開催した。

1回目の会合では、メンバー各人に執筆予定の論文の具体的構想を提示してもらった。その際、どのような種類の「順応」を取り扱い、それに関してどのような問題を提起し、どのような知見を提示するのか、説明してもらった。この会合ではまた、研究代表者が編著の目次案を提示し、参加者全員でその妥当性について議論した。

2回目の会合では、事前にメンバー全員の原稿を全員に配布し、読了してもらった。そのうえで、当日には原稿をひとつひとつ全員で論評し、質の向上をはかった。また、完成原稿に基づいて、研究代表者が新たな目次案を作成し、参加者全員でその妥当性について議論した。

これらの会合を通じて、論集全体のテーマとアプローチの統一性が確立された。また、個々の論文に関しても、問題設定の妥当性や論旨の明確さが格段に向上した。

「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化/脱制度化を中心に」

本研究は、保育や介護をめぐるケアを、家族と社会の境界面でやりとりされるサービスにとらえ、その制度化/脱制度化のありようを、比較研究するものである。この分析を通して、人間社会は、社会と家族のインターフェースをどのように編成してきたのか、それは今後どうありうるのか展望する。

子供の保育や老人・病人の介護などのケアと呼ばれるサービスは、その一部を家族の外部で、家族外の担い手によって行なうことが可能であり、制度化もされている。このサービスを公的な支援として行うのが福祉であるが、今日、その制度は見直されつつある。福祉国家で脱制度化の動きがみられる一方で、行政の施策が未発達な地域で、ネットワークを駆使した独自の制度があらわれている。『家族に介入する社会』を著したジャック・ドンズロの視点も参照しながら、個別のローカルな状況のもとにある保育や介護の、制度化/脱制度化をとらえて比較検討する。背景には、現代世界の社会像はどのように構想されるのか、という問題関心がある。

研究代表者 森 明子

班員 (館内) 工藤由美 戸田美佳子

(館外) 天田城介 岩佐光広 岡部真由美 加賀谷真梨 加藤敦典 木村周平 沢山美果子

高田 実 高橋絵里香 土屋 敦 内藤直樹 中野智世 西 真如 浜田明範

速水洋子 モハーチ・ゲルゲイ

研究会

2017年4月22日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

全員 成果公開のための議論1

全員 成果公開のための議論2

全員 総合討論

2017年4月23日(日) 9:30~13:30 (国立民族学博物館 大演習室)

天田城介(中央大学)「超高齢社会/人口減少社会における高齢者ケアと家族の変容」

高田 実(甲南大学)「生とケアの歴史学を考える——福祉の複合体の視点から」

討論

2017年6月24日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

全員 成果公開のための議論3

全員 成果公開のための議論4

全員 総合討論

2017年6月25日(日) 9:30~13:30 (国立民族学博物館 大演習室)

全員 成果公開のための議論5

全員 成果公開のための議論6

総括

成果

最終年度として、成果刊行にむけた議論を中心に行った。3年半にわたる研究から、ケアの実践が、国家や家族や市場など異なるセクターの交錯する領域でさまざまなアクターを動員して社会のインフラを支えている状況が明らかになった。このようなケアを通して、国家的なものゆらぎや、制度の隙間、家族が変容し再編成している局面をとらえて描くことについて議論を重ねた。また、各自の記述を集めた論文集を、どのように構造化できるか、論文集として扱うことになる素材の多様さ、そこに通底する問題関心、論文同士の対話から引き出そうとする発展性などを含めて、意見交換した。

成果の一部を、5月末に開催された日本文化人類学会第51回研究大会で分科会を組織して発表した。また、12月に開催されたコロッキアム“Thinking about an anthropology of care: A Discussion with F. Aulino and J. Danely” (National Museum of Ethnology, Osaka) において、英米の2人の人類学者とともに議論した。後者は本共同研究会と平行してすすめてきた科研費による。

「政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する」

21世紀になり、エスニシティ（文化的実践による社会的分類）や人種（肌の色による社会的分類）が構造化された社会に住み不利益を受けている人々は、リベラリズムの理念に訴える「カラープライド主義」や「逆差別」という主張が世界規模で一定の支持を得ているなかで、不利益の是正を求める根拠すら失いかねない状況に直面している。本共同研究は、歴史的・民族誌的資料に基づいて、被支配者側からの政治的抵抗の基礎となる分類の編成を解明し、リベラル民主主義の陥穽を批判的に乗り越える契機とする研究視座の確立を目指す。より具体的には、これまでコロナリズムの歴史において不可視だった支配者側のエスニシティや人種（たとえば、アイヌ民族のいう「和人（シャモ）」、沖縄の人々が発する「ナイチャー（ヤマトンチュ）」、カナカ・マオリが用いる「ハオレ」、グアテマラ・マヤ人が口にする「カシュラン」）を可視化する視点として政治的分類という考え方を提示する。

研究代表者 太田好信

班員（館内）竹沢尚一郎 關 雄二 寺田吉孝
（館外）青木恵理子 池田光穂 石垣 直 川橋範子 慶田勝彦 辻 康夫 深山直子
細川弘明 松田素二 山崎幸治 山本真鳥 横田耕一

研究会

2017年7月1日(土) 14:00~18:30 (国立民族学博物館 第1演習室)

事務連絡

山本真鳥 (法政大学) 「欧米人のまなざしに抗して」ならびに質疑と討論

竹沢尚一郎 (国立民族学博物館名誉教授) 「人類学を開く」ならびに質疑と討論

2017年7月2日(日) 10:00~15:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

關 雄二 (国立民族学博物館) 「考古学におけるポストコロニアル研究」ならびに質疑と討論

慶田勝彦 (熊本大学) 「20世紀人類学のアフターライフ」ならびに質疑と討論

2017年11月11日(土) 14:00~18:55 (国立民族学博物館 第4演習室)

事務連絡

青木恵理子 (龍谷大学) 「『あなたたち』と『彼ら』についての語り——インドネシア・フローレス島の『歴史』における政治と倫理」。文脈化と討論。

深山直子 (東京都立大学) 「政治的分類としてのマオリ・日常の実践としてのマオリ」。文脈化と討論。

山崎幸治 (北海道大学アイヌ先住民研究センター) 「アイヌからのまなざし——展示実践からの一考察」。文脈化と討論。

2017年11月12日(日) 10:00~16:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

石垣 直 (沖縄国際大学) 「台湾原住民研究と日本の民族・人類学——『他者に相対する倫理』の視点から」。文脈化と討論。

川橋範子 (名古屋工業大学) 「ライティング・カルチャーとフェミニスト・アンソロポロジーが紡ぎ出すアフターライフ——『有徴』の立場性からの応答」。文脈化と討論。

横田耕一 (九州大学・名誉教授) 「集団 (先住民・マイノリティ) を不在化した『近代憲法 (学)』への集団からの異議提起を受けて」。文脈化と討論。

成果報告を作成するにあたり、最終確認のための事務連絡。

成果

2017年度は、本研究会の最終年度にあたるため、成果報告を念頭においた。二度開催した共同研究会では、事前に各発表者の論文を回覧し、共同研究会当日は合評会形式で議論を進めた。合評会形式とは、各執筆者がすでに回覧した論文を文脈化し（30分間）、その後質疑応答（1時間）するという構成である。各発表者には、研究代表者の論文との関連において議論を進める「クリティーク形式」の論文を準備するように依頼していた。これは、共同研究会のテーマとの関連を保持したまま、各自の研究領域へとテーマを拡大するための手段であったが、成果報告をまとめるためには有効であったと判断する。個別のテーマとしては、たとえば、21世紀において『文化を書く』をどう評価するか、リベラル民主主義の陥穽とは何か、コロニアリズムが作りだした異種混濁的状況を前にし学問における政治的、そして倫理的責務とは何かなど、これまで共同研究会で論じられてきたテーマについて、より深い意見交換をおこなった。

「呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して」

現代世界を構成するさまざまな実践=知（本研究では、感覚を含む行為と知識・信念の双方にわたる概念として、便宜的に「実践=知」という語を用いる）のなかで、呪術的实践=知はいかなる位置をしめ、またそれ以外の諸実践=知といかなる関係性をもつのか。本研究では、呪術的实践=知とそれ以外の諸実践=知（すなわち科学、宗教、病院医療、学校教育、メディア表象など）との関係性を明らかにすることによって、現代世界における呪術の個別性（特殊性）と普遍性（他の諸実践=知との共通性）をうきほりにすることをめざす。

本研究は、先立つ民博共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」（2007～2009年度、代表：白川千尋）とその成果論集『呪術の人類学』（2012年、白川・川田編、人文書院）をふまえつつ、その基本的枠組みであった「言葉／行為」を、宗教・世界観や制度との関わり、また世界とのインターフェースとしての感覚などの観点を組み込むことによって、「信じる／知る／行なう／感じる」の各理論的次元へ継承的に発展させる。それを通じて呪術論の観点から、現代世界における実践論や知識論を刷新することをこころざす。

研究代表者 川田牧人

班員（館内） 飯田 卓 藤本透子 松尾瑞穂
（館外） 飯田淳子 梅屋 潔 片岡 樹 黒川正剛 近藤英俊 島藺洋介 白川千尋
田中正隆 中川 敏 中村 潔

研究会

2017年6月3日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館 第1演習室）

津村文彦（名城大学）「東北タイにおける呪術・精霊と感覚」

村津蘭（京都大学）「妖術師のリアリティの生成——ペナンの新宗教を事例として」

全体討論：成果論集の刊行に向けて

2018年1月27日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館 第6セミナー室）

成果報告書執筆計画発表

飯田 卓（国立民族学博物館）、飯田淳子（川崎医療福祉大学）、梅屋 潔（神戸大学）、片岡 樹（京都大学）、黒川正剛（太成学院大学）、島藺洋介（大阪大学）白川千尋（大阪大学）、田中正隆（大谷大学）、中川 敏（大阪大学）、中村 潔（新潟大学）

成果

昨年度の研究会において、本共同研究のまとめの方向性として、「感覚」と「マテリアリティ」という鍵概念が浮上した。それをうけ第一回研究会では、物質的可視性や身体感覚を通して呪術的リアリティが生成するプロセスを研究する二人のゲストスピーカーをお招きして、研究発表ならびに討議をおこなった。現代社会における我々の生活は呪術的实践=知が介在することによっていかに組み立てられるのかという問いかけは本共同研究の初期からの大きな課題であったが、具体的なものや身体的可触性に着目することにより、出来事の主知主義的理解のおよばない側面にも光をあてる可能性をひらいた。最終年度にあたり研究会の開催は二回にとどまったが、二回め（研究期間最終回）の研究会では、成果報告に向けた全員による検討会（論文構想・概要発表）をおこなった。その結果、上記の課題を中心とした「感覚とマテリアリティの呪術論」に加え、「現代世界の知識実践環境における呪術」というもう一本の柱を立て、二部立てで成果論集を構成する着地点を見いだした。

「資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から」

「歴史」を表象、叙述、再編成し資源化する現象は人類社会では普遍的に見られる。近年、中国のインパクトが強まり、日本や世界に多大な影響を及ぼしており、中国に関する関心が高まり、その研究が緊急の課題になっている。また、中国では「中華民族」の一体性が政治的に強調される傾向が顕著である。さまざまな「歴史」の細片をハイブリッドな形で縫合して構築し、それを実利に結びつくものとして「資源化」しがちな傾向が見られる。「歴史」を「資源化」する主体は、各級政府、研究者、知識人、マスメディア、一般民等、複数あり、それらが互いに対立、交渉、妥協しあいながら、資源化の潮流を作り出している。同時に、「歴史」は「資源化」される際に、実用価値的な側面だけでなく、様々な認識主体が自分たちの正当性とアイデンティティの維持を担保しようとして構築される側面をも有する。本研究では、いかなる「歴史」が多様な主体によって、実利の獲得やアイデンティティの維持のため、どのように「資源化」されているのか、エスノ・ローカルな政治社会空間を舞台として批判的・分析的に明らかにする。

研究代表者 長谷川清

班員（館内） 榎永真佐夫 河合洋尚 韓 敏 塚田誠之
（館外） 稲村 務 上野稔弘 兼重 努 瀬川昌久 曾 士 才 孫 潔 高山陽子
長谷千代子 長沼さやか 野本 敬 松岡正子 吉野 晃

研究会

2017年7月22日(土) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

孫 潔 (文教大学)「雲南省元陽棚田地域における景観とその資源化——村民による映像撮影との関わりを中心に」

吉野 晃 (東京学芸大学)「ミエン (ヤオ) の歴史資源化：湖南省江永県とタイの場合」

質疑応答

2017年10月28日(土) 13:00~18:30 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

塚田誠之 (国立民族学博物館名誉教授)、長谷川清 (文教大学)「プロジェクトの成果と論点」

研究成果報告Ⅰ (稲村、兼重、曾、孫、高山、長谷、長沼、野本)

研究成果報告Ⅱ (松岡、吉野、韓、塚田、長谷川、藤井、権、大野、松本)

討論

成果

今年度は2回の共同研究会を実施した。第1回は文化的景観とその資源化に関する雲南省元陽県の棚田地域の事例報告、複数の国家に跨って居住するエスニック集団の歴史資源化についてミエン (ヤオ) のタイと中国の調査事例をもとにした比較分析が報告された。第2回は科学研究費補助金基盤研究プロジェクト「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(2015-2017、研究代表：国立民族学博物館名誉教授・塚田誠之)との合同研究会を開催し、歴史・記憶の資源化のダイナミクス、資源化に関わる各主体の表象実践、歴史・文化表象のバリエーション、ナショナリズムやノスタルジアとの関係などについて討論を行った。国家や政府、民族/エスニック集団、ローカルなコミュニティ、他の様々な社会集団などを構成する諸主体が参画・関与し、経済利益の獲得や政治目的ばかりでなく、日常生活での文化的消費のニーズにも対応した形で、歴史の資源化が進行している点を明らかにできた。

「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に」

国立民族学博物館に所蔵される多田コレクション (通称「時代玩具」) は、江戸時代から戦後にかけての玩具を中心とした子どもに関わる様々なモノから構成される、総数5万数千点に及ぶ膨大な資料群である。玩具を初めとした子どもに関する多種多様なモノの数々は、それぞれの時代の子どもの対する人々や社会の意識を克明に映し出している。しかし、近代以降、それらは消費を前提として商品化されたこともあって、遺存は少なく実態は明らかではない。多田コレクションは、そうした子どもに関する品々が網羅的に収集・保存されている希有な例として価値が高い。

本研究は、児童学・美術史・玩具学・歴史学・民俗学・文化地理学・保存科学といった様々な専門分野の研究者が一堂に会し、コレクションの資料に対して多角的・総合的に検討し、分析を加えることで、コレクションの全体像を正確に把握することを試みる。それと共に、従来漠然としたイメージでしか理解されてこなかった近代日本の

子どもの文化や社会の実態を、モノを資料として活用することで具体的かつ精緻に解明する。そして、その成果に基づき、近代以降の子ども観に代わる時代に即した新たな子ども観の見通しを提示し、展示会の開催を通じて広く社会に問うことを目的とする。

研究代表者 是澤博昭

班員 (館内) 笹原亮二 日高真吾
(館外) 稲葉千容 内田幸彦 香川雅信 亀川泰照 小山みずえ 是澤優子 神野由紀
滝口正哉 濱田琢司 森下みさ子 山田慎也

研究会

2017年6月17日(土) 13:30~17:00 (国立民族学博物館 大演習室)

報告 是澤博昭 (大妻女子大学) 「子ども・誕生——モノからみる子どもの近代」

資料の熟覧

2017年6月18日(日) 10:00~12:30 (国立民族学博物館 大演習室)

全体討議「研究成果公開にむけた今後の方針——展示・論集」

2018年2月8日(木) 13:30~17:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

全体討議Ⅰ「研究成果公開にむけた今後の方針——論集について」

全体討議Ⅱ「研究成果公開にむけた今後の方針——展示について」

成果

研究成果公開の一環として特別展「子どもとおもちゃの博覧会」の展示に関する今後の方針を話し合った。さらに特別展にあわせ、2019年度3月に成果発表の論文集の出版の目指すことを確認した。

論集は、各専門分野から近代日本の子どもの文化や社会の実態を、モノを資料として活用することで具体的かつ精緻に解明するアプローチする成果を寄稿することを確認した。また特別展に関連する埼玉県立歴史と民俗の博物館との連携の方向性に関する議論を深めた。

「チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究」

1979年に国立民族学博物館は「チベット仏画コレクション」を購入した。その内容は実はいわゆる仏画ではなく、千点を超すチベット仏教古派及びボン教の護符を中心とする白描の宗教図像とそれを刷るための版木である。チベット仏教とボン教は独自の教義・哲学・論理体系を作り上げ、東洋人の思惟方法を語る上で主要な柱の一つになっている一方で、民間信仰をも積極的に受け入れ、独特の「行」を発展させてきた。チベットの精神文化基層においては、超越的な原理と世俗的な経済原理とが絡み合っており、その二つを有機的に結びつけるための仕掛けとして「呪力観ないし呪物」が働いていると思われる。仏教やボン教の大蔵経論部の一定のポジションが「呪法」や「脱呪法」に割かれているのはそのことと密接な関連がある。護符などの宗教図像はそこに機能する呪物の身近なモノの一つである。

我々は、チベットに広く行われている護符に注目し、一般の人々の目線に立って、それらの内容・意味・用途の記述、文献学的裏付け、護符の加持・聖化(パワーの付与)に関する儀礼、その経済的仕組み、チベット人でない人々を含む民衆の間での現代的意味などを様々の角度から調査研究し、護符というモノを通じてチベットの宗教実践の有り様と宗教文化基層の一端を明らかにすることを目標としているが、本共同研究ではその第一歩として民博が蔵する宗教図像とそこに書かれるマントラを含む文を記述・解析することを試みたい。

研究代表者 長野泰彦

班員 (館内) 三尾 稔 立川武蔵
(館外) 大羽恵美 川崎一洋 菊谷竜太 倉西憲一 スダン・シャキヤ 立川武蔵 津曲真一
村上大輔 森 雅秀 脇嶋孝彦

研究会

2017年6月25日(日) 13:00~17:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

護符の同定・記述作業

- 2017年8月9日(水) 13:00~17:00 (国立民族学博物館 第1演習室)
護符の同定・記述作業
- 2017年10月21日(土) 13:00~17:00 (国立民族学博物館 第2演習室)
護符の同定・記述作業
- 2017年11月23日(木・祝) 13:00~17:00 (国立民族学博物館 第1演習室)
成果とりまとめの打ち合わせ
- 2018年1月26日(金) 10:00~16:00 (国立民族学博物館 第2演習室)
研究成果とりまとめの打合せ
- 2018年2月17日(土) 13:00~17:00 (国立民族学博物館 第2演習室)
護符の記述研究
- 2018年2月24日(土) 13:00~17:00 (国立民族学博物館 第1演習室)
護符の記述研究

成果

- ① 標本資料の記述を引き続き行い、宗教図像の内容、主導、用途などを特定した。
- ② N. Douglas の *Tibetan Tantric Charms and Amulets* に掲げられている図像との異同を確認し、そこでの記述の不備を補った。
- ③ 本標本資料のデータベース作成の準備に着手した。

「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」

人類学においてサブスタンス（身体構成物質）に関する研究は、主に親族研究のなかで行われてきた。特に、生殖の観念の文化的多様性に関する民俗生殖理論や、生物学的生殖に限定されない人の関係性についての議論は、自然／文化、生物学的／社会的次元の二元論を前提とする親族（研究）を批判的に乗り越えようとするものである。ところが、今日、サブスタンスは、科学技術や医学の発展、グローバルな経済市場やトランスナショナルな移動の増加という現象の最前線で、資源として取引され、流通されるようになっており、従来の親族研究の射程を超えた新たな重要性を帯びるに至っている。遺伝子やゲノムといった新たなサブスタンスが、個や家族、集団のアイデンティティ形成や社会化のあり方に影響を及ぼすさまは、医療人類学を中心に生社会性（biosociality）という点から議論されている。

本研究の目的は、オセアニア、アジア、ヨーロッパにおけるサブスタンスの社会的布置に関する比較研究を通して、グローバル化時代のサブスタンスをめぐる社会動態の包括的な理解をはかるとともに、親族研究と医療人類学で二極化されているサブスタンス研究を架橋するアプローチを提示することである。

研究代表者 松尾瑞穂

班員（館内）宇田川妙子

（館外）澤田佳世 島藺洋介 白川千尋 新ヶ江章友 田所聖志 深川宏樹 深田淳太郎
洪賢秀 松岡悦子 松嶋健 山崎浩平

研究会

- 2017年5月13日(土) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)
山崎浩平 (松阪看護専門学校) 「乳とちぎる——インド・グジャラート州におけるつながりの構築・維持・断絶」
新ヶ江章友 (大阪市立大学) 「日本のLGBTにおける血縁家族とオールタナティブな家族」
全体討論、今後の打ち合わせ
- 2017年5月14日(日) 9:45~12:45 (国立民族学博物館 第1演習室)
洪賢秀 (東京大学) 「韓国社会における遺伝子検査のイメージ」
松岡悦子 (奈良女子大学) 「東アジアの産後の習俗と substance」

成果

今年度は2日間に渡る研究会を1回開催した。サブスタンスに関わる分野のうち、これまでは親族研究からのアプローチを中心としてきたのに対し、今年度は身体や医療という問題領域を設定したうえで研究報告を行った。遺伝子や疫学、母子保健、LGBT、トランスジェンダーという多様な研究対象からサブスタンス研究へアプローチを

することで、いわゆる伝統的なサブスタンスに限定されない、グローバル化のなかでマテリアルとして生成、流通するサブスタンスの側面を照射することが出来た。これらはこれまでの議論を補完する視点であり、今後の研究の展開にとって重要な議論を深めることが出来た。

「驚異と怪異——想像界の比較研究」

ツヴェタン・トドロフが『幻想文学論序説』（1970）で定義したように、「驚異」 marvelous や「怪異」 uncanny は、自然界には存在しえない現象を描いた幻想文学、いわゆるファンタジーの部類に入るとみなされる。近代的な理性の発展とともに、科学的に証明のできない「超常現象」や「未確認生物」はオカルトの範疇に閉じ込められてきた。しかし近世以前、ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるがこの世のどこかに実際に存在するかもしれない「驚異」は、空想として否定されるべきではない自然誌の知識の一部として語られた。また、東アジアにおいては、実際に体験された奇怪な現象や異様な物体を説明しようとする心の動きが、「怪異」を生み出した。

本研究会では「驚異」と「怪異」をキーワードに、異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを比較検討する。その成果は、アジア遊学シリーズの論文集として刊行するほか、当館における特別展示のかたちで公開することを予定している。

研究代表者 山中由里子

班員（館内）菅瀬晶子 吉田憲司
（館外）榎村寛之 大沼由布 香川雅信 金沢百枝 木場貴俊 黒川正剛 小林一枝
小松和彦 小宮正安 佐々木聡 寺田鮎美 林 則仁 松浦史子 松田隆美
宮下 遼 安井真奈美

研究会

2017年7月8日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

黒川正剛 (太成学院大学) 「西欧近世における魔女の身体・怪物の身体」

安井真奈美 (国際日本文化研究センター) 「身体の妖怪画——エロスと医学と美術の狭間」

総合討論

2017年7月9日(日) 10:00~14:00 (国立民族学博物館 大演習室)

林 則仁 (龍谷大学) 「イスラーム世界の博物誌からみる異形の身体」

野元 晋 (慶應義塾大学) 「自然からの救済、自然による救済、そして自然の救済? ——シーア諸派の哲学思想の宇宙論と救済思想から——ジャービル・イブン・ハイヤーン、そして初期イスラーム派の思想家たち」

総合討論

2017年11月2日(木) 15:00~17:00 (慶應義塾大学)

荒俣宏旧蔵博物誌コレクション等 貴重書室所蔵資料閲覧打ち合わせ

2017年11月3日(金・祝) 10:00~18:00 (慶應義塾大学)

山中由里子 (国立民族学博物館) シンポジウム「驚異と怪異の場——<自然>の内と外」趣旨説明 松田隆美 (慶應義塾大学) ヨーロッパ中世の驚異の「場」——中世後期のナラティブ文学を中心に

榎村寛之 (斎宮歴史博物館) 古代都市と妖かし~平安京で怪異が起こる場所~

山内志朗 (慶應義塾大学) 修験道と即身仏 (ミイラ) 信仰について 菅瀬晶子 (国立民族学博物館) 一神教における怪異の語りと場——パレスチナ・イスラエルの事例から

糸川麻里生 (慶應義塾大学) 「古典的ワルプルギスの夜」における異界像とゲーテの自然研究

Sara Kuehn (ウィーン大学、国立民族学博物館外国人客員研究員) A Dervish with a Thousand and One Signs: Para-nomian and Supra-nomian Embodiments of the 'Fools for God'

山中由里子 (国立民族学博物館) まとめ

2018年1月20日(土) 10:00~17:30 (国立民族学博物館 大演習室)

山中由里子 (国立民族学博物館) 「異音——この世ならざるものをつなぐ音」

佐々木聡 (大阪府立大学) 「釜鳴をめぐる怪異と古い社会史——中国古代から現代日本の実践まで」(代読)

小宮正安 (横浜国立大学) 「異界を表現する音——西洋音楽の場合」

井上真史 (怪談文芸研究会) 「怪談の中の擬音——怪談牡丹燈籠を参考として」

全体討論

2018年2月21日(水) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

山中由里子 (国立民族学博物館)「課題の整理・展示内容の提案」

若林広幸 (株式会社 若林広幸建築研究所)「驚異・怪異の空間的展開」

村上加奈 (株式会社 若林広幸建築研究所)「驚異・怪異の建築」総合討論

成果

普遍的で直観的な自然理解と、文化的概念としての〈自然〉はどのように連関しているのか。この関係性を解明するには、自然界のどのような現象が超常的なものとして認識され、背景にどのような自然観があるのかを、地域や時代ごとに明らかにし、それらを比較する必要がある。このような問題意識に基づき、2017年度は、「異形の身体」、次いで「驚異と怪異の場」(慶応義塾大学言語文化研究所との共催の公開シンポジウム)、「異音——この世ならざるものの出現にともなう音」というテーマを比較の軸として設定し、研究会を行ってきた。いずれの会においても、〈自然〉と〈超自然〉の境界領域が共通の論点の一つとなった。

今年度の議論を通して浮かび上がってきたのは、自然と超自然、もしくは「この世」と「あの世」の心理的・物理的距離感の文化的な差である。

「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」

本研究は、応援という切り口から、人類学的研究領域の拡大を図り、人間文化の特質の一端を解き明かすことを目的としている。実践的な関心とも関係する開発援助から福祉やケアサービスなど「支援」に関する研究や、アニメなど現代風俗のファン文化に関する研究は、人類学のみならずさまざまな学問分野において近年数多くなされている。本共同研究会では、こうした個別研究を横断的に架橋して、政治やスポーツにおける応援まで含めたい。人間にとっての利他性の特質にも迫りたい。応援 (support) という行為一般を対象とするが、さしあたり政治・スポーツ・ファン文化の下位領域に分けて焦点を当て、民族誌的データをもとに比較分析を行う。

研究代表者 丹羽典生

班員 (館内) 笹原亮二 三尾 稔 永田貴聖

(館外) 岩谷洋史 梅屋 潔 小河久志 風間計博 亀井好恵 木村裕樹 熊田陽子

瀬戸邦弘 高野宏康 高橋豪仁 立川陽仁 椿原敦子 難波功士 前川真裕子

山田 亨 山本真鳥 吉田佳世

研究会

2017年7月2日(日) 13:30~18:30 (国立民族学博物館 第4演習室)

難波功士 (関西学院大学)「パフォーマーを応援するパフォーマンスの系譜——親衛隊からヲタ芸まで」

笹原亮二 (国立民族学博物館)「芸能と観客の諸相——芸能を観ることと観客になることを巡って」

2017年10月21日(土) 13:30~18:30 (国立民族学博物館 第4演習室)

風間計博 (京都大学)「バナバ人の歴史歌劇にみる共感の力」

亀井好恵 (成城大学)「踊り手のパフォーマンスの変容——桐生八木節まつりを例にして」

2017年12月9日(土) 13:30~18:30 (国立民族学博物館 第3演習室)

梅屋 潔 (神戸大学)「アフリカン・サッカーの応援——「災因論」と「福因論」の観点から見た」

立川陽仁 (三重大学)「アイスホッケーのファイティングは応援か」

2018年2月10日(土) 13:30~18:30 (国立民族学博物館 第3演習室)

丹羽典生 (国立民族学博物館)「ノリをめぐる身体政治学——高校野球における『沖縄らしい』応援の形成とその問題」

熊田陽子 (首都大学東京)「性風俗世界における『応援』の一考察——男性客によるタニマチ的行為に見る『自己』と『他者』の在り方」

成果

今年度は、これまでの成果を踏まえて応援についての広がりを見るために、世界各地の事例を取り上げた。アフリカのサッカー、アメリカのアイスホッケーの分析から応援の地域的な特質について指摘がなされた。またオセアニアのバナバ島の歌劇の上演から応援という行為に伴う情動の側面について理論的な議論がなされた。それ以外では、人類学以外の学問分野である民俗学やファン文化の研究から、それぞれの視点から見えてくる応援の事例につ

いて検討がなされた。前者では闘牛における掛け声や八木節の上演における合の手の変容などが題材とされた。こうした民俗学的な知見はえてして日本文化の基層的側面とされることがあるが、各発表ではむしろそれらの変化が積極的に分析の遡上にあげられ、いまの日本で平均的な応援の所作として想像されがちな身体行為の歴史的連続性と断絶が明確にされた。後者ではアイドルファンによる応援のための組織である親衛隊が取り上げられ、その誕生と消滅が議論された。いわゆる大学応援団にみられる応援所作や組織の特徴との類似性が顕著であり、応援を文化的事象として見ていく際には、ファン文化などの他者に対してコミットする行為の広がりの中で見検討することの必要性が確認された。

「考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究」

考古学は一般に過去についての科学的な研究と捉えられている。しかし同時に、考古学的知識や出土品が、時に観光資源として利用され、国家・民族をめぐる政治と結びつくように、現代を形作る実践的な学問でもある。この「科学としての考古学」と「社会实践としての考古学」の間の緊張関係をめぐって、考古学者も、植民地主義やナショナリズムの歴史との関わり等、考古学の倫理について内省的な検討を始めているが、それらはまだ考古学内部にとどまっている。本共同研究では、考古学的知識が作られ、消費される、その多様なあり方を検証することによって、考古学がどのように社会関係や人々の世界観を形成し、変化させ、新たな景観をも作り出しているのかについての広範な理解を目指す。

そのために、次の3つの視点から複数フィールドにおける考古学的実践の民族誌・歴史的研究を行う。

(1) 考古学的知識・技術習得のプロセスは、どのように個人のもの見方、コミュニケーション、行為に影響を与えているのか。(2) 発掘現場やラボで、出土品などのモノはどのように考古学的データに変換されるのか。(3) 考古学は遺跡観光、国家・民族の歴史の修正、社会運動にどのような影響を与えているのか。

研究代表者 ERTL, John (アートル、ジョン)

班員 (館内) 關 雄二 寺村裕史 ピーター, J. マシウス

(館外) 石村 智 市川 彰 岡村勝行 サウセド セガミ ダニエル ダンテ 渋谷綾子
寺田鮎美 中村 大 松田 陽 溝口孝司 村野正景 山藤正敏 吉田泰幸
米田 穰

研究会

2017年6月4日(日) 10:00~17:30 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

米田 穰 (東京大学) 「年代を測定するということ——考古学・科学・博物館」

宮尾 亨 (新潟県立歴史博物館) 「現代に生きる火焰土器」

アートル ジョン (金沢大学) “Reconstructions in Jomon Sites Bid for World Heritage Inscription”

総合討論：出版計画・提案など

2017年11月19日(日) 10:00~17:15 (国立民族学博物館 第7セミナー室)

討議：出版計画・提案など

佐々木泰造「ジャーナリストから見た考古学」

譽田亜紀子「考古学『Translator』としての実情と葛藤」

2018年1月20日(土) 12:00~18:00 (国立民族学博物館 第2セミナー室)

サウセド セガミ ダニエル ダンテ (国立民族学博物館) 「Multiple perspectives about archaeological sites in Peru: A study case in Lima City」

山藤正敏 (奈良文化財研究所) 「紛争下における文化遺産の破壊と復元：中東の諸事例」

村野正景 (京都文化博物館) 「『学校と考古学』の歴史と現状：京都の学校における考古資料の収集と活用を中心に」

成果

共同研究会第六回は、「データの生成過程とその利用」をテーマに、考古学におけるデータ生成(米田穰)、火焰土器の利用な理解(宮尾亨)、世界遺産を目指す縄文遺跡群の復元に関する諸問題(アートル)についての講演の後、議論を行った。共同研究会第七回は、「考古学をパブリックに発信する」をテーマに、外部講師として考古学に関わる新聞記者(佐々木泰造)、フリーライター(譽田亜紀子)を招聘し、講演の後、議論を行った。共同研究会第八回は「世界各地におけるケーススタディ」として、南米の都市部の遺跡とパブリック(セガミ ダニエル ダンテ)、

西アジアの紛争地域における遺跡保存と復元をめぐる問題（山藤正敏）、日本の学校所蔵の考古学資料の可能性（村野正景）についての講演の後、議論を行い、成果公開出版に向けての方向性を議論した。

「宇宙開発に関する文化人類学からの接近」

本研究の目的は、宇宙開発を対象にした人類学的研究の可能性を探り「先端科学技術」の人類学という新しいテーマに接近するための方法論的検討をおこなうことにある。20世紀後半から宇宙開発に関わる科学技術の進展、宇宙空間の利用が本格化し、宇宙は単に科学技術の研究対象に留まるだけではなく、国際的に展開する政治的かつ経済的な背景やローカルな社会文化的な基盤や生活文化とも密接に関わる問題領域となりつつある。本プロジェクトは、(1) 宇宙開発に関する具体的なトピック（宇宙産業、ツーリズム、人間の身体的かつ認知的変容など）に対する従来の概念の有効性や方法論を検討する。(2) は、科研費によるJAXAとの共同調査プロジェクトと併行して行われ、宇宙開発技術者に対するインタビュー調査データの検討・解釈作業を進める。本研究は最終的に近代科学技術の検討を射程に入れた「宇宙人類学」という総合的な主題を設定した研究領域の確立を目指す。

研究代表者 岡田浩樹

班員（館内） 飯田 卓 上羽陽子 山本泰則
（館外） 磯部洋明 岩田陽子 岩谷洋史 大村敬一 川村清志 木村大治 後藤 明
佐藤知久 篠原正典 住原則也 水谷裕佳

研究会

2017年7月22日(土) 14:00~19:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

岡田浩樹(神戸大学)「宇宙人類学の現状と課題」

メンバー各自の研究計画の発表

2017年7月23日(日) 10:30~16:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

メンバー各自の研究計画の発表

出版論文の編集会議、および今後の活動方向の打ち合わせ

2017年12月9日(土) 13:00~00:00 (兵庫県立大学西はりま天文台)

Contact JAPAN 研究会との共同研究会

鳴沢真也(兵庫県立大学)「SETIについて」

なゆた望遠鏡など、宇宙観測施設見学および説明受講

2017年12月10日(日) 9:00~12:00 (兵庫県立大学西はりま天文台)

「Contact Japan プログラム」ワークショップへ(コンタクト・シミュレーション)の実施、参加

2018年2月18日(日) 10:00~17:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

篠原正典(帝京科学大学)「ドレークの方程式の“L”にイルカの行動学者が悩む」

渡辺謙仁(北海道大学大学院)「野火的な超小型衛星開発のエスノグラフィー——ソーシャルメディア衛星開発プロジェクト SOMESAT を中心として」

次年度の研究会活動の打ち合わせ

成果

2017年度は、2018年度以降の研究成果の公刊に向け、メンバーの研究活動の報告および招聘研究者による発表、そして学外での宇宙関連施設(兵庫県立大学東はりま天文台)での研究会を実施した。日本の宇宙開発を対象とした人類学的研究の可能性を探るという点から、研究会のメンバー以外の多様なテーマに取り組む研究者を招聘し、宇宙開発に関するトピックの視野を広げることができた。西はりま天文台で研究会では、NASA および世界的に展開している SETI project (Search for Extra Terrestrial Intelligence: 地球外高度知的生命探査) に関する発表および、知的生命体とのファーストコンタクトをシミュレーションする国際民間研究グループの日本支部(Contact Japan) のワークショップに参加した。人類学において一つのテーマである「異文化の接触」の知見を応用し、人類学的研究の仮想的未来における有効性を検討する際の可能性と課題が明確になった。加えて2017年度は研究成果の前提となる研究調査を実施するために、学術振興会科学研究費補助金特設分野(オラリティ)に「先端科学技術をめぐるオラリティに関する複合的研究」というテーマで申請し、採択された。これにより、研究成果の公表の前提となる研究調査の実施が可能になり、研究会が有機的に運営できるようになっただけでなく、国内外の研究者を広く招聘し、「宇宙人類学」という研究領域の確立に向けて進展があった。

「放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究」

核実験や原発事故による放射線影響を受けた社会については、人体や自然環境への影響に関する自然科学分野の研究、加害責任を明らかにする歴史学研究、放射線影響の基準を決定する政策学的研究、社会的影響を明らかにする社会学および人類学的研究などが蓄積されてきた。

しかしながら実際には、遺伝的疾患や食料に対する不安を訴える当事者の発言は「感情論」として切り捨てられる傾向にある。これまでの放射線影響に関する研究により、その不確実性が科学的に明らかにされてきたにも関わらず、実社会における被害対応や予防では、放射線影響の不確実性を生きる「生活者の視点」からの被害の理解は十分ではない。

そこで、本共同研究では、被害者の「当事者」としての「生きること」や「生活」の視点からの被害観の解明を目的とする。これまで個別に研究してきた人類学を中心として、医学、政治学、歴史学の学問分野と連携し、米国、マーシャル諸島、日本、太平洋を調査対象としたこれまで個別に行われてきた研究を統合・深化させる。

研究代表者 中原聖乃

班員（館内）林 勲男

（館外）新井 卓 市田真理 岡村幸宣 越智郁乃 間間 元 桑原牧子 小杉 世
島 明美 関 礼子 中原聖乃 西 佳代 根本雅也 三田 貴 吉村健司

研究会

2017年6月24日（土）13：00～18：00（広島平和記念資料館）

楊 小 平（広島大学）原爆資料館の展示について担当学芸員と討議「中国人の原爆被爆及び広島平和記念資料館への来館者から見るヒロシマ」

2017年6月25日（日）9：00～15：00（サンビーチホテル岡山）

丹治泰弘「一人の自主的避難者の見た福島」：岡山在住原発被災者との交流

吉村健司（東京大学）「沖縄戦後期における水産史と原水爆報道——琉球新報の報道を中心に」

越智郁乃（立教大学）「作品を通じた『放射能』理解——『見る』『知る』から『ともに考える』へ」

2017年10月14日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館 第1演習室）

全員「成果報告に向けた話し合い」

岡村幸宣（丸木美術館）「核の可視化と当事者性の獲得——“非核芸術”の可能性——」

西佳代（国立民族学博物館）「低線量放射能の『安全性』に向けた議論——アメリカ・ワシントン大学水産研究所におけるサケ科魚類品種改良研究を中心に」

2017年10月15日（日）9：00～14：30（国立民族学博物館 第1演習室）

中原聖乃（中京大学）「放射能汚染の被害観——マーシャル諸島の生活世界から」

三田 貴（大阪大学）「原発事故による社会分断と共生をテーマにした教育実践の課題と展望」

全員「シンポジウム開催並びに研究の方向性に関する話し合い」

2018年1月27日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館 大演習室）

新井 卓（芸術家）「個人的記憶の共有——ダゲレオタイプ写真と核時代におけるナラティブ（仮題）」

全員「成果報告に向けた話し合い」

成果

2017年度は3回の研究会を行った。今年度で全員が一巡した。今年度とはくに芸術、教育的視点から放射線影響問題を考える事例の報告を行った。また、研究会発足当初から懸案となっていた日本の原爆被害者についての研究会を開催することができた。研究会最終回にて、成果報告のコンセプトについての議論を行った。放射線被害の実態を明らかにするとともに、その被害が不可視化されている状況を、社会のしくみから明らかにすることを確認した。最終年度前半は原稿の執筆に充て、後半で集中的に研究会を開催し、草稿を持ち寄り、一つの成果にまとめるための研究会を行うことを決定した。

「医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働」

少子高齢化、医療の高度・専門分化、患者の権利意識の変化等に伴い、保健医療福祉の現場では、医療者とクライアントあるいは多職種の間でのコミュニケーション不全の問題等、医療福祉系の個別の学問では対応しきれない複雑な課題が生まれている。これらの課題に日々直面する保健医療福祉専門職（以下、「医療者」）にとって、事象

をその社会的文化的文脈の中で理解する視点、他者理解や自己相対化の視点を提供する医療人類学の知見の有用性は高く、医療者教育の現場でもその潜在的需要がある。また、医学教育では国際的な教育の質保証のため、今後5年程度の間全国80大学が認証評価を受審するという動きがあり、その評価基準のなかで医療人類学も言及されている。こうしたなか、現代の日本の医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討することは喫緊の課題である。そこで本共同研究では、複数の職種の医療者との協働により、医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討し、その教材を開発することを目的とする。

研究代表者 飯田淳子

班員 (館内) 鈴木七美 松尾瑞穂
(館外) 伊藤泰信 梅田夕奈 大谷かがり 工藤由美 辻内琢也 照山絢子 錦織 宏
濱 雄亮 浜田明範 星野 晋 堀口佐知子 宮地純一郎

研究会

2017年6月18日(日) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

飯田淳子(川崎医療福祉大学)「中間まとめ」

参加者全員「教材開発に向けて(総合討論)」

2017年12月2日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

参加者全員「教材各章のアウトライン(発表および討論)」

2017年12月3日(日) 9:00~12:00 (国立民族学博物館 大演習室)

参加者全員「教材開発に向けて(発表および討論)」

参加者全員「今後に向けて(総合討論)」

2018年1月21日(日) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

大谷かがり(中部大学)「教材担当章のアウトライン(発表および討論)」

参加者全員「追加事例の担当について(討論)」

参加者全員「今後に向けて(総合討論)」

成果

昨年度までに把握した医療者向け人類学教育の現状と医療者側からの期待・要望をふまえ、2017年度は医療者に提供する医療人類学教育の具体的なあり方を検討した。とりわけ、医学教育モデル・コア・カリキュラムに文化(医療)人類学の内容が組み込まれたことに伴い、開発・出版が急務である医学生向けの教材の作成に取り組んだ。共同研究会第1回目には、これまでの議論の中間まとめをおこなった後、共同研究員全員で総合討論をおこない、医学生を対象に医療人類学のどのような内容を、どの段階で、どのように教える必要があるか、そのためにどのような教材を作成するかを検討した。そのうえで、第2回目および第3回目には、教材の各自の担当部分のアウトラインを報告し、その内容を検討した。なお、上記の作業は日本文化人類学会医療者向け人類学教育連携委員会、同学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」、および日本医学教育学会プロフェッショナルリズム・行動科学委員会との連携によりおこなっている。

「個—世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」

中東は、古来より多様な人々が民族、宗教、言語の違いを超えて離合集散と交渉を繰り返してきた巨大な交流圏の一つである。この圏域では人名、地名、出来事で満たされたりフラと呼ばれる旅行記が精力的に産出されてきたが、固有名への強い関心は日常生活・会話の中でも広く見受けられ、人々の生活を基礎づける重要な関心の持ち方であると想定される。このような関心の広がり、中東を基点として広がる世界において、生身の個人という存在と移動という経験、未知なる人・場・情報との遭遇こそが、世界を形成・構想するうえでの根幹と見なされてきたことを示唆する。

本研究は、中東を一つの基点として活躍する具体的個人に焦点を定めて、彼らの人・場・情報との出会い・交渉・関係の形成はいかにして実現されているのか、超地域的な人・物・知の交流とミクロな生活の場の形成とがどのように連関しているのかを探求することを通じて、個人が織りなす世界の特質を解明しようとするものである。

研究代表者 齋藤 剛

班員 (館内) 相島葉月 西尾哲夫

(館外) 池田昭光 宇野昌樹 大坪玲子 奥野克己 小田淳一 荻谷康太 佐藤健太郎
椿原敦子 鳥山純子 堀内正樹 水野信男 嶺崎寛子

研究会

2017年7月22日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

齋藤 剛 (神戸大学) 「ムフタールスースイーにみる個」

堀内正樹 (成蹊大学) 「カオスから秩序へ、でよいか〜純粹数学のたどった道と非境界的世界のあり方」

2017年7月23日(日) 10:00~15:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

相島葉月 (国立民族学博物館) 「現代エジプトのスーフィズムにおける自己主体性とモダニティの位相」

2017年12月9日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第2演習室)

全員「研究打ち合わせ」(今後の計画など)

荻谷康太 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 「引用・解釈・操作: ムハンマド・アル=マギー
リーとウスマーン・ブン・ファー ディーの知的連関」

2017年12月10日(日) 10:00~14:30 (国立民族学博物館 第2演習室)

大坪玲子 (東京大学) 「イエメン・カート・エチオピア」(仮題)

2018年2月21日(水) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

佐藤健太郎 (北海道大学) 「〈モリスコ〉の旅行記」

2018年2月22日(木) 10:00~14:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

宇野昌樹 (広島市立大学) 「研究課題と研究会への関わり方」

成果

本年度は、7月、12月、2月に共同研究会を開催し、7名の共同研究会構成員が研究成果の発表を行った。本年度の研究発表が扱った内容は大きく4つに分けられる。それらは、抽象化と秩序化を問題とした研究(堀内)、知識人を対象とし、その学的活動における自己と他者の差異化の論理を扱った研究(相島、荻谷、齋藤)、中東とその周辺地域を横断する人々を扱った研究(大坪、佐藤)、最後に研究に従事する自己の軌跡を振り返りつつ、個として中東に生きる人々との関わりを問いなおした研究(宇野)である。

本年度の研究において特徴的な点の一つは、エジプト、レバノン、モロッコ、イエメンなど中東に含まれる地域だけでなく、イベリア半島やナイジェリア、エチオピアなど中東と密接に関連しつつも、中東研究においては直接対象とされることが少ない地域との人的・知的連関が積極的に扱われ、中東に生きる人々の地域をこえた広がりの実態が多角的に明らかにされたことである。

また対象として取り上げられた人々も、エジプト、モロッコ、ナイジェリアなどにおいて活躍した宗教知識人(ウラマー)、イベリア半島におけるモリスコ(キリスト教に改宗したムスリム)、イエメンからエチオピアに渡った移民など、多岐に渡っている。彼らの地域を超えて広がるネットワークのみならず、知の連関や受容された知の解釈や操作を通じた知の「ローカル化」を扱った本年度の成果発表は、中東に生きる人々の縷々転変する軌跡を活写したものであると同時に、特定の地域に限定して人々の活動を捉えることの問題性を改めて浮き彫りにするものでもあった。

「確率的事象と不確実性の人類学——「リスク社会」化に抗する世界像の描出——

不確実な未来に人間がどう向き合うのかは、伝統社会を対象に、近代的・科学的な形式知では説明がつかない様々な生活実践を扱ってきた人類学において、重要な関心領域を形成してきた。一方で、社会学で台頭してきた「リスク社会」の議論は、学問分野の枠を超えて、人類学にも大きな影響力を与えている。近年の人類学では、「リスク社会」論をもとに、確率的事象を数量的に捉えて管理の対象とする「リスク」と、リスク計算による管理が困難な「不確実性」とを区別し、今日の社会・経済・政治的諸制度が後者の領域をも制御しようとする営為を、新たな考察対象としている。

しかし、上記の二分法的な不確実性の理解は、確率的事象の二面性を把握し切れていないと、本研究は考える。すなわち、集会的・統計的には計算可能で制御の対象とし得るが、一回限りの生起においては根源的な制御不可能性が露わになる。本研究はその両面に目を向けて、リスク管理の技術に依拠した諸制度の設計や人間の取扱いと、個人の認識や実践との間に生じる深刻なずれを、考察の主題にする。その上で、人類学的「不確実性」研究の考察視角を拡張することにより、既存の「リスク社会」論の俎上に載らない「リスク社会」の姿を描き出す。

研究代表者 市野澤潤平

班員 (館内) 飯田 卓

(館外) 東賢太朗 阿由葉大生 碓 陽子 井口 暁 磯野真穂 牛山美穂 近藤英俊
土井清美 松田素二 吉直佳奈子 渡邊日日

研究会

2017年6月10日(土) 15:00~18:00 (国際医療福祉大学大学院青山キャンパス)

飯田 卓 (日本学術振興会)「漁業における不確実性 (仮)」

全員「不確実性にかんする理論的検討 (仮)」

2017年6月11日(日) 9:30~16:30 (国際医療福祉大学大学院青山キャンパス)

梅田夕奈 (精神科医)「精神医療の現場における不確実性 (仮)」

牛山美穂 (日本学術振興会)「医師が直面する不確実性 (仮)」

2017年12月9日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

渡部瑞希 (東洋大学)「観光市場の取引における不確実性について」(仮)

小川さやか (立命館大学大学院)「確実な幸運をめぐる論理——香港のタンザニア人交易人の間の「運」の贈与をめぐって」(仮)

2017年12月10日(日) 10:00~13:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

市野澤潤平 (宮城学院女子大学)「前日の発表へのコメント」(仮)

近藤英俊 (関西外国語大学)「交渉と空気：公共空間における自己と秩序の比較文化論」

2018年2月19日(月) 9:00~17:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

市野澤潤平 (宮城学院女子大学)「不確実性をめぐる理論的検討 (仮)」

全員「成果出版に向けての検討 (仮)」

成果

本年度は、前年度から引き続き、研究会メンバーおよび外部講師による不確実性にかかわる事例発表を行い、その事例を材料として理論的な検討を重ねた。2017年6月10~11日の研究会では漁業と医療、12月9~10日の研究会では観光とアフリカ研究という、多彩な領域における発表があり、不確実性にかかわる議論の拡がりを再確認することとなった。2018年2月29日の研究会では、こうした研究会を開催して議論を続けてきた蓄積を整理して、研究会として不確実性にかかわるどのような理論的視座をとるのかを検討し、さらに成果を書籍などの形で出版するうえでの内容構成などについても、一定の見通しを着けた。研究会メンバーはそれぞれ多彩な事例研究を続けてきているため、それらの事例報告のエスノグラフィーとしての魅力を減じない形で一定の理論的視座のうちに収めていくのが、問題として浮上した。2018年度の研究会における課題としたい。

「高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究」

近年、日本の高等教育機関では、大学教員の教育能力の向上が推進されており、個々の大学で大学教育の改革(Faculty Development、以下、FD)が行われている。特に、大学教員を対象としたワークショップでは、学生主体の学びの開発が重視されていることから、学習教材の一つとしてモノ資料が見直されつつある。しかしながら、大学教員による博物館の利用は、展示見学にとどまっており、モノ資料による思考のあり方を検討するまでには至っていない。

そこで、本共同研究では、大学教員が博物館という「場」に足を運ぶ機会を提供し、モノ資料に触れ、それを活用した教育実践を、博物館関係者を交えて議論し、高等教育機関と博物館の連携による、より創造的な教育の可能性について検討を試みる。このような取り組みを通して、モノ資料を用いたFDの発展的貢献を図るとともに、大学と博物館とのアクセス回路の構築および高等教育機関における博物館資料の積極的な活用を目的としている。

研究代表者 呉屋淳子

班員 (館内) 河合洋尚

(館外) 石倉敏明 稲澤 努 金田純平 五月女賢司 坂本 昇 時任隼平 如法寺慶大
横山佐紀 吉田早悠里

研究会

2018年3月9日(金) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

時任隼平 (関西学院大学)「共通教科情報におけるみんなっくを利用した情報収集能力の育成」

吉田早悠里 (南山大学)「オーストリアの博物館が所蔵する20世紀初頭エチオピア民族誌的資料と文化人類学者の関わり」

永田貴聖 (国立民族学博物館)「フィールド・研究者・研究機関にある博物館モノ資料の交差点における表象の実践的試み——京都・東九条の事例」

全体討論

2018年3月10日(土) 10:00~16:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

呉屋淳子 (沖縄県立芸術大学)「博物館学的思考性が意味を持ちうるコンテクスト」

吉岡 乾 (国立民族学博物館)「言語学と博物館との(非)親和性」

全体討論、成果報告の打ち合わせ

成果

最終年度は、これまでの議論を踏まえて、高等教育とミュージアムの接合を試みることを課題とし、議論を進めた。特に、前年度に問題提起された「ミュージアムという場が、新たな『世界の価値をみい出す場所』へと転換するには何が必要なのか」を軸に、「ミュージアム体験」、「モノに付与されたコンテクスト」、「価値創造空間」等のキーワードに即して、参加者それぞれの研究の中で検討を行った。様々な具体的な事例を共有しながら、高等教育における学びのあり方や社会における高等教育の果たす役割を再考し、ミュージアムから新しい学びを提供することが可能であることを改めて確認した。

「捕鯨と環境倫理」

人類は5000年以上にわたり鯨類を食料や原材料として持続的に利用してきたが、1982年に国際捕鯨委員会 (IWC) において大型鯨類13種の商業捕鯨の一時的な捕獲禁止が決定された。その後、現在に至るまで同捕鯨は再開できないままである。この捕鯨をめぐる動きは、動物福祉・動物愛護・環境保護団体による反捕鯨運動と連動し、反捕鯨を支持する人びとや政府が増加し、世界各地の捕鯨や捕鯨文化は存続の危機に直面している。

反捕鯨運動の背後には、世界各地におけるクジラと人間の関係やクジラ観、環境観の歴史的变化が存在している。この共同研究では、世界各地の捕鯨の現状および欧米に端を発する反捕鯨運動について把握したうえで、世界各地の反捕鯨運動とその背後にあるクジラ観や環境・動物倫理がどのように形成され、世界各地に広がり、世界各地の捕鯨文化にいかなる影響を及ぼしているかについて検討を加える。より具体的には、アラスカやカナダ、グリーンランド、カリブ海地域等の先住民等による捕鯨、日本の調査捕鯨と小型沿岸捕鯨、ノルウェーとアイスランドの商業捕鯨等の現状と、動物福祉・動物愛護・環境保護団体による国際的な反捕鯨運動およびその諸影響について比較するとともに、その背後にあるクジラ観や環境観、捕鯨政策を学際的に検討する。

研究代表者 岸上伸啓

班員 (館内) 出口正之

(館外) 赤嶺 淳	李 善愛	生田博子	石井 敦	石川 創	伊勢田哲治	白田乃里子
河島基弘	倉澤七生	佐久間淳子	真田康弘	高橋美野梨	浜口 尚	本多俊和
吉村健司	若松文貴					

研究会

2017年4月29日(土) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

岸上伸啓 (国立民族学博物館)「趣旨説明」

伊勢田哲治 (京都大学)「動物倫理・環境倫理の観点から見た捕鯨」

質疑応答および議論共同研究計画の打ち合わせ

2017年11月19日(日) 13:00~17:30 (国立民族学博物館 第4演習室)

岸上伸啓 (国立民族学博物館)「趣旨説明」

真田康弘 (早稲田大学)「ICJ 捕鯨裁判とその後の展開」

石井 敦 (東北大学)「IWCと環境倫理『規範』」

全員討論

2018年2月12日(月・祝) 13:30~17:30 (国立民族学博物館 第4セミナー室)

全体テーマ:「日本の小型沿岸捕鯨」

岸上伸啓(国立民族学博物館)「趣旨説明」

石川 創(下関科学アカデミー)「日本の小型沿岸捕鯨の歴史と現状」

白田乃里子「和歌山県太地町の小型沿岸捕鯨に関する映像人類学的研究」

質疑応答・全体討論

成果

本年度は、捕鯨に関する動物倫理学的見解と反捕鯨運動・鯨類保護運動、南氷洋での日本の調査捕鯨を違法とした国際司法裁判所の判決とその後、日本の小型沿岸捕鯨の歴史と現状に関して検討を加えた。

- (1) 近年、シーシェパード、プロジェクト・ヨナ、IFAW、WDC、PETAなどの環境保護団体や動物愛護団体が反捕鯨運動や鯨類保護運動を展開している。倫理学者の伊勢田は、捕鯨を動物倫理学の立場から検討し、捕鯨の善悪について明確な倫理学的回答は存在せず、多様な運動の背後にある価値観の存在を知ることが重要であると主張した。
- (2) 石井は、捕鯨のモラトリアムを解除し、商業捕鯨の再開を目指すとする日本の外交政策を検討し、「日本のもっとも重要な外交目的は調査捕鯨の継続であり、そのためにはむしろ商業捕鯨モラトリアムは解除しないほうがよい」という仮説を提案した。真田は、日本の南極海での調査捕鯨(JARPA II)は科学とも言えないし、科学研究を目的にしているとも言えないという主張が受け入れられた国際司法裁判所の2014年判決が出た過程とその後を自らの調査と分析をもとに検証した。
- (3) 石川は、日本における小型沿岸捕鯨の歴史と現状について詳細に報告し、検討を加えた。白田は、自らが制作した、和歌山県太地町の小型沿岸捕鯨に関する映像作品を紹介し、映画「The Cove」、「After the Cove」、「おクジラさま」と比較しながら、検討を加えた。

これらの報告と検討によって、捕鯨に対する国際的な司法および社会運動の動向と、国内において小型沿岸捕鯨を実施している現地社会の現実と動向について把握することができた。

「世界のビーズをめぐる人類学的研究」

本研究は、本館の所蔵する標本資料の一つであるビーズ(トンボ玉や勾玉を含む)を主な対象にして、人類の生活にとってのビーズの役割とは何かを明らかにすることを研究目的とする。まずビーズとは、何らかの素材を紐で通したものとして定義する。その素材は、木の実、植物の種、動物の歯や骨、貝殻、ダチョウの卵殻、石や金や琥珀のような鉱物、鉄、ガラス、粘土、プラスチックなど多様である。また、ビーズ細工には首飾りのような線状のものから、バッグのような面状のものまで形もさまざまである。さらに、それは単なる美しさを求める装身具としてのみならず、富の象徴や社会的威信、および集団のアイデンティティなどを示すなど社会的役割を持っている。本研究では、本館のビーズ資料そのものの分析に加えて、主として歴史考古資料や民族誌のなかでビーズの技術的・社会経済的意味について考察することから、人類にとって美を追求することには普遍性があるのかを論議する。

研究代表者 池谷和信

班員(館内) 印東道子 齋藤玲子 野林厚志 戸田美佳子

(館外) 遠藤 仁 落合雪野 門脇誠二 川口幸也 河村好光 木下尚子 後藤 明

佐藤廉也 末森 薫 谷澤亜里 田村朋美 中村香子 中村真里絵 山花京子

山本直人

研究会

2017年4月22日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

◇テーマ1 東アジアのビーズ

池谷和信(国立民族学博物館)「趣旨説明」

野林厚志(国立民族学博物館)「台湾原住民族のビーズ」

木下尚子(熊本大学)「先史琉球のビーズ文化」

大塚和義(国立民族学博物館)「アイヌのビーズ文化」総合討論

2017年4月23日(日) 10:00~16:00 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

◇テーマ2 アフリカのビーズ

池谷和信 (国立民族学博物館) 「趣旨説明」

竹沢尚一郎 (国立民族学博物館) 「マリのビーズ」

中村美知夫 (京都大学) 「チンパンジーの道具利用」

戸田美佳子 (国立民族学博物館) 「王国のビーズとピグミーのビーズ」

山花京子 (東海大学) 「エジプトのビーズ面 (解説)」

池谷和信 (国立民族学博物館) 「ビーズ展からみえてきたビーズ文化」 総合討論

2017年7月15日(土) 13:00~18:00 (南山大学 人類学研究所)

趣旨説明

河村好光 (石川考古学研究会) 「日本諸島のビーズ (玉) 文化」

質疑応答

南山大学人類学博物館見学

後藤 明 (南山大学) 「博物館のものからみえるビーズの世界 (仮題)」

質疑応答

全体討論

2018年1月21日(日) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

池谷和信 (国立民族学博物館) ・趣旨説明 「ガラスビーズの世界」

谷澤亜里 (九州大学) 「弥生・古墳時代の玉類: 流通と入手の具体像」 (仮)

戸田美佳子 「カメルーンのビーズについて」 (仮)

池谷和信 (国立民族学博物館) 「民博のビーズバッグについて」 (寄贈品の紹介)

谷 一尚 (林原美術館) 「世界のトンゴ玉のその後」

遠藤 仁 (秋田大学) コメント1 「石ビーズとの比較から」

大塚和義 (国立民族学博物館・名誉教授) コメント2 「アイヌ玉の視点から」

総合討論

2018年2月24日(土) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

趣旨説明

山本直人 (名古屋大学) 「縄文人の生活とビーズ」

田村朋美 (奈良文化財研究所) 「ガラスビーズから見た東西交易——日本出土『西のガラス』の考古科学的研究」

池谷和信 (国立民族学博物館) 「民博のビーズバッグについて」

遠藤 仁 (秋田大学) 「ナガランドのビーズ」

総合討論

2018年2月25日(日) 9:30~13:00 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

松月清郎 (真珠博物館) 「真珠の博物誌」 (仮題)

末森 薫 (関西大学) 「仏教美術にあらわれたビーズ装飾」 (仮題)

池谷和信 (国立民族学博物館) 「ビーズ共同研究会のまとめ」

総合討論

成果

2017年度は、6月初めまで民博・特別展『ビーズ——つなぐ、かざる、みせる』が行われていたので、特展会場にて展示された標本資料を見学してビーズの特徴を観察したあとに、東アジアとアフリカのビーズ研究を深める会合を行った。また、国内においてビーズが収蔵されている博物館の一つである、南山大学人類学博物館 (名古屋市) の資料を閲覧したあとに、資料にもかかわる日本やオセアニアのビーズをめぐる研究会を南山大学にて行った。ビーズの利用については、ニューギニアにおいて貝殻に穴をあける方法、東南アジアにおける石器の代わりになると思われる竹利用仮説などが知られているが、現在、これらの視角や新たな多様性への見解は失われていることが示された。

以上のように、ビーズは古今東西の民族の暮らしのなかに装飾用に入り込むものであると同時に、富や社会階層などの社会経済的役割を示すものになっている。

「もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究」

本研究の目的は、人類による家畜化や栽培化にかかわる新たな事例を比較検討することで、それらの現象を整理し、概念枠組みを明確にすることである。ここでいう新たな事例とは、野生性の保持や野生種の利用、反馴化というように、家畜動物特有の性質（非攻撃的性格や馴れやすさなど）を獲得させない動物飼育の事例や栽培化症候群（脱粒性の喪失や無毒化など）を起こさない植物栽培の事例のことである。本研究では、こうした事例を「もうひとつのドメスティケーション」という言葉で表現する。

具体的には、本研究では(1)「もうひとつ」の動植物利用にかかわる民族誌的事実の報告をおこない、(2)複数の事例を比較検討することで、動植物に対する人間の働きかけを類型化する。これにより、対象とする生き物の利用形態の普遍性と特異性を導きだすことができるであろう。そのうえで、(3)従来のドメスティケーションの議論を踏まえながら、本研究の独自性と概念枠組みを明確にする。なお、本研究ではまず生業活動のなかで「手段」として利用される動植物を取りあげる。これは、鶉飼や鷹狩、狩猟、魚毒漁などで利用される動植物には上述の事例が多くみられるからである。その後、ほかの動植物利用の事例に研究対象を拡大する。

研究代表者 卯田宗平

班員（館内）池谷和信 野林厚志

（館外）梅崎昌裕 小谷真吾 小坂康之 齋藤暖生 篠原 徹 須田一弘 竹川大介
那須浩郎 広田 勲 藤村美穂 古澤拓郎 安岡宏和 山本宗立

研究会

2017年10月7日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

卯田宗平 (国立民族学博物館) 「これまでの研究会の成果を踏まえて(2)」

中島 淳 (福岡県保健環境研究所) 「日本におけるドジョウ文化——その多様性と歴史、品種改良、食文化」

コメンテーター・竹川大介 (北九州市立大学・生態人類学)

質疑応答

中田梓音 (国立民族学博物館) 「接客者と客とのバランス——常連化に向けた接客言語ストラテジーの事例から考える」

コメンテーター・須田一弘 (北海学園大学・文化人類学)

質疑応答

2017年10月8日(日) 9:30~12:30 (国立民族学博物館 大演習室)

今井友樹 (工房ギャレット・映画監督) 「映画の説明・岐阜県のカスミ網罟を描いた長編ドキュメンタリー映画『鳥の道を越えて』鑑賞 (90分)」

鳥と人間とのかかわりをめぐる議論 (オトリのツグミの飼育方法や鳥をめぐる食文化など)」

コメンテーター・亀田佳代子 (滋賀県立琵琶湖博物館・鳥類生態学)

質疑応答

今後の予定確認

2017年12月16日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

卯田宗平 (国立民族学博物館) 「これまでの研究会の成果を踏まえて(3)」

須田一弘 (北海学園大学・生態人類学) 「野性を飼い馴らすことの難しさ——インドネシア西ジャワ州におけるコピラク生産の事例から」

コメンテーター：梅崎昌裕 (東京大学・人類生態学)

東城義則 (国立民族学博物館) 「都市公園を中心とした動物保護活動の仕組みとその系譜——奈良公園におけるシカを事例に」

2017年12月17日(日) 9:30~12:30 (国立民族学博物館 大演習室)

井村博宣 (日本大学文理学部教授・地理学) 「『半天然アユ』養殖の始まり (仮題)」

コメンテーター：齋藤暖生 (東京大学・植物生態学)

2018年2月3日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

卯田宗平 (国立民族学博物館) 「これまでの研究会の成果を踏まえて(4)」

「特集：日本列島における蜂と人とのかかわりから『野生』を考える」

三崎尚子 (北九州市立大学) 「『山師』の複合的マイナー・サブシステム——高千穂地域のオオスズメバチの事例を中心に」

池谷和信（国立民族学博物館）「民博展示場からドメスティケーションを考える——日本養蜂の事例を中心として」

竹川大介（北九州市立大学文学部）「あえてドメスティケートしない——九州山地におけるニホンミツバチ養蜂の多様な戦略と自然観」

2018年2月4日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館 大演習室）

辻 貴志（佐賀大学大学院農学研究科）「フィリピンにおけるスイギュウの飼養と利用形態——ドメスティケーションとの関連から」

コメンテーター：広田勲（岐阜大学応用生物科学部・多様性保全学）

成果

2017年度は計3回の研究会を開催した。第1回目の研究会では代表者である卯田がドメスティケーションに関わる最新の研究動向と昨年度から持ち越された研究課題、今後の活動方針を示した。その後、中島淳（福岡県保健環境研究所・ゲストスピーカー）が日本のドジョウ文化に関わる研究報告をおこなった。この報告を通して、中島はとくに魚類のドメスティケーションが哺乳類のそれに比べてタイムラグがあるという事実とその要因を明らかにした。また、今井友樹（映画監督・ゲストスピーカー）はみずからの映画「鳥の道を越えて」の上映と調査報告によって、霞網猟において使用されるツグミの飼育技術や日本における渡り鳥文化の存在と消滅の過程を明らかにした。こうした研究報告を踏まえ、第2回目では、須田一弘（北海学園大学）がコピルアク生産におけるジャコウネコ飼育の事例を報告した。この報告を通して、須田は群居性ではなく、夜行性の野生動物の野性を飼い馴らすことの困難さを明らかにした。つづいて、井村博宣（日本大学文理学部・ゲストスピーカー）が「半天然」アユに関わる研究成果を発表した。この報告により、井村は魚類の飼育において生産性を考慮して画一化された方向に進む場合もあれば、逆に「天然」の特性に合わせるかたちで改良が進められる場合があることも明らかにした。第3回目の研究会では、日本列島におけるハチと人のかかわりにみる「野性」を考える特集を組んだ。このなかで竹川大介（北九州市立大学）は、ニホンミツバチの養蜂戦略のなかでみられる、人為的な介入を最小限にとどめ、むしろ野生性を積極的に残しながら利用しているというスタンスを明らかにした。池谷和信（国立民族学博物館）は民博展示場の日本養蜂の事例から家畜化と野生性の温存という視点から巣箱が使い分けられていることを明らかにした。こうした研究成果を踏まえ、本研究会では、昨年度に注目した手段としての動物だけでなく、生産の対象としての動物にも着目することで、野生性の保持にかかわる事例を集めていく必要があるという結論にいたった。

「会計学と人類学の融合」

地中海時代のイタリアに端を発する近代会計学は、口別計算から期間損益計算、現金主義から発生主義へという進化主義的発想を明確に持つディシプリンの一つであるといえる。また、企業会計を中心に発展してきたことから、企業のグローバル化に伴い、必然的に会計基準のグローバル化を求めるようになっていった。その結果、各国の企業会計の違いを超えたグローバル・スタンダードとしてのIFRS（国際財務報告基準）が策定されて、会計関係者の間ではIFRS適用問題が大きな関心事となっている。

他方で文化人類学者は進化主義思考やグローバリゼーションに対してクリティカルに見る方法を駆使してきた。会計との関係でAudit Cultures（Shore & Wright 1999, Strathern 2000）についても批判を加えている。しかしながら、Audit Culturesの中核に位置するともいえる会計学者にその声が届いているとはとても思えない現状もある。

本研究会はこうした状況をかながみて、両者が議論しやすい課題として会計基準の中でもガラパゴス化した非営利会計基準（2008年公益法人会計基準、2011年学校法人会計基準、2015年社会福祉法人会計基準など。これらは実は全く異なっている）に焦点を当てる。これらは、各法人制度の文化的側面を色濃く残し、また、いずれもごく最近になって改訂が加えられたという特徴を持つ。接点が難しい会計学と文化人類学の中で、会計と文化、普遍化と個別化の問題を両学問からアプローチするのに最も適したテーマであると考え、本申請はこれらを中心に会計学と人類学の学際研究を試みようとするものである。

研究代表者 出口正之

班員（館内） 宇田川妙子 竹沢尚一郎

（館外） 石津寿恵 大貫 一 尾上選哉 金セツピヨル 西村祐子 早川真悠 深田淳太郎
藤井秀樹 古市雄一朗 安富 歩 八巻恵子

研究会

2017年6月24日(土) 14:00~18:40 (国立民族学博物館 第3演習室)

大貫 一 (金沢星陵大学)「ジンバブエのハイパー・インフレーション現象の会計学的理解」

討論

安富 渉 (東京大学)「生きるための簿記会計」試論

討論

深田淳太郎 (三重大学)「交換レートを作り出す：パプアニューギニア、トーライ社会における貝殻貨幣と法定通貨の関係」

討論

2017年10月21日(土) 14:00~18:20 (国立民族学博物館 第4セミナー室)

早川真悠 (国立民族学博物館)「資料紹介：ハイパー・インフレーション期の決算書 (ジンバブエの新聞より)」

討論

窪田 暁 (奈良県立大学)「ドミニカの野球移民とお金の流れ」

討論

古市雄一郎 (大原大学院大学)「贈与取引の会計学的理解」

討論

2017年12月25日(月) 14:00~18:40 (国立民族学博物館 第4セミナー室)

出口正之 (国立民族学博物館)「領域設定総合化法によるトランスフォーマティブ研究序説 人類学と会計学のマッピング」

討論

福岡正太 (国立民族学博物館)「比較音楽学から民族音楽学へ」

討論

山田辰己 (国際会計基準審議会 理事)「企業のグローバル化と会計のグローバル化 IFRSの議論をめぐって」

討論

全体討議

2018年2月25日(日) 14:00~18:40 (国立民族学博物館 第3演習室)

出口正之 (国立民族学博物館)「本日の研究会の狙い」

三代川正秀 (拓殖大学名誉教授)「辺境会計研究の覚書」

議論

竹沢尚一郎 (国立民族学博物館名誉教授)「講と産業組合のあいだ——柳田国男の誕生」

議論

成果

本年度は、融合化に向けて研究会の目的に沿って各メンバーが報告を行い活発な議論が展開できた。例えば、会計学者の大貫一は人類学者の早川真悠のジンバブエのハイパー・インフレーションの報告を受けた形でその会計学的理解を行った。さらに、その報告が新資料の発見につながり、早川が「資料紹介：ハイパー・インフレーション期の決算書 (ジンバブエの新聞より)」を再度報告するなど、活発な学問間の議論の融合が行なわれた。これらは文化人類学者と会計学者の共著報告として会計の学会報告にまでつながっていった。

また、会計のグローバル化の中心にいて国際会計基準作成に直接あつた山田辰己氏をゲストに招くこともでき、IFRS (国際財務報告基準) の問題に文化的側面から迫ることができた。こうしたことから内外の注目を集め、会計史の研究者など当初想定していなかった他分野の研究者の積極的な参画にもつながっていった。

さらに、深田淳太郎の報告からは、貝貨が国家として制度化されている中で「納税」という手段にも使用されていることから、会計ばかりではなく税に関する研究会の関心も高まっていった。非営利会計における「ビジネスセントリズム」という新概念も研究会から誕生し、会計学と文化人類学による融合研究が学術的にも非常に意味があることが判明した一年となった。

『「障害」概念の再検討——触文化論に基づく『合理的配慮』の提案に向けて』

2016年4月、障害者差別解消法が施行された。現在、さまざまな分野で障害者に対する「合理的配慮」のあり方について議論が始まっている。米国のADA (アメリカ障害者法) は1990年に制定され、その理念が社会に定着するまで20年以上かかった。日本でも今後、差別解消法に基づく諸システムを構築していくために、「障害」に関する幅

広い研究が求められているといえよう。

一方、2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催に向けて、ユニバーサル・ツーリズム（誰もが楽しめる観光・まちづくり）の必要性が各方面で強調されている。旅行業界では、障害者対象のツアーを企画・実施するケースも増えた。パラリンピック効果による障害者への関心の高まりを一過性のブームで終わらせないためにも、娯楽・余暇における「合理的配慮」の形態を文化人類学的に研究する試みが不可欠だろう。

本共同研究の目的は、2012～14年度に実施した「触文化に関する人類学的研究」を継承し、「ユニバーサル・ミュージアム」「手学問」などの理論を駆使して、「障害」概念を再検討することである。公共施設（とくに博物館）での「合理的配慮」の具体像を探究し、広く社会に発信したい。

研究代表者 廣瀬浩二郎

班員（館内）小山修三

（館外）石塚裕子 大石 徹 大高 幸 岡本裕子 黒澤 浩 篠原 聰 鈴木康二
原 礼子 藤村 俊 堀江典子 真下弥生 宮本ルリ子 山本清龍

研究会

2017年7月16日（日）10：00～17：00（南山大学 人類学博物館）

黒澤 浩（南山大学）「究極の『さわる展示』を求めて——南山大学人類学博物館の未来」

北井利幸（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）「考古展示のユニバーサル化の試み——橿原考古学研究所附属博物館の現状と課題」

田村香里（三重県総合博物館）「生き物に触れる——三重県総合博物館・カモシカ展を事例として」

さかいひろこ（イラストレーター）「発掘から発信へ——『ふるさと考古学講座』が地域を活性化する」

藤村 俊（美濃加茂市民ミュージアム）「歩く、さわる、感じる——ミュージアムを飛び出して、遺跡に出かけよう」

総合討論（廣瀬浩二郎）「何を、どうさわるのか——博物館と地域をつなぐ実践に向けて」

2017年11月19日（日）10：00～17：00（国立民族学博物館 第3セミナー室）

村田麻里子（関西大学）「マンガの伝え方・感じ方——『誰のためのマンガ展？』の成果と今後の課題」

真下弥生（ルーテル学院大学）「創る・使う・活かす——鑑賞ツールとしての触図の可能性」

安曾潤子（日本大学）「化石は語る——自然史系博物館におけるハンズオン展示・ワークショップの試み」

石塚裕子（大阪大学）「被災地ツーリズムのユニバーサル化に向けて——いわきでのUT実践の中間報告」

総合討論（廣瀬浩二郎）「誰が、何を、どう伝えるのか」

2018年3月4日（日）10：00～17：00（国立民族学博物館 第3セミナー室）

半田こづえ（明治学院大学）・安原理恵（サノフィ株式会社）「触る・聴く・語る——視覚障害者のミュージアム体験をより豊かにするために」

鈴木康二（滋賀県文化財保護協会）「誰が、いつ、何をすべきか——博物館におけるワークショップで『人』が果たす役割について」

松山沙樹（京都国立近代美術館）「美術鑑賞の新たな可能性を拓く——京都国立近代美術館の挑戦」総合討論（廣瀬浩二郎）「『触る・聴く・語る』の先にあるもの」

成果

今年度は「ユニバーサル・ミュージアム」の事例報告に基づき、視覚障害者に対する「合理的配慮」のあり方を具体的に探究した。2017年7月の研究会では、考古系・自然史系のミュージアムにおける「さわる展示」の最新動向について情報交換を行なった。とくに、ミュージアムの地域連携に関して、ツーリズムの観点も加えて議論できたのが有意義だった。2017年11月の研究会では、絵画・漫画など、「さわれないもの」を伝える・感じる手法について検討した。近年、各地の美術館では視覚障害者を対象とする絵画鑑賞プログラムが実施されているが、それらの改善・充実に向けて、本研究会の成果を積極的に発信していきたい。2018年3月の研究会では、ワークショップや鑑賞プログラムを運営する際の「ひと」の役割について多角的に討議した。「合理的配慮」を具体化していくに当たって、「ひと」が何をなすべきなのか、あらためて確認することができた。今年度の共同研究を通じて、ミュージアム、観光・まちづくりにおける「合理的配慮」のケーススタディは十分蓄積できた。「障害」の新定義の提案をめざす来年度（最終年度）の研究総括のために、準備が整ったといえるだろう。

「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」

本研究では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつ、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する5つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について、物質文化に焦点をあてて検証することにより、沙漠社会の移動戦略の比較研究を推進する。注目する物質文化は、(1)ラクダと船に関わるモノ（陸域と海域の連続性）、(2)飲料と食料に関わるモノ（食品保存と運搬性）、(3)衣装と住居に関わるモノ（熱帯と温帯・寒帯の対称性）である。これらの物質文化の検討をもとに、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの観点から沙漠社会の移動戦略を解明する。並行して、片倉もとこ（文化人類学者／地理学者）によるアラビア半島に関する現地調査資料（1968-2008）、小堀巖（地理学者）によるアルジェリア・サハラ沙漠に関する現地調査資料（1968-2010）といったおよそ半世紀前に記録・収集された学術資料を活用して、生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化についても検証していく。

研究代表者 縄田浩志

班員（館内）西尾哲夫

（館外）石山 俊 遠藤 仁 片倉邦雄 河田尚子 郡司みさお 児玉香葉子 坂田 隆
真道洋子 中村 亮 西本真一 原 隆一 藤本悠子 古澤 文 渡邊三津子

研究会

2017年7月22日（土）10：30～17：00（国立民族学博物館 第3演習室）

渡邊三津子（千葉大学）「中央アジアの食品保存と運搬性」

縄田浩志（秋田大学）「西アジア・北東アフリカのコーヒー文化にみる移動戦略」

石山 俊（総合地球環境学研究所）「サハラ・オアシスのナツメヤシ文化：小堀巖先生写真アーカイブの検討」

2017年7月23日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館 第3演習室）

総合討論「食品保存、運搬性、移動戦略」

2017年9月30日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館 第2演習室）

原 隆一（大東文化大学）「イラン南部、メイマンドのバラ水工房」

真道洋子（東洋文庫）「薔薇水とガラス器」

2017年10月1日（日）10：00～15：00（国立民族学博物館 第2演習室）

遠藤 仁・縄田浩志（秋田大学）「エジプト、ハーン・ハリールにおける黒サンゴ及び木製数珠製作工房とその技術」

総合討論「技術の継承、職人の移動、モノの交流」

2018年3月10日（土）10：30～17：00（国立民族学博物館 第1演習室）

西本真一（日本工業大学）「古代エジプトにおける建築様式と男女の空間」

郡司みさお（片倉もとこ記念沙漠文化財団）「イスラームの建築様式と男女の空間」

総合討論「日寒暖差、日陰、女性の生活」

成果

本共同研究2年度目の2017年度には、物質文化の中でも、飲料と食料に関わるモノ、衣装と住居に関わるモノに焦点をあてて、7つの事例報告をもとに「食品保存、運搬性、移動戦略」「技術の継承、職人の移動、モノの交流」「日寒暖差、日陰、女性の生活」について議論を行った。

例えば、スーダンの沙漠（コーヒー栽培の起源地に隣接し、初期の伝播・拡散にも一定の役割を果たした）において、ラクダなどで長距離移動する時には、コーヒーを作るためのセットが必ず持参される事例が示された。暑い乾燥地では水そのままを飲むよりも、コーヒー豆を焙煎し粉碎した粉を直に煮出して香辛料入りで飲む方が、少量の水を効率的に摂取できる。原料のコーヒー豆・香辛料は保存がきき、道具もいたって軽量で、持ち運ぶ水の量も少なく済む。そのような観点から、「沙漠・乾燥地での移動戦略・適応戦略としてのコーヒー文化」という新しい着眼点が導き出された。

「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」

音楽の人類学的研究は半世紀ほどの歴史をもつが、従来の研究の多くは、音楽の意味を音（テキスト）に求める「音楽学」寄りの研究と、音の文化的背景（コンテクスト）に音楽の存在意義を求める「人類学」寄りの研究とに分かれる傾向にあった。また、両者の学術的対話の困難さもこれまで指摘されてきた。

他方で近年では、人類学と音楽学とを架橋する研究者らが、人間の音楽的な営みを“音楽すること musicking”として理解することを提唱している。musicの動名詞型にあたる「ミュージッキング」には、歌い・奏し・踊ることだけでなく、手拍子や聴取といった行為までも含まれる。これは、音楽的实践における身体性に注目することで、“音楽”という近代のかつ抽象的な概念を根本から再考するために提案された鍵概念である。

本研究は、記述・分析の対象を「音楽」から「ミュージッキング」へとずらし、パフォーマンスのさなかにある身体同士のやりとりを音楽的出来事に不可欠な一部分として語るための方法論を確立することを目的とする。

研究代表者 野澤豊一

班員 (館内) 川瀬 慈 寺田吉孝 福岡正太
(館外) 青木 深 井手口彰典 岡崎 彰 梶丸 岳 大門 碧 武田俊輔 谷口文和
西島千尋 伏木香織 増野亜子 松平勇二 矢野原佑史 輪島裕介

研究会

2017年4月1日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第7セミナー室)

野澤豊一 (富山大学) 「趣旨説明——フィールドでパフォーマーになること」
松平勇二 (国立民族学博物館) 「祈りとしてのンビラ音楽に参加する (ジンバブエ)」
増野亜子 (東京藝術大学) 「パフォーマーになること——バリのガムラン演奏と研究」
谷 正人 (神戸大学) 「指から音楽を理解すること——サントゥールとセタールの比較から」
全員・総合討論

2017年4月2日(日) 9:30~18:00 (国立民族学博物館 第7セミナー室)

大門 碧 (京都大学) 「舞台裏から体感するウガンダ首都のショー・パフォーマンス」
矢野原佑史 (京都大学) 「カメルーンにおけるヒップホップ・カルチャーの民族誌」
伏木香織 (大正大学) 「『巻き込まれる』——フィールドで儀礼の執行者の一部となること」
神野知恵 (東京藝術大学) 「韓国の農楽研究における演奏実践の重要性——リズムの聴き取り、再現、分析、可視化のプロセス」
総合討論

2017年9月30日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第7セミナー室)

野澤豊一 (富山大学) 「趣旨説明」
谷口文和 (京都精華大学) 「電子音響技術に媒介されたミュージシャンシップの形成」
井手口彰典 (立教大学) 「初音ミク [で/と/が] 音楽する——偶像 (アイドル) と人形 (フィギュア) の狭間で」
全員・総合討論

2018年1月20日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第7セミナー室)

野澤豊一 (富山大学) 「趣旨説明」
長尾洋子 (和光大学) 「おわら風の盆の古層——『群れる』身体性の再構築はいかにして可能か」
青木 深 (東京女子大学) 「くうたう／きく」ことの記録、記憶、忘却——太平洋をわたる『支那の夜』とその来歴」
全員・総合討論

2018年1月27日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第4セミナー室)

野澤豊一 (富山大学) 「趣旨説明 オラリティを捉え返す——ミュージッキングと語りの間から」
飯倉義之 (國學院大学) 「こえとことば、からだとことば——語りと身体性」
野澤豊一 (富山大学) 「『信じている』と語り歌うこと——黒人ペンテコステ派キリスト教におけるオラリティ」
梶丸 岳 (京都大学) 「なぜ (わざわざ) 歌を交わすのか——掛け合う歌のオラリティ」
増野亜子 (東京藝術大学) 「歌うことと話すこと——バリの歌芝居アルジャにおける声の様式性」
全員・総合討論

成果

2017年度は4回 (のべ5日間) の共同研究会を実施した。4月1・2日の研究会では、調査地で実演者としての経験をもつ研究者7名 (ゲストスピーカーが2名) が「フィールドでパフォーマーになること」を主テーマに発表した。討論ではお主に、演奏することの身体性や、音楽を上演するための技術と場を作り出すことの技能の異同に

ついて意見が交わされた。9月30日は、メディアに媒介された音楽を前提とするミュージッキングについて班員2名が発表し、作品を入念に作り出すことをmusickingという概念にどう結び付けるかが話し合われた。1月20日は、過去の音楽的経験にmusickingというキーワードで如何にアプローチできるかということを考えるために、2名(ゲストスピーカーが1名)が発表した。1月27日は、musickingと語りというパフォーマンス行為を題材に、「オラリティ」概念を再考する公開シンポジウムを行った。4名(うちゲストスピーカーが1名)の発表を受けて、オーラルなパフォーマンスをどう記述すべきかということなどについて意見が交わされた。

「現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究」

本研究は、現代日本の超高齢社会における地域包括ケアシステムとそこに通底する死生観や人格観、家族観を明らかにしながら、「医療の生活化」という概念を手掛かりに、地域社会での「看取り文化」を新たに構想することを目指す。

日本は世界に類を見ないスピードで高齢多死社会に突入しつつある。病院死がおよそ80%占める一方、「終活」の展開や葬儀の多様化が進み、「その人らしい死」「死の自己決定」という死の文化的、社会的変容が起こっている。また「独居老人」や「孤独死」という言葉に見られるように家族観の変容と地域社会の変貌が指摘されている。近年、厚生労働省は高齢多死社会を見据えて病院医療から在宅医療への転換を打ち出し、終末期医療の再検討を始めた。これにより日本各地で在宅(施設を含む)での「看取り」のあり方が模索され始めている。今日、在宅の「看取り」には医療福祉制度の充実や多職種連携は不可欠であるが、そこには実践的課題と学術的課題がある。前者は、既存の地域包括ケアシステムが抱える問題、公的介護と家族介護とのバランスという課題である。後者は、死の医療化論、死生観と家族観の変容、死の個人化を促す地域社会の再検討という理論的課題である。本研究では、国外の「看取り」実践を参照点とし、上記の二つの課題を横断的に捉えつつ、現代日本における「看取り文化」の再構築への道筋を提示する。

研究代表者 浮ヶ谷幸代

班員(館内) 鈴木七美

(館外) 相澤 出 渥美一弥 鈴木勝己 田代志門 田中大介 松繁卓哉 山田慎也

研究会

2017年5月13日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

花戸貴司(滋賀県永源寺診療所所長)「地域での看取りを支える——永源寺の地域まるごとケア」

指定討論

総合ディスカッション

2017年5月14日(日) 10:00~12:00 (国立民族学博物館 大演習室)

鷹田佳典(人間総合研究センター招聘研究員)「緩和ケアへの公衆衛生アプローチに基づく実践的取り組み——イギリス・スコットランド・オーストラリアにおけるコミュニティケアの展開」

2017年7月1日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

新村 拓(北里大学名誉教授)「看取り文化」

鈴木勝己(二松学舎大学)「タイ・エイズホスピス寺院における仏教看護と看取り」

2017年7月2日(日) 10:00~12:00 (国立民族学博物館 大演習室)

森田敬史(医療法人崇徳会長岡西病院)「長岡西病院ビハラー病棟における『看取り』」

2018年2月24日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

中村沙絵(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科)「スリランカにおける老年と看取り——在宅・施設の事例検討」

関根康正(関西学院大学)「生死のヘテロトピア」

2018年2月25日(日) 10:00~12:00 (国立民族学博物館 大演習室)

田中大介(東京大学大学院総合文化研究科)「葬儀業にみる汚穢観念と職業意識」

成果

2017年度は、老い、看取り、死をめぐる日本の歴史と比較文化の視点から、本共同研究のテーマに取り組んだ。歴史の文脈では医療史研究の第一人者である新村拓氏を招聘し、仏教的な死生観から明治以降の家庭看護の導入、戦後の病院死の増加に至るプロセスについて、日本の看取り文化の歴史を総ざらいし、看取り文化の再構築に向け

での政策提言についての示唆を受けた。次に、長岡市の病院（ビハラー僧、森田敬史氏）、タイのエイズ寺院（鈴木勝己氏）、スリランカの高齢者施設（中村沙絵氏）での看取り実践についての各報告から、アジア地域での看取り実践の文化比較を行った。また、滋賀県永源寺地区から在宅医療医を招き「地域まるごとケア」について報告をしてもらい、現代日本の在宅医療での看取りの可能性について示唆を受けた。さらに、近年欧米文化圏で広まりつつある「デスカフェ運動」（社会学者、鷹田佳典氏）、葬祭業における死の汚穢観念（田中大介氏）の報告を受け、従来の「死のタブー視」を払拭する試みについて検討した。これらの報告をもとに、死をめぐる人類学的な理論的枠組み（関根康正氏）について検討を行い、次年度の課題に引き継ぐこととした。

「消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究」

本研究は、現代の日本を含む世界各地における狩猟を、消費の視点からとらえることを目的とする。狩猟は、文化人類学や日本民俗学では、これまで伝統的な生業として捉えられることが多かった。しかし、ブッシュミート取引など農山村地域から都市圏への獣肉供給の需要増大に伴う商業狩猟に加えて、その延長上に国際的な市場流通を視野に入れた産業狩猟も見られるようになってきている。そこで、(1) 近年、とくに国内で獣害対策の観点から見直されている狩猟と野生獣肉（ジビエ）の活用をめぐる現場の取り組みを民族誌的な一次データをもとに検討するとともに、(2) 世界各地における野生獣肉の流通・消費の事例と比較することで、日本における野生獣肉消費をめぐる動向をグローバルな状況のなかに位置づける。とくに、消費者による野生獣肉の消費のありかたの変化が、解体や分配の方法、狩猟法（狩猟道具や動物の殺し方）、精肉方法とその背景にある衛生概念、流通にかかわる組織の編成、食物や環境に関する人々の意識を変容させている可能性に着目し、海外の関連事例との比較を試みることで、国内における取り組みの独自性と潜在的な問題点について考察を深める。

研究代表者 大石高典

班員（館内）野林厚志 戸田美佳子

（館外）小林 舞 近藤祉秋 高橋美野梨 濱田信吾 比嘉理麻 兵田大和 安井大輔
安田章人 山口未花子

研究会

2017年7月29日（土）10：00～17：00（国立民族学博物館 第7セミナー室）

「第8回マルチスピーシーズ人類学研究会（科研「種の人類学的転回：マルチスピーシーズ研究の可能性」）」共催
近藤祉秋（北海道大学）、合原織部（京都大学大学院）「Industrialization of Deer Hunting in Nishimera, Miyazaki」

大石高典（東京外国語大学）「アフリカ都市住民の動物蛋白源嗜好性——コンゴ共和国ブラザビルの事例」

John Knight (Queen's University Belfast) 「Hunters and the meat-animal association」

山口未花子（岐阜大学）「西表島のイノシシ猟の地域比較——肉の嗜好と捕獲・止め刺し・解体方法」

濱田信吾（大阪樟蔭女子大学）「コメント」

安田章人（九州大学）「コメント」

全員「総合討論」

2017年7月30日（日）10：00～12：30（国立民族学博物館 大演習室）

全員・「研究資料検討会——国内外の狩猟マンガを題材に」

2017年12月16日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館 第3演習室）

大石高典（東京外国語大学）「趣旨説明：獣肉をめぐる犬と人の関係」

立澤史郎（北海道大学）「屋久島のシカ肉ビジネスに見る森一人一犬関係」

大道良太（大道自動車）「狩猟者から見た日本の狩猟犬事情」

合原織部（京都大学）「椎葉村における猟犬、猟師と獣肉——猟犬の死をめぐる考察から」

藪田慎司（帝京科学大学）「コメント」

池谷和信（国立民族学博物館）「コメント」

総合討論

2018年1月28日（日）13：00～17：30（国立民族学博物館 第3演習室）

大石高典（東京外国語大学）「趣旨説明：獣肉利用の現代的変容と倫理」

服部志帆（天理大学）・小泉都（京都大学）「屋久島における狩猟と野生動物利用の変容——1950年代と現代の比較から」

田村典江（総合地球環境学研究所）・小林舞（総合地球環境学研究所）「日本の主要都市における獣肉食についての消費者アンケートの調査結果報告（仮）」

安井大輔（明治学院大学）「消費社会における食の倫理について——肉食や狩猟に関する議論を中心に」

山口未花子（岐阜大学）「コメント」

比嘉理麻（沖縄国際大学）「コメント」

総合討論

成果

2017年度は、3回の研究会を開催した。第1回研究会は、海外からの特別講師を迎え、公開研究会として行った。獣肉の生産・流通・消費の変化が互いにどのような影響を及ぼしあっているかについて、中部アフリカ、九州山地、南西諸島でのフィールドワークに基づく事例研究3本と肉食と動物に関わる理論研究1本の発表に基づき検討を行った。第2回研究会では、獣肉をめぐる人と犬の駆け引きをテーマに、動物生態学者、現役猟師、若手人類学者3名による発表に対して文化人類学者と動物行動学者がそれぞれコメントをするという形式で、人と野生動物の関係という視点だけではなく犬を視野に入れて獣肉問題を捉える学際的な議論がたたかわされた。第3回研究会では、獣肉利用の現代的変容と倫理をテーマに、離島における野生動物利用史、現代都市における獣肉消費、肉食と狩猟の倫理への社会学的考察の3本の発表があった。第1回、第3回研究会の内容の一部は学術誌の特集として、第2回研究会の内容の一部は学術書の一部として2018年度に刊行される予定である。

「テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究」

ICT (Information and Communication Technology) の活用が我々の生活のさまざまな側面に浸透し、直接対面的なコミュニケーションが減少している現代社会において、今改めて身体的相互行為の価値が問われている。本共同研究では、身体技法の伝承・表象・実践にテクノロジー（ここではコンピューター技術の活用を意識したICTを指す）やデジタル技術の導入が、人の記憶やイメージにどのような作用を及ぼし、それにより身体技法がいかに変化し再構築されているか、地域ごとの事例に基づいて比較検討を行う。

身体化することが求められる芸芸や知識等は、従来、口伝や観察に基づき自得されてきたが、近年ではデジタル技術の発展に伴い芸芸をデータ化する傾向が顕著である。それによりメディアやネットなどを通じてより拡大された社会関係のなかで身体技法の共有が可能になっている。しかし、身体技法の伝承の過程で導入されているデジタル技術の役割についてはこれまで十分な検討が為されてこなかった。事実、人間の動作、発声、表情、体温などを可視化・言語化・定量化できるが、間や旋律、リズムなどの身体知は、科学的に測りきれない。そこで身体技法の伝承におけるテクノロジー利用の役割に着目した本研究は、身体論や相互行為をめぐる議論、さらにはコミュニケーション論に関する理論的貢献を目指す。

研究代表者 平田晶子

班員（館内）廣瀬浩二郎

（館外）伊藤 悟 岩瀬裕子 阪田真己子 谷岡優子 日比野愛子 柳沢英輔 吉川侑輝

研究会

2017年7月22日(土) 14:30~18:00 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

話題提供① 平田晶子 (京都文教大学) 「デジタル技術の導入に伴う身体技法の変容」

話題提供② 柳澤英輔 (同志社大学) 「映像・音響メディアを活用した音文化研究——ベトナム中部高原ゴング文化を事例に」

話題提供③ 谷岡優子 (関西学院大学) 「地方花柳界の再活性化にみる身体伝承」

討論、質疑応答

2017年7月23日(日) 10:00~16:30 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

特別講師① 倉島 哲 (関西学院大学) 「社会学と身体技法の動向について」

質疑応答

特別講師② 遊貴まひろ (プリッシマ) 「“演じる” 行為からみる身体と感情の相関」

質疑応答

2017年11月25日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 第4セミナー室)

特別講師① 小川さやか (立命館大学大学院先端総合学術研究科) 「オートエスノグラフィに溢れる根拠なき世界

の可能性——SNSに伸張したフィールドとアナキズム」

話題提供② 市野澤潤平（宮城女子学院大学現代ビジネス学部）「観光ダイビングとテクノロジー」

総合討論

2017年11月26日（日）10：00～16：00（国立民族学博物館 第4セミナー室）

話題提供① 岩瀬裕子（首都大学東京）「共有する身体における「技術」と「技能」——スペイン・カタルーニャ州の人間の塔を事例に」

総合討論

阪田先生ご欠席につき1人のみ発表

2018年2月3日（土）10：00～18：00（国立民族学博物館 第4セミナー室）

話題提供① 日比野愛子（弘前大学）「反転する人工物——人工物と集団をとらえる技術論の潮流」

質疑応答

論集制作に向けての話し合い（各自ペーパー報告、質疑応答）

総合討論、次回に向けて

成果

今年度も昨年度同様、関連分野の先行研究を検討しつつ、共同研究員や特別講師の発表を通して、共同研究内の基盤づくりと各研究員の問題意識を共有してきた。とくに第1回の研究会では、身体技法論を理論的かつ実践的に整理してきたスポーツ社会学の倉島氏と、身体と情動の関係性について問題提起された俳優の遊貴氏をお招きし、共同研究員が実際に身体を動かしながら特別講師と議論を交えた。また第2回の研究会では、文化人類学分野から小川氏と市野澤氏を招聘し、テクノロジーの介入により、人びとの生活世界や水中での身体がいかに変容しているのかについて共同研究員と意見を交換した。さらに今年度新たに加わった日比野研究員による技術論の研究動向についての整理・共有は、本共同研究に新たな視点をもたらすものとなった。なお、次年度に投稿予定の『国立民族学博物館研究報告』の特集に向け、各研究員の構想や原稿を共有する作業も開始している。

「博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から」

本館における保存科学研究では、博物館機能をもつ研究所という特色を生かし、基礎的な研究と、それを発展させた実践的な研究に取り組んでいる。その内容は、モノ資料を主たる対象に、生物生息調査や温度・湿度モニタリングなどの保存環境データを効率的に分析するプログラムの開発、データの分析結果をもとにした展示・収蔵環境の整備とその検証、化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発および条件改良、収蔵スペースの狭隘化対策と収蔵改善を目的とした収蔵庫の再編成、被災文化財への応急措置を含めた保存修復法の開発など、多岐にわたる。

本研究では、これまでの研究をさらに深化させ、環境への配慮が一層求められる21世紀の社会状況に適合する持続可能な資料管理および保存環境の基盤整備を目的とする。ここでは、研究対象をモノ資料だけでなく、映像資料にひろげるとともに、大規模な博物館等の施設のみならず、設備、人手、経費に限られる小規模な博物館等の施設や個人所蔵者でも応用・実践が可能な保存の条件や指針を提示するという新たな軸を設定して研究を進める。その上で、保存科学の基礎的・実践的研究にくわえて、21世紀の社会状況のもとでの資料の保存と活用について、その意義を整理し再考する。

研究代表者 園田直子

班員（館内）日高真吾 平井京之介 森田恒之 吉田憲司
（館外）大関勝久 大森康宏 木川りか 佐藤嘉則 末森 薫 高畑 誠 鳥越俊行
馬場幸栄 山口孝子 和田 浩

研究会

2017年10月7日（土）10：00～19：00（国立民族学博物館 第4セミナー室）

打ち合わせ

共同研究会の一環として人類基礎理論研究部・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」へ参加

意見交換

2017年10月8日（土）9：00～16：30（国立民族学博物館 第4セミナー室）

打ち合わせ

共同研究会の一環として人類基礎理論研究部・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」へ参加

2018年2月19日(月) 10:30~17:00 (国立民族学博物館 大演習室)

園田直子「共同研究の説明、問題提起」

河村友佳子「高温殺虫処理実験のこれまでの経過と課題」

橋本沙知「窒素封入によるアシ舟の保管の試み」

映像資料収蔵庫の見学

和高智美「大型民族資料を対象とした第1収蔵庫再編成について」

日高真吾「館内殺虫処理施設の説明」

成果

第1回研究会(2017年10月7日、8日)では、共同研究会の一環として、本館開催の学術潮流フォーラムⅠ 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」において、研究会メンバーのうち本館の園田と日高、東京国立近代美術館フィルムセンターの大関が発表をおこなった。シンポジウムでは、環境の変化は文化遺産保存のあらゆる側面において「持続可能である」ことを重要視する契機となったこと、媒体の変化は写真や映像というジャンルを超えて新たに「イメージ」という概念を生み出していることが提示され、21世紀における文化遺産の保存と活用について、企画に協力した本共同研究でさらに追究していくことを確認した。第2回研究会(2018年2月19日)では、国立民族学博物館で取り組んでいる化学薬剤を用いない殺虫(もしくは防虫)法の研究開発の現状と課題をとりあげるとともに、モノ資料および映像音響資料の収蔵庫、そして各種殺虫処理施設の見学と説明をおこなった。これは、今後、共同研究を進めるにあたって、まず各館での資料管理および環境整備の現状を理解することで、共通の基盤を形成することを目的としたものである。

「人類学/民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」

日本の人類学は、欧米の理論を導入して移植して学知として定着していった一方で、植民地経営への応用、ナショナリズムの勃興と民族意識の高揚、戦闘地域での情報活動など、人類学を取り巻く国内外の政治的状況で展開、発展してきたのは、欧米と同じである。そこで、単に学術活動や理論の受容を祖述するだけではなく、人類学/民俗学を取り巻く社会的状況を踏まえ、隣接諸領域を視野に含めた歴史の再構築をすることで、人類学の果たした社会的役割を明確にすることが、この研究の目的である。具体的にこの研究では、1920年代から40年代にかけての戦間期における欧米と日本の人類学/民俗学を比較対照することで、日本への影響のルーツを探り、学知として成立する人類学/民俗学を歴史のコンテクストで理解する基礎研究を目指したい。

研究代表者 中生勝美

班員(館内) 飯田 卓 宇田川妙子

(館外) 飯嶋秀治 池田光穂 白 杵 陽 江川純一 及川祥平 加賀谷真梨 栗本英世

角南聡一郎 泉水英計 田中雅一 山田仁史

研究会

2017年10月28日(土) 10:00~17:30 (国立民族学博物館 第1演習室)

中生勝美(桜美林大学)研究会の趣旨説明、人類学史研究の枠組みに関する試論、質疑応答

江川純一(東京大学)「ファシズム期イタリアにおける宗教史学・人類学・民俗学」

出席者の研究計画(出席者全員)

中生勝美著『近代日本の人類学史』合評会(出席者全員)

2017年12月16日(土) 10:00~18:00 (国立民族学博物館 第2演習室)

中生勝美 研究会経過報告 中生勝美「ミシガン大学の戦中・戦後の日本研究」

前回欠席者(加賀谷・山田・白杵)の研究計画報告

飯嶋秀治「Gregory Bateson(1904-1980)の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」

白杵陽「ドイツ・ナチ党によるアラブ世界での情宣活動」

2018年2月1日(木) 10:00~18:00 (神奈川大学国際常民文化研究所)

中生勝美(桜美林大学)「神奈川大学国際常民機構寄託の民族学協会資料の内容と研究状況」

上記資料の内容に関する意見交換および論点整理

泉水英計（神奈川大学）「米軍の琉球列島学術調査に何をみるべきか——諜報と情報宣伝から民族誌的比較へ」

Damien KUNIK（国立民族学博物館）「A brief history of French anthropology: Romanticism, Nationalism, Colonialism, Universalism」

成果

初年度の研究会は、各自の研究テーマの紹介と、この研究会で報告し、執筆する論文の構想を発表した。そのうえで、研究代表者の著書を合評して、人類学史の政治性を議論した。江川のイタリア人類学史は、あまり知られていないイタリアの研究状況を概括する刺激的発表だった。飯嶋のペイトソン研究も、これまでの研究状況をふまえたうえで、新しいペイトソン像を模索する意欲的報告だった。白杵は、アラビア語資料でのナチス研究という新しい視点での報告だった。神奈川大学国際常民文化研究所での研究会は、当該研究所が保管する民族学振興会資料を閲覧し、今後の人類学史の研究に不可欠であることを確認した。泉水の報告では、戦後のアメリカによる系統的な沖縄調査を通じて、沖縄統治と人類学調査の関係を明らかにした。Damien KUNIKは、フランスの人類学史の研究動向を報告してもらった。初年度の研究会で、新しい研究動向や、異なった視点での研究成果を吸収できた。

「文化人類学を自然化する」

文化人類学を自然科学の一部とすることを最終目標として、そのための方法を模索する。自然科学を人類学の研究対象にするのではない。人類学を他の自然科学（とりわけ心理学と生物学）と横にならぶ自然科学の一つの部門として成立させるのである。具体的には、人類学独自のことば遣いを自然科学のある部門の言葉へと翻訳する可能性を考えることから始める。すなわち還元がその方法論である。還元先の部門としては、とりあえず、心理学（認知心理学、社会心理学）そして生物学（進化生物学、疫学）を考えている。また積極的に自然化を推し進めている一部の哲学にも範を求めたい。消極的には「人類学の解消」に繋る動きととらえることもできようが、わたしは、より積極的に、文化人類学の自然化は自然科学というものを変化・発展させる契機になり得ると信じている。

研究代表者 中川 敏

班員（館内）飯田 卓

（館外）唐沢かおり 高田 明 戸田山和久 中川 理 中川 敏 中空 萌 中村 潔
浜本 満 山田一憲

研究会

2017年10月15日（日）13：00～18：00（国立民族学博物館 第2演習室）

中川 敏（大阪大学）「文化人類学を自然化するとどのようなことか——趣旨説明」

全員討議

中川 敏（大阪大学）「模型の人類学——恣意性と類似性」

全員討議

2018年1月21日（日）13：00～18：00（国立民族学博物館 第4演習室）

飯田 卓（国立民族学博物館）「自然化をめぐるいくつかの話題」

ディスカッション

高田 明（京都大学）「子育ての自然誌再考——南部アフリカのサンにおける養育者—乳幼児間相互行為の分析から」

ディスカッション

成果

第一回目の研究会において主催者の中川が、主旨説明をした。この研究会は人類学者だけでなく、その他の学問領域を専攻とする人たち、哲学者・社会心理学者・霊長類学者もメンバーとなっている。この発表によって、じっさいの作業における個々の役割分担の理解が得られた。続けて中川が自然化された人類学の具体例を発表した。活発な質疑応答があり、研究会の目的に向かって確固とした第一歩を踏み出すことができた。

当研究会が範とすべき学術潮流はさまざまである。その内で最も重要な流れが京都大学の自然科学と親和的な人類学である。第二回目の研究会は京都大学出身の二人の人類学者（飯田と高田）による発表である。飯田は生態人類学と「人類学の自然化」の関係について議論した。高田は具体的な民族誌を通しての、コミュニケーションの発

生を分析した。二つの発表を通して活発な議論がされ、人類学者・非人類学者の間の共通の議論の基盤が成立しつつあることを、確信した。

「ネオリベラリズムのモラリティ」

本研究の目的は、ネオリベラリズムの現れ方の多様性、特にモラリティの意味付けと実践を現地の文脈や当事者の視点から解き明かすことによって、今日の世界における生を民族誌的現実 に即して知らしめ、具体的な課題を明らかにしつつ、ありうべき社会の可能性を探るための議論に貢献することにある。

ネオリベラリズムは、その言葉を知ろうと知るまいと、関心があろうとなかろうと、私たちの生活を覆いつくしつつある。しかしその現れ方は、場や受け取る側の歴史や政治経済的状况、及び文化によって様々である。本共同研究では、世界各地で長期フィールドワークを行ってきた30~40代の研究者たちが、それぞれの地域と対象の人々の詳細な事例に関する情報と知見を交換し、ネオリベラリズムの世界におけるモラリティを具体的な事例を通じて理解することを試みる。

研究代表者 田沼幸子

班員（館内）相島葉月 八木百合子

（館外）伊東未来 猪瀬浩平 酒井朋子 佐川 徹 佐久間寛 佐々木祐 中川 理
深澤晴奈 宮本万里

研究会

2018年2月3日(土) 13:00~16:30 (国立民族学博物館 第2演習室)

田沼幸子「趣旨説明」

中川 理「趣旨説明に対するコメント」

参加者全員「自己紹介及び研究概要」

参加者全員「今後の研究会開催について」

成果

本年度の研究会合は2月の初回の一回であり、田沼の趣旨説明と中川の応答、各共同研究員のこれまでの研究紹介を行った。趣旨説明では田沼幸子が日々、大学で学生と接しながら感じることと、ネオリベラリズム批判を中心とする人類学的研究との間のズレから生まれた問題意識を挙げた（詳細は『民博通信』6月号掲載予定原稿を参照のこと）。中川理は、ネオリベラリズム、資本主義、経済とモラリティに関する研究の人類学的研究のレビューを紹介し、これらの流れに本共同研究を位置づけるだけでなく、そもそも「自由」とは何かを問い直し得ることを示唆し、射程を広げる可能性を示した。共同研究員は、それぞれ異なる地域やテーマを専門としてきた。だが、長年関わってきたフィールドの中で、ネオリベラリズムにまつわる様々な政治的・経済的变化が起きており、それらを研究対象として扱う上で、本共同研究の視座が有用であることが期待された。

「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」

本研究は、宗教的なモノに焦点をあて、今日の宗教の展開について比較検討を行うものである。近年、産業化やグローバル化の加速を背景に、宗教的な領域における商品化もかつてないほど急速に進んでいる。以前は特定の地域や信仰者のあいだでのみ崇拜あるいは使用されてきた聖なるモノでさえも、その複製品が大量に世に出回り、時には信仰を異にする人びとの手にまで拡散している。こうしたモノの新たな受容をとおして、それまで見られなかったスタイルの信仰や実践が生み出されるなど、宗教的な領域におけるモノの存在やその動向は、現代の宗教的世界のあり方を理解するうえで看過できない。

本研究では、世界宗教を主とする複数の宗教を事例に、近年拡大するモノの生産や流通の局面を見据え、それが各地に及ぼすさまざまな影響を浮かび上がらせ、宗教的領域におけるモノの役割、モノを介した信仰の現代的諸相について考える。またここでは、聖像、宗教画、呪具など信仰の対象であるモノだけでなく、宗教的文脈において単に儀礼の装置とみなされてきたようなモノ（祭具、音具、儀礼用具、宗教構造物など）も視野に入れ、人・モノ・信仰の諸関係について考察を深める。

研究代表者 八木百合子

班員（館外）長嶺亮子 笠井みぎわ 小西賢吾 竹村嘉晃 田村うらら 鳥谷武史 中川千草

丹羽朋子 野上恵美 福内千絵 古沢ゆりあ

研究会

2018年1月20日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

八木百合子 (国立民族学博物館)「趣旨説明」

笠井みぎわ (総合研究大学院大学)「巡礼と観光の町で生まれたアッシジ刺繍について」

野上恵美 (神戸大学)「宗教的なモノの役割に関する一考察——在日ベトナム系カトリック信徒とベトナムにおけるカトリック信徒の事例から」

2018年1月21日(日) 10:00~13:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

古沢ゆりあ (滋賀県立近代美術館)「聖画像崇敬における図像と実践——フィリピンの事例から」

八木百合子 (国立民族学博物館)「モノがつかなく信仰——ペルーにおける聖像をめぐる実践から」

成果

初年度の研究会では、代表者による趣旨説明をつうじて、研究の目的および問題意識についてメンバー間で共有した。そのうえで、各メンバーが本研究課題にかんして取り組む個別研究について簡単な報告をし、研究会全体の今後の指針設定をおこなった。

また、初回の研究会では、キリスト教世界におけるモノについて4名が発表をおこない、イタリア(笠衣)、フィリピン(古沢)、ベトナム(野上)、ペルー(八木)の事例にもとづく比較検討をおこなった。それぞれ対象とするモノは異なっているものの、現象の比較と他宗教を専門とするメンバーとの意見交換をつうじて、カトリック諸国におけるモノの扱いにかんして共通する要素を見出すことができた。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

国際シンポジウム「カナダ先住民の歴史と現状」

2017年9月9日 国立民族学博物館

代表者：岸上伸啓

2017年にカナダは建国150年を迎えた。国は多文化主義であり、先住民はカナダの重要な構成員である。1982年のカナダ憲法において、カナダの先住民は「インディアン」、「メティス(メイティ)」、「イヌイット」であると規定されている。なお、「インディアン」は、現在では一般に「ファースト・ネーションズ」と呼ばれている。2011年の国勢調査によると、ファースト・ネーションズ、メティス、イヌイットの人口は、それぞれ約85万人、約45万人、約6万人であり、その人口はカナダ総人口の約4パーセントに相当し、増加の傾向が見られる。

カナダ先住民の歴史は、16世紀初頭のヨーロッパ人の到来と、その後の植民化と建国によって大きく変わった。その歴史の流れをヨーロッパ人との関係から見ると、独立期、接触期、共存期、被支配化・同化期、再自律化期に大別できる。再自律化にあたる1970年代半ば以降、カナダ政府の先住民政策は大きく転換し、特に近年では先住民による自治や政治的自律化の動きが顕著である。本シンポジウムでは、カナダ国家との関係に留意しつつ、カナダの先住民社会の歴史と現状について紹介し、議論する。

最初にアラン・マクミランがカナダ先住民全般とブリティッシュコロンビア州の先住民の歴史と現状について基調講演をした後、太田和子がカナダ東部におけるフランスからの入植者であるアカイディア人と先住民の関係について、山口未花子がユーコン準州のカスカ社会について、岸上伸啓が極北地域と都市部のイヌイット社会について、そして齋藤玲子が日本のアイヌ民族とカナダ先住民との文化交流について報告する。その上で、カナダの先住民社会の歴史と現状について検討を加える。

実施状況

国立民族学博物館では、2017年度秋季企画展として「カナダ先住民の文化の力」を9月7日から12月5日まで開催し、カナダ先住民文化の歴史と現状を紹介する。この企画展と連動して、2017年度日本カナダ学会年次研究大会を本館で開催し、同大会の核としてカナダの先住民社会の歴史と現状を検討する一般公開の国際シンポジウムを実施した。

実施したプログラムは、次の通りである。

- 基調講演 「カナダの先住民——多様な歴史と現代の課題」アラン・D・マクミラン（サイモン・フレーザー大学）
 報告1 「カナダ東部地域（沿海諸州）の先住民・非先住民関係—パート・チャーチ事件から見えてくるもの」
 太田和子（共立女子大学名誉教授）
 報告2 「先住民カスカの生業を通じた変化と現状」山口未花子（岐阜大学）
 報告3 「カナダ・イヌイト社会の歴史的变化と現状」岸上伸啓（国立民族学博物館・総合研究大学院大学）
 報告4 「カナダ先住民とアイヌ民族の文化交流」齋藤玲子（国立民族学博物館・総合研究大学院大学）
 質疑応答・総合討論

このシンポジウムによって (1) 先住民は欧米人との接触やカナダ政府の先住民政策によって急激な社会変化を体験したこと、(2) 1970年代半ば以降、カナダ政府は過去の不適切な行為を認め、先住民との和解と共生を推進する政策を実施していること、(3) カナダ先住民社会は多くの問題を抱えているが、自らの文化を継続・活性化させ、社会を再構築する動きが見られること、さらに (4) 先住民は多民族・多文化社会カナダの重要な構成員であることなどを確認することができた。また、日本におけるカナダ先住民研究の最新の成果をカナダ学会員のみならず、一般の方々にも発信することができたとともに、企画展と連動させることによって本シンポジウムはカナダ先住民文化の歴史と現状を検討するためのフォーラムとしての役割を果たした。なお、このシンポジウムには105名が参加した。

成果

シンポジウムの内容については、2017年11月発行の『日本カナダ学会（JACS）ニューズレター』の108号（p. 4-6）において紹介した。また、アラン・マクミラン博士の基調講演論文は学会誌『日本カナダ研究年報』（第38号、2018年9月刊行）のP1～P11に掲載された。

岸上伸啓（2017）「一般公開国際シンポジウム：「カナダ先住民の歴史と現状」『日本カナダ学会ニューズレター』108: 4-6.

McMillan, Alan D. (2018) Indigenous Peoples in Canada: Diverse Histories and Modern Issues. 『カナダ研究年報』38: 1-11.

プログラム・要旨は日本カナダ学会のホームページで公開している

<http://jacs.jp/wp-content/uploads/2017/08/387955e3d59871ceb5bd1177dd37892e.pdf>

国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」

2017年10月7日～8日 国立民族学博物館

代表者：園田直子

本シンポジウムは、研究部が主体となって進めるシンポジウム・シリーズ、学術フォーラムの第1回目であり、人類基礎理論研究部の企画による。

シンポジウムでは、保存の分野に大きな影響をあたえた二つの変化に着目する。ひとつは、世界規模での環境の変化である。これにより、保存のあらゆる側面において「持続可能である」ということが重要視されるようになった。もうひとつは、アナログからデジタル世界への移行という、媒体の変化である。シンポジウムは、北米、ヨーロッパ、そして日本の研究者による、持続可能な保存環境整備、総合的有害生物管理（IPM）、長期的視点での保存技術、画像の学術的・社会的活用、これらに関わる事例研究およびフィールドで得られた経験をもとにした発表で構成された。また、国立民族学博物館のバックヤード見学、展示場見学、展示における画像活用に関するさまざまなプロジェクトの説明が含まれた。

本シンポジウムにより、基礎的かつ実践的な研究成果に加えて、変容する現代社会における文化遺産の保存と活用の意義が再考され、新たな展開が期待される。

実施状況

文化遺産の保存は、社会的や文化的な要因のみならず、自然環境や技術的背景からも影響を受ける。過去30年間、私たちの社会は大きく変容し、文化遺産の世界も新しい変化に直面してきた。本シンポジウムでは、地球温暖化など世界規模での環境の変化と、アナログからデジタル世界への移行という媒体の変化、という保存の分野に大きな影響をあたえた2つの変化に着目した。

1日目は「環境の変化」をテーマに、文化遺産の保存と活用における持続可能性を追究した。Jim Reilly（アメリカ、イメージ・パーマネンス・インスティテュート）による「持続可能な保存の理論と実践」の発表を受け、本田

光子（九州国立博物館）は「21世紀の環境ニーズに適合してつくられた九州国立博物館」、園田は1970年代の建造物という制約のなかでの「国立民族学博物館における環境にやさしい資料管理」を報告した。設備、人員、経費が限られる小規模な施設においても持続可能な保存が可能であることを、「ラオス、ルアンプラバンでの写真資料の保存」（アムステルダム王立美術館、Martin Juergens）と、「小規模な博物館等施設でも活用できる化学薬剤を用いない可動式殺虫処理」（民博、日高真吾）が示した。

2日目は「媒体の変化」では、アナログおよびデジタル技術による画像の保存と活用、そしてこれらの技術が保存において新たな課題をつくりだしていることを、Nora Kennedy（アメリカ、メトロポリタン美術館）は「写真コンサーバタの役割の変化」として保存修復家の見地から、Bertrand Lavédrine（フランス、国立保存研究センター・国立自然史博物館、民博の外国人研究員）は「デジタル時代の写真と保存」として技術面から問題を取り上げ、大関勝久（東京国立近代美術館フィルムセンター）は「アナログフィルムによるデジタル映画・映像の保存」という究極的な解決策を提示した。画像の活用と共同利用では、「日本アニメーション映画クラシックスの構築と発信」（民博、丸川雄三）、「アーカイブ映像の創造的活用に向けて」（民博、川瀬慈）、「20世紀の写真を対象とした学術画像プラットフォーム」（民博、飯田卓）と、そして民博の展示における画像活用を横山廣子、山本泰則、福岡正太、菊澤律子がそれぞれの専門と経験をもとに報告した。

本シンポジウムにより、環境の変化は文化遺産保存のあらゆる側面において「持続可能である」ことを重要視する契機となったことが再認識されるとともに、媒体の変化は写真や映像というジャンルを超えて、新たに「イメージ」という概念を生み出していることが提示された。21世紀における文化遺産の保存と活用については、企画に協力した、民博の共同研究「博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から」（代表者：園田直子）で今後、さらに追究していく。

なお、本シンポジウムは人類基礎理論研究部全員が発表あるいは運営に関わった。1日目75名、2日目81名という大勢の参加を得た。

成果

成果に基づく論文集 Sonoda, N. (ed) “*Conservation of Cultural Heritage in a Changing World*” としてSESによる出版を目指している。

国際シンポジウム「Negotiating Intangible Cultural Heritage 無形文化遺産をめぐる交渉」
2017年11月29日～12月1日 国立民族学博物館
代表者：福岡正太

国立民族学博物館の開館後、40年のあいだに、世界の諸民族の社会と文化を取り巻く環境や、それらをとらえる視点も大きく変化した。今日、文化を論じる際、「無形文化遺産の継承」が重要なキーワードとして浮上してきている。無形文化遺産は、人間による実践、表象、知識、表現、技などを指すとされ、まさに文化人類学が研究対象としてきたものとはほぼ重なり合う。また、2011年には、大阪府堺市にアジア太平洋無形文化遺産研究センターが設置され、本館もその活動に協力してきた。こうした状況と経験を踏まえ、本シンポジウムは、コミュニティの文化伝承において、立場を異にするアクター／関係者間の相互交渉により無形文化遺産が析出されていく過程を明らかにし、さらにこれらの過程におけるローカル・コミュニティと博物館等の外部の組織の協働のあり方についても議論をおこなうことを目的とした。

実施状況

シンポジウムは、アジア太平洋無形文化遺産研究センターおよび文化庁との共催で民博において開催し、3日間で、1名のキーノートスピーチ、4セッション12人のスピーカーによる研究発表（内3件は民博教員による発表）、総合討論をおこない、2日目にはカムイノミの見学もおこなった。また、シンポジウム翌日12月2日には、成果出版に関する打ち合わせと民博の展示見学をおこなった。航海術、入れ墨、音楽、芸能など研究対象は多岐にわたり、また、データベース、アーカイブ、博物館と文化伝承の関わりについても議論を深めることができた。参加者からも積極的にシンポジウムを評価する声が聞かれ、成果出版等を通じて、さらに学術的な協力関係を深め、ネットワークを広げていく見通しもつけることができた。

成果

シンポジウムプログラム等については、みんぱくウェブサイトにて公開した。アジア太平洋無形文化遺産研究セ

ンターから、2017年度内に実施報告書が刊行された。なお、成果に基づく論文集の2020年度中の出版を目指して、SESによる出版の申請をおこなう予定である。

●研究フォーラム

国際フォーラム「地域文化の再発見——大学・博物館の視点から」

2017年10月21日～22日 別府大学

代表者：日高真吾

社会のグローバル化や災害からの復興のなかで生じる地域社会の変貌は、地域で連綿と築かれてきた文化の破壊を生み出し、新旧の住民の間にさまざまな摩擦を引き起こしている。一方、これらの問題の解決策として、地域住民と大学や博物館の研究者が共同して、地域文化を再発見し、保存や活用を实践する活動が試みられるようになってきた。そして、これらの動向は、新たな地域文化を創生し、豊かな地域社会を育てていく可能性をもったものとして、注目されてきている。特に東日本大震災以降、地域文化に焦点を当てた地域復興の实践事例は、豊かな地域創生に大きな広がりを持たせる可能性があるとして、人間文化研究においても大きな研究課題となっている。

そこで、本フォーラムでは、大学・博物館の視点から、災害からの地域文化の学び、知の拠点施設が地域文化に果たす役割、地域文化と市民をつなぐ大学・博物館の役割、大学教育からの地域文化の再発見という4つの視点と次世代の研究者である大学生、大学院生の实践活動から、地域文化の再発見に果たす人文学の役割の可能性について明らかにすることを目的としている。

実施状況

本フォーラムは、台北芸術大学との協定事業の成果及び、基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」の研究成果として実施した。本フォーラムでは、大学・博物館の視点から、災害からの地域文化の学び、知の拠点施設が地域文化に果たす役割、地域文化と市民をつなぐ大学・博物館の役割、大学教育からの地域文化の再発見という4つの視点と次世代の研究者である大学生、大学院生の实践活動から、地域文化の再発見に果たす人文学の役割の可能性について明らかにすることを目的とした。参加者は2日間を通して215名に上り、盛況であった。アンケート調査の結果から、特に別府大学の学生から自身の学んでいる地域文化の価値について改めて再発見できたなどとする感想が数多く寄せられるなど、本フォーラムの目的を達成することができたと考えられる。

成果

本フォーラムの内容は、ブックレット『地域文化の再発見——大学・博物館の視点から』2018年12月に刊行。
日高真吾 HP において内容を公開。

郷土芸能復興支援メッセ in 釜石

2017年12月1日～2018年3月10日

代表者：日高真吾

民博は、東日本大震災発生後、他の組織や団体と協力し、被災地の文化遺産の被害状況を調査し、その再建・復興に向けての支援をおこなってきた。それと同時に、2012年から、被災地の郷土芸能団体を関西に招き、被災地の現状を広く知ってもらうためのシンポジウムと合わせて民博等での公演を開催してきた。また、現地の郷土芸能継承者と連携し、活動再開に支障を抱えている団体の実態調査と、必要経費の申請手続きのサポートをおこなってきた。

今回開催する「郷土芸能復興支援メッセ in 釜石」は、郷土芸能団体が活動を継承し、未来に向けてさらに活動を活性化していくために、被災した郷土芸能団体のこれまでの歩みと現在の課題を共有するとともに、今後も発生するであろう自然災害などによる存続の危機に対応するための、事前対策、支援の在り方、その支援を受けるためノウハウの整理、平時における衣装・道具類の維持・管理の仕方などを共有する機会とすることを目的としている。

実施状況

本メッセは、2011年の東日本大震災以来、国立民族学博物館（以下、民博）で継続してきた支援研究「東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究」の成果の一つとして釜石市で実施したものである。本メッセの具体的な

内容は、「東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究」において、被災地の芸能の復興状況について現地調査をおこなう委員として協力いただいている笹山政幸氏の今年度の報告において、「沿岸地区では、震災被害のあった土地の嵩上げや盛土も終盤になっており、山車の倉庫や集会所、また元の町内に住人が戻ってくる中、新たに衣装の整備や備品の整備を行いたい団体など多数あり、助成制度など昨年度のメッセと同様、情報を知りたい、あるいは他の団体との情報交換の場が欲しいとの要望が多数よせられている」との報告を元に企画した。そこで、本事業は、昨年度大船渡市で開催した研究集会「文化の継承と発展 郷土芸能復興支援メッセ」を引き継ぎ、被災地の芸能復興において有効な情報の提供、さらには民博をはじめ、全日本郷土芸能協会、東京文化財研究所無形文化遺産部と協力し、被災地学術団体との交流と今後の協力体制の構築を図った。その結果、多数の来場者を迎え、関連資料を配布することができた。

成果

基幹研究成果公開ブックレット等で刊行予定。

活動報告について、日高基幹研究 HP (<http://www.r.minpaku.ac.jp/s-hidaka/>) にて掲載予定。

●国際研究集会への派遣

第8回 European Research Network on Philanthropy 主催国際学会

The Changing Face of Philanthropy? Philanthropy in an era of hybridity and alternative forms of organizing
での発表

2017年7月11日～7月16日 デンマーク・コペンハーゲン

出口正之

第8回 European Research Network on Philanthropy 主催国際学会 The Changing Face of Philanthropy? Philanthropy in an era of hybridity and alternative forms of organizing において論文 Philanthropy and City: New Forms of Collaboration and Culture を発表した。「政策」そのものが「フィールド」であるとする人類学者、Cris Shore と Susan Write の「政策人類学」の方法論を採用し、大阪府・市が協力して行っている副首都構想の中でフィランソロピー政策を取り入れた論文を発表した。「フィランソロピー」とは経済合理性優位の市場社会にあつての「贈与」であり、現代文明社会において「フィランソロピー」を政策人類学的に研究していくことは、人類学の基礎分野を対象とする理論的研究の深化によって新たな学術的課題を抽出し、学融合的新領域を創出する挑戦となりうる。また、みんぱく民博共同研究 M311291618 「会計学と人類学の融合」の成果として、アカウントビリティとの関係も発表できた。このことは「現代文明に焦点を当てる」という本館第三期中期目標に盛られた方針に沿うばかりでなく、政策研究に人類学的視点を入れる新たな地平を拓くことになったと思料する。

成果

論文は European Research Network on Philanthropy に発表して下記の WEB で全文を公開している。

<http://ernop.eu/wp-content/uploads/2017/06/Deguchi-philanthropy-and-vice-capital-city.pdf>

第19回国際植物学会議での発表とサテライト・ミーティングの主催

2017年7月22日～8月4日 中国、深圳

ピーター・マシウス

実施状況

7月23日から29日に、中国の深圳で開催された国際植物学会議 (IBC: International Botanical Congress) に参加し、学会終了後、海南島で野外調査を行った。7月24日には、“Economic Aroids”に関するワークショップの代表として招かれ、北京の中央民族大学の Chunlin Long 教授とともにワークショップ (ST-24) を開催し、そこで発表を行った。このワークショップには、中国、インド、スイスをはじめとする多くの国々の研究者が参加し、サトイモや他の有用なサトイモ科植物に関する研究の最前線を紹介するよい機会となった。

学会のポスター・セッションには“Perception gaps that may explain the status of taro as an orphan crop”というタイトルのポスターを提出した。

オーストラリアのクイーンズランド大学の Robert Henry 教授が主催した “Utilising Biodiversity for Food Security” というタイトルのセッションで、欠席となった研究者の代わりに、急きょ短い口頭発表を行った。この

セッションへの参加者たちと有意義な交流をかわすことができた。

学会終了後、海南島へと移動し、学会の野外調査のコーディネーターが提案してくれたルートに沿って野外調査を行った。Xinglong Tropical Botanical Garden、Wuzhishan (Five Fingers Mountain)、Jianfeng Ridge National Forest Park を訪問した。地元のガイドからこの島とその歴史について多くの情報を得ることができた。これは、今後の野外調査においてたいへん役立つであろう。

成果

学会終了後も、ワークショップ“Economic Aroids”を共同開催した Chunlin Long 教授（中央民族大学、北京）との共同研究を持続しており、科研費（「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」、基盤研究（B）海外学術調査17H04614）にかかる中国南部における野外調査を実施している。

ポスター・セッションでの発表は、論文としての準備が進んでおり、まもなく提出される。“Perception gaps that may explain the status of taro (*Colocasia esculenta*) as an ‘orphan crop’”, Peter J. Matthews and Michel E. Ghanem (The Pacific Community (SPC), Land Resources Division, Genetic Resources Programme, Centre for Pacific Crops and Trees, Suva, Fiji Islands).

館長リーダーシップ経費による事業・調査

研究公演「めばえる歌——民謡の伝承と創造——」

2017年11月11日に国立民族学博物館において研究公演『めばえる歌——民謡の伝承と創造——』を開催した。本公演は、第一部に同名の映像民族誌（60分）の上映、第二部に映像作品に登場する歌手、井上博斗氏、松田美緒氏による民謡やわらべ歌の実演、さらに第三部において、民謡の伝承と創造のあらたなかたちをテーマにした議論を出演者と川瀬で行った。機材のトラブル等の問題もなく無事に会を終了することができた。映像に出演し、本作制作に全面的に協力した三好市吾橋小学校の吉田国俊校長も後半登壇し、出演者と議論を交わすことができた。研究作品の上映、ならびに被写体と制作者間の討論、さらに、歌唱パフォーマンス、の3本立ては研究公演としては画期的な試みであったと考える。

みんぱく映画会「みんぱくワールドシネマ」（第37回～40回）

みんぱく映画会「みんぱくワールドシネマ」第37回～40回を次のように実施した。

第37回：2017年9月18日（月・祝）

上映作品＝「おみおくりの作法」（イギリス・イタリア）

解 説＝菅瀬晶子（国立民族学博物館 超域フィールド科学研究部・准教授）

参加人数＝403人

第38回：2017年11月5日（日）

上映作品＝「火の山のマリア」（グアテマラ・フランス）

解 説＝八杉佳穂（国立民族学博物館・名誉教授）

参加人数＝284人

第39回：2018年2月10日（土）

上映作品＝「テレビジョン」（バングラデシュ）

解 説＝南出和余（桃山学院大学国際教養学部・准教授）

参加人数＝302人

第40回：2018年3月10日（土）

上映作品＝「ディーパンの闘い」（フランス）

解 説＝杉本良男（国立民族学博物館・名誉教授）

参加人数＝296人

年間のテーマを「映像から考える〈人類の未来〉」とし、上記の4本の映画を通じて、人類の未来のために解決すべき問題として、順に孤独死、民族差別、宗教戒律、難民をとりあげた。

『Beads in the World』（特別展解説書「ビーズ——つなぐ、かざる、みせる」の英語版）の刊行

国立民族学博物館の特別展示『ビーズ——つなぐ、かざる、みせる——』の解説書（和文）の英語版が刊行された。タイトルは、『Beads in the World: Connect, Decorate and Show』（136頁）である。この本は、日本語から英

語に翻訳されるにともない、1頁辺りの文字数が拡大して、本の大きさをB5サイズに変更することになった。同時に、個々のビーズの写真も拡大されて標本資料の利用においてもみやすくなっている。また、英語版は、民博の国際発信のために、英国、米国、フランス、ドイツ、オランダなどの海外の主な博物館に贈られた。なお、国際学術雑誌BEADS: Journal of the Society of Bead Researchers 30 (2018) に本の書評が公表されている。

東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究

本研究では、科学研究費補助金（基盤研究（B））（一般）「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」と基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」と連携し、特に東日本大震災後の東北地方における地域文化の継承と変化について研究を進めた。今年度は2016年度に開催した企画展「津波を越えて生きる：大槌町奮闘の記録」の展示資料を一部、岩手県大槌町吉里公民館に送付し、地元住民とこれからの大槌町について考える場を設け、さらなる展示の展開を考えることができた。ここでは、町の再建計画がめまぐるしく変わる状況であるものの、今後も積極的な活用を検討することを確認した。また、本研究のなかで開発を進め、一般公開の準備を整えた「津波の記憶をつなぐ文化遺産——寺社・石碑データベース」について、11月5日一般公開を完了し、大きな反響があった。さらに、「被災地における無形の文化遺産の保護活動」の調査研究を進めるなか、釜石市で「郷土芸能復興支援メッセ in 釜石」の実施を企画立案し、実現することができた。

民博研究懇談会

第278回 5月17日

ウォルバート・シュミッド 「エチオピアとエリトリアのタカラガイ——伝統的なお守りと価値と美の客体に関するエスノヒストリー研究」

第279回 6月28日

チョイ・チーチョン 「迷信排除から文化産業へ——民間宗教と中国のグローバルな文化ディスコースの軌跡」

第280回 7月26日

ミハル・ブホフスキ／アダム・ミツキェヴィチ 「東・中欧における移民恐怖症、難民恐怖症、イスラモフォビア」

第281回 9月13日

相島葉月 「現代エジプトのスーフィズムにおける自己主体性とモダニティ」

第282回 11月15日

相良啓子 「日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の変化——数詞・親族・曜日の表現を対象に」

第283回 1月24日

スコット サイモン 「台湾と日本における人間と鳥との関わり」

第284回 2月14日

飯泉菜穂子 「みんぱくにおける学術手話通訳養成」

2-2 外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2017年度科学研究費補助金 採択課題一覧

区分	研究種目	研究課題名	氏名	研究年度
新	基盤研究 (B) 一般	シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究	西尾哲夫	2017 ～2021
	基盤研究 (B) 海外	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	マシウス ピーター	2017 ～2020
	基盤研究 (C) 一般	漁民とジュゴンの海域利用特性の解明による共存型海洋保護区モデルの創出	中村 亮	2017 ～2019
	基盤研究 (C) 一般	農の「EU化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究	杉本 敦	2017 ～2019
	基盤研究 (C) 一般	京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学	永田貴聖	2017 ～2020
	若手研究 (A)	チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究	鈴木博之	2017 ～2020
	若手研究 (B)	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	相島葉月	2017 ～2020
	若手研究 (B)	アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究 ——聖像の所有と継承に注目して	八木百合子	2017 ～2019
	若手研究 (B)	フランスにおけるジブシーの「旅の共同体」に関する文化人類学的研究	左地亮子	2017 ～2019
	規	挑戦的研究 (開拓)	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	出口正之
	研究活動スタート支援	アフリカにおける価値の計量と個別のアカウンタビリティにかんする人類学的研究	早川真悠	2017 ～2018
	研究成果公開促進費	交渉の民族誌 モンゴル遊牧民のモノをめぐる情報戦	堀田あゆみ	2017 ～2020
	特別研究員奨励費	セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究	上畑 史	2017 ～2019
	特別研究員奨励費	贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究 ——ソロモン諸島の事例から	藤井真一	2017 ～2019
継	新学術領域研究 (研究領域提案型)	植民地時代から現代の中南米の先住民文化	鈴木 紀	2014 ～2019
	新学術領域研究 (研究領域提案型)	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016 ～2020
	新学術領域研究 [学術研究支援基盤形成]	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	吉田憲司	2016 ～2018
	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究 (国際共同研究強化)	伊藤敦規	2016 ～2018
	基盤研究 (A) 海外	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究	池谷和信	2014 ～2017
統	基盤研究 (A) 一般	ネットワーク型博物館学の創成	須藤健一	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 一般	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 一般	アンデスにおける植民地的近代 ——副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤 晃	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 海外	中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究	塚田誠之	2015 ～2017
	基盤研究 (A) 海外	グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究 ——伝統継承と反捕鯨運動の相克	岸上伸啓	2015 ～2018

	基盤研究 (A) 海外	チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究	長野泰彦	2016 ～2019
	基盤研究 (A) 海外	アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築	關 雄二	2016 ～2019
	基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究	野林厚志	2014 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用	園田直子	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究	日高真吾	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	映像人類学とアーカイブズ実践——活用と保存の新展開	大森康宏	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 海外	ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究	森 明子	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 海外	2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究	南真木人	2016 ～2018
	基盤研究 (B) 特設	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	西尾哲夫	2016 ～2020
	基盤研究 (B) 一般	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合	丸川雄三	2014 ～2017
	基盤研究 (B) 海外	墳墓からみたインダス文明期の社会景観	寺村裕史	2014 ～2017
継	基盤研究 (C) 一般	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義	金谷美和	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究	上羽陽子	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究	宇田川妙子	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考	菅瀬晶子	2015 ～2017
続	基盤研究 (C) 一般	本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究	笹原亮二	2015 ～2019
	基盤研究 (C) 一般	ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開	卯田宗平	2016 ～2019
	基盤研究 (C) 一般	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	藤本透子	2016 ～2020
	基盤研究 (C) 一般	スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究	竹村嘉晃	2016 ～2018
	基盤研究 (C) 一般	国立天文台水沢収蔵資料から読み解く緯度観測所120周年	馬場幸栄	2016 ～2019
	基盤研究 (C) 一般	現代インドの村落・都市中間地帯における親密圏の再編——移動社会を支えるケア関係	常田夕美子	2015 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	1950年代アメリカ海軍のグアム島における風下被ばく調査に関する研究	西 佳代	2016 ～2018
	基盤研究 (C) 一般	高等教育機関における意思疎通支援人材育成システムの開発	池谷航介	2016 ～2018
	基盤研究 (C) 一般	デジタル時代に求められる映像人類学——新たな映像民族誌の創造に向けて	村尾静二	2016 ～2018
	若手研究 (A)	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究	伊藤敦規	2014 ～2017
	若手研究 (A)	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究	吉岡 乾	2015 ～2018
	若手研究 (A)	中国甘粛仏教石窟壁画の制作技法に関する多面的研究	末森 薫	2016 ～2018

継	若手研究 (B)	現代イランにおける東洋的身体技法の実践とイスラーム的転回をめぐる人類学的研究	黒田賢治	2014 ～2017
	若手研究 (B)	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明	太田心平	2013 ～2017
	若手研究 (B)	『千一夜物語』 仏語訳者マルドリユス再考——<遺贈コレクション>の分析を中心に	岡本尚子	2014 ～2017
	若手研究 (B)	笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較	金田純平	2015 ～2017
	若手研究 (B)	世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会：住民の生活史の視点から	中村真里絵	2015 ～2017
	若手研究 (B)	アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究	戸田美佳子	2015 ～2017
	若手研究 (B)	現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究	松尾瑞穂	2016 ～2019
	若手研究 (B)	社会をつくる芸術：「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	登久希子	2016 ～2018
	若手研究 (B)	ポスト過疎時代における資源管理型狩猟に関する民俗知形成のモデル構築	蛭原一平	2015 ～2017
続	挑戦的萌芽研究	日本手話と台湾手話の歴史変化の解明：歴史社会言語学の方法論の確立に向けて	相良啓子	2016 ～2018
	研究活動スタート支援	南アジアの都市における食肉をめぐる社会関係の文化人類学的研究	中川加奈子	2016 ～2017
	研究成果公開促進費	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2014 ～2018
	特別研究員奨励費	花街の担い手コミュニティの日常的実践に関する歴史人類学的研究	松田有紀子	2015 ～2017
	特別研究員奨励費	シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究	松平勇二	2015 ～2017
特別研究員奨励費	現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究	關 雄二 SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante	2016 ～2018	
特別研究員奨励費	ネパールにおける教育の市場化と生活世界の変容——貧困層の親族・移動・暴力に着目して	安念真衣子	2016 ～2017	

受託事業

学術研究動向調査「文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向——現代世界の諸問題の人類学化」

委託者：日本学術振興会

担当教員：森 明子

実施期間：2017年4月1日～2018年3月31日

目的と概要

現代の文化人類学は多岐にわたり、全体を俯瞰することはかなり困難な状況である。このような文化人類学研究にあらわれつつあるものを可視化することが動向調査の目的である。

文化人類学の研究領域は従来、経済、社会、法、宗教、芸術…というような区分で呼ばれてきた。だが、その区分は現代の人類学の問題関心に適合しているわけではない。ひとりの研究者が取り組もうとする問題は、ひとつの研究領域におさまるものではなく、むしろ自ら好んで複数の研究領域を横断し、あるいは事象の重層する局面をとらえて、そこに取り組むべき問題を発見する。たとえば、近年ケアに多方面の研究者が関心を寄せている。ケアは、他者への配慮と実践の両方を含み、家族・親族の問題であると同時に、福祉や社会保障の制度の問題でもある。そこで福祉の後退の代償をケアが担っていく場面に、国家の収縮を読み取り、そこから国家を問い直す研究があらわれている。また、他者の世話をするケアは、経済と道徳がせめぎあう局面を抉り出し、そこに負債というテーマを読み取る研究もある。負債研究は、人類学の最重要概念である互酬性の再考を促す。このように、現代の人類学研

究では、これまで基本とされてきたカテゴリーが曖昧になり、微妙なズレと重なりをもつようになったことに注目し、そのズレや重なりを問題ととらえる動きが起こっている。そうした再検討の動きが、あちこちで起こりつつあることは、人類学の重要な動向であると考えられる。

研究の国際化の動きの中で、東アジアの研究者ネットワークが育ちつつあることも、近年の研究動向としてとらえておきたい。ふたつの動きを調査した。ひとつは、映像人類学で、日本・韓国・中国・台湾の研究者が、東アジア発の映像人類学の議論のプラットフォームをつくらうとしている。もうひとつは民俗学で、東アジアの民俗学ネットワークをつくりながら、ドイツの民俗学研究との交流を進めている。国際化とともに、学の新しい形がつけられつつある。

「日本財団助成手話言語学研究部門」の設置及び手話言語学事業の推進

委 託 者：公益財団法人 日本財団

担当教員：菊澤律子

実施期間：2017年4月1日～2018年3月31日

目的と概要

1. 「日本財団助成手話言語学研究部門」二年目として、常勤研究員二名、兼任研究員一名、プロジェクト研究員一名、客員研究員一名を配置する。四年先を見据えた学術研究の推進を基盤とし、当該分野のアウトリーチおよび通訳養成研究等を効果的に推進する。
2. 手話言語学のアウトリーチにおいては、以下の事業展開により、研究者の輩出および社会における手話言語の認知をはかる。
 - (1) 共同研究会形式による研究の推進、
 - (2a) 年一回の学会形式の国際研究集会開催による言語学の最新動向の報告および議論の場の提供、
 - (2b) 大学院生および一般研究者を対象とした国際学会参加支援、
 - (3) 研究基盤整備、
 - (4) 諸大学への手話言語学の授業および講演の講師派遣、
 - (5) 音声言語研究者への手話言語研究のためのスタートアップ研究支援。
3. 学術手話通訳研修事業においては、以下のような事業を展開することで、関西地区を中心とした学術通訳者養成および手話通訳ニーズのある大学への派遣につなげる。
 - (1) 学術手話通訳研修事業（スクリーニングにより対象者4～6名を選考）、
 - (2) 大学でのニーズの発掘と派遣事業、
 - (3) 言語学的知識に基づく通訳者向け言語学講座の開講、
 - (4) 将来的に高等教育機関における養成につなげる方法の模索。
4. 2022年国際手話言語学会日本開催にむけてのインフラおよびロジスティックスの整備の検討。
5. 手話に関する展示手法の検討
6. その他、言語学講座の開講や自主勉強会のサポートを行い、社会還元につなげる。

内容

1. 以下のメンバーにより研究部門を継続し、国内における手話言語学のアウトリーチ、海外からの手話関係研究者のアテンドや補助、および、学術手話通訳者養成関連事業を行った。

菊澤律子（兼任）：	事業代表者・全体統括
飯泉菜穂子（特任教授）：	学術手話通訳者養成
相良啓子（特任助教）：	手話言語学研究
石原 和（プロジェクト研究員）：	事業関連アドミニストレータ業務、全体統括補佐
池田ますみ（事務補佐員（研究支援））：	事務補佐および日本手話指導
磯部大吾（事務補佐員（研究支援））：	事務補佐および日本手話指導、研究報告執筆
佐野文哉（事務補佐員（研究支援））：	事務補佐およびフィジー手話研究
畠中雅子（事務補佐員）：	事務補佐、企画補助

部門サイト：<http://www.sillr.jp/>

2. 国際学会発表支援の実施

これについては、実施しなかった。

- (1) 時期：通年

- (2) 場所：インターネット
 (3) 対象：研究者
 (4) 内容：英文要旨指導
3. 学術手話通訳研修事業
- (1) 期間：2017年5月～2017年10月
 (2) 場所：大阪・国立民族学博物館
 (3) 対象者：関西在住を中心とする通訳者の中で一定の通訳技能を持つもの（スクリーニングにより選考）
 (4) 内容：関西における学術通訳チーム養成
 (5) 参加者数：通訳者3名
 (6) 受け入れ研究者：非該当
 (7) 使用言語：日本語、日本手話、英語
- 学術通訳に必要な知識を身につけ、技量を伸ばすことができるよう、月一回、通訳者養成の専門家を招待してのミーティングや評価等を行った。カリキュラム作成および運営業務は飯泉菜穂子が担当。
- 学術通訳に必要な知識を身につけ、技量を伸ばすことができるよう、月一回、通訳者養成の専門家を招待してのミーティングや評価等を行った。カリキュラム作成および運営業務は飯泉菜穂子が担当。
- 研修員（手話通訳者） 山崎晋（継続） 藤本富美枝、小島順子（新規）
 運営メンバー 飯泉菜穂子、相良啓子、菊澤律子（以上、国立民族学博物館） 原大介（国立民族学博物館客員教員、豊田工業大学教授） 武居渡（国立民族学博物館特別客員教員、金沢大学教授）
 外部講師 吉川あゆみ（明治大学） 甲斐更紗（九州大学） 市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院） 岡森結子（通訳コーディネーター） 馬場博史（関西学院大学） 白澤麻弓（筑波技術大学）
4. 「みんなくで手話言語学を学ぼう！」開講
- (1) 期間：2017年6月～2017年7月、全10講座
 (2) 場所：大阪・国立民族学博物館
 (3) 対象者：通訳者および通訳者を目指す方
 (4) 内容：手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！」
 (5) 参加者数：のべ241名
 (6) コーディネーター：飯泉菜穂子
 (7) 使用言語：日本語（日本語－日本手話通訳を付与：事業内容3の研修員の通訳OJTとして活用）
 講師 飯泉菜穂子（国立民族学博物館） 原大介（豊田工業大学／国立民族学博物館） 武居渡（金沢大学）
 詳細は <http://www.sillr.jp/sillr02/sillr014/20170603manabou.html>
- 5-1. （学術手話通訳研修事業関連講座）「みんなくで手話通訳士を目指そう！」開講
- (1) 時期：2017年8月
 (2) 場所：民博
 (3) 対象：士試験受験を予定している聴者手話通訳者
 (4) 内容：全3日間
 (5) 参加者数：15名
 (6) コーディネーター：飯泉菜穂子
 検証講師：市田泰弘 木村晴美 野口岳史（以上、国立障害者リハビリテーションセンター学院）
 前川和美 馬場博史（以上、関西学院大学） 甲斐更紗（九州大学） 飯泉菜穂子
 詳細は <http://www.sillr.jp/sillr02/sillr014/20170811mezasou.html>
- 5-2. （学術手話通訳研修事業関連講座）「みんなくで手話技術を磨こう！」開講
- (1) 時期：2017年10～12月
 (2) 場所：民博（昼クラス）、梅田（アットビジネスセンターPREMIUM大阪駅前：夜クラス）
 (3) 対象：関西地域の現役手話通訳者
 (4) 内容：全8回（昼クラス・夜クラス計16クラス）
 (5) 参加者数：のべ96名
 (6) コーディネーター：飯泉菜穂子
 講師：飯泉菜穂子
 詳細：<http://www.sillr.jp/sillr02/sillr014/20171023migakou.html>

6. 国際研究集会の開催

以下の通り開催した。

- (1) 時期：2017年9月22日（通訳と発表者打ち合わせ）2017年9月23-24日（国際会議）
- (2) 場所：大阪・国立民族学博物館
- (3) 対象者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）
- (4) 内容：招待講演二件および一般からの公募・採択による手話言語学研究発表
- (5) 参加者数：のべ270名
- (6) 受け入れ研究者：非該当
- (7) 使用言語：英語、アメリカ手話、日本語、日本手話（一部、国際手話付き発表あり）
- (8) インターネット配信つき（アクセス数9月23日283名、9月24日186名）
二日目に関しては、民博館側の施設の不備で配信が不能になった時間があったため、視聴率が下がったと思われる。来年度以降に向けて改善に努めたい。

詳細：<http://www.r.minpaku.ac.jp/ritsuko/ssl2017/index.html>

7. 学術手話通訳研修事業関連講座「たのしい言語学を学ぶ会」開講

- (1) 講師：吉岡乾（国立民族学博物館）
- (2) 場所：国立民族学博物館
- (3) 日程：2018年1月より2月まで全6回
- (4) 内容：「たのしい言語学を学ぶ会」
- (5) 聴講者数 毎回35名程度（一般ろう・聴）
- (6) コーディネーター：飯泉菜穂子
- (7) 使用言語：日本語、日本手話（「NPO 法人日本手話教師センター」の協力によるろう通訳・フィーダーを付与（通訳OJT））

詳細：<http://www.sillr.jp/sillr02/sillr014/20180127tanogen.html>

8-1. 手話言語学講師の派遣

- (1) 講師：原大介
- (2) 派遣先：東京都立ろう学校、難聴学級教員向けの研修
- (3) 日程：2017年7月22日（土）13:30-16:30
- (4) 内容：手話言語学の基礎
- (5) 聴講者数：17人
- (6) 受け入れ対応：豊口聡（東京都立葛飾ろう学校）
- (7) 実施言語：日本語、日本手話

詳細：http://sillr.jp/sillr011_2017d01.html

8-2. 手話言語学講師の派遣

- (1) 講師：デボラ・チェン・ピクラー
- (2) 日程：2017年5月25日
- (3) 派遣先：国際基督教大学
- (4) 対象：ろう者、研究者
- (5) 内容：アメリカ手話ワークショップ

詳細：<http://sillr.jp/sillr011.html>

8-3. 手話言語学講師の派遣

- (1) 講師：デボラ・チェン・ピクラー
- (2) 日程：2017年6月17日
- (3) 派遣先：慶應義塾大学
- (4) 対象：研究者
- (5) 内容：言語学コロキウム「目による言語学習・耳による言語学習：複モダリティの言語発達」

詳細：<http://sillr.jp/sillr011.html>

8-4. 手話言語学講師の派遣

- (1) 講師：デボラ・チェン・ピクラー
- (2) 日程：2017年7月2日
- (3) 派遣先：関西学院大学

- (4) 対象：ろう者、研究者
 - (5) 内容：基調講演「手話言語を学ぶということ」
詳細：<http://sillr.jp/sillr011.html>
- 8-5. 手話言語学講師の派遣
- (1) 講師：のべ15名によるリレー講義（コーディネーター 菊澤律子）
 - (2) 派遣先：大阪大学
 - (3) 日程：2017年後期（開講一年度目）
 - (4) 内容：全学教育授業「手話の世界と世界の手話言語☆入門」
 - (5) 聴講者数：110人
 - (6) 受け入れ研究者：金水敏（大阪大学）
 - (7) 実施言語：日本語、日本手話。日本手話による講義については原則として通訳を派遣。
詳細：http://sillr.jp/sillr011_2017d02.html
9. 学術イベントへの学術手話通訳研修事業研修員通訳派遣（OJT）
1. 『みんなばくで手話言語学を学ぼう！』（事業内容 4-1）
 - (1) 通訳者：研修員 3名（小島順子、藤本富美枝、山崎晋）
 - (2) 通訳パートナー：川鶴和子、長濱栄昭（学術手話通訳研修事業 OB）
 - (3) 検証講師：飯泉菜穂子、磯部大吾、前川和美、馬場博史、川鶴和子（学術手話通訳研修事業 OG）
 2. 京都大学医学部大学院授業
 - (1) 日程：5月19日
 - (2) 通訳者：研修員 2名（小島順子、藤本富美枝）
 - (3) メンター（同行通訳・検証講師）：飯泉菜穂子
 3. 京都大学言語学コロキウム
 - (1) 日程：8月27日
 - (2) 通訳者：研修員 2名（藤本富美枝、山崎晋）
 - (3) 検証講師：飯泉菜穂子
 4. 民博映画会『ヤギのアリーとイブラハム』（SiLLR 共催イベント）上映会
 - (1) 日程：9月9日
 - (2) 通訳者：研修員 2名（藤本富美枝、山崎晋）
 - (3) 検証コメント：学術手話通訳研修事業運営メンバー
 5. 事業内容 5 国際研究集会
 - (1) 日程：9月22日-24日
 - (2) 通訳者：研修員 3名（小島順子、藤本富美枝、山崎晋）
 - (3) 通訳評価・検証：甲斐更紗、吉川あゆみ、学術手話通訳研修事業運営メンバー
 6. 学術潮流フォーラム I 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存（SiLLR 所属研究部主催イベント）
<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20171007>
 - (1) 日程：10月7日・8日
 - (2) 通訳者：研修員 2名（小島順子、藤本富美枝）
 - (3) 通訳評価・検証：飯泉菜穂子
 7. 京都大学言語学コロキウム
 - (1) 日程：12月23日
 - (2) 通訳者：研修員 2名（藤本富美枝、山崎晋）
 - (3) メンター（同行通訳・検証講師）：飯泉菜穂子
 8. みんなばく館内通訳
 - (1) 日程：通年
 - (2) 通訳者：研修員 2名（小島順子、藤本富美枝）
 - (3) 内容：みんなばく教員連絡会、SiLLR 所属部村よりあい等における手話通訳
 - (4) 通訳フォロー・検証：飯泉菜穂子
10. 研究基盤データベース作成
担当者（原大介、佐野文哉）により、ニーズ調査票作成、調査完了。

結果に基づき、ろう者登録用フォームを作成した。

- (1) 時期：通年
- (2) 場所：民博
- (3) 対象：非該当
- (4) 内容：研究協力者リスト

その他（完了）

- 手話言語の展示および展示における手話通訳のあり方に関する検討
2017年8月に菊澤がスペイン・バルセロナのCosmoCaixa博物館の言語と脳に関する展示企画チームを訪問し、言語展示における手話言語のあり方、展示における手話通訳のつけ方、および展示における聴覚者対応に関する聞き取りを行った。また、言語と脳の展示を民博に招致した場合の日本手話対応について、検討した。
- 博物館における手話言語の導入
民博の展示場における手話通訳対応のサポートとして、博物館受付および管理スタッフを対象に、日本手話の講座を開始した。2017年1月から、週二～四回（ただしお互いの予定に応じて回数は調整）一回15分で継続している。ろうの来館者から、来館時に手話で対応してもらえてうれしかった、という評価が届け始めている。
- 博物館での講演会等における手話通訳提供協力
開館40周年記念「エジプト映画『ヤギのアーリーとイブラヒム』上映会」
日時：2017年9月9日（土）
会場：国立民族学博物館講堂
主催：国立民族学博物館
- 学術事業における手話通訳提供協力
シンポジウム「ことばのプロフェッショナル」
日時：2018年1月20日（土）13:00～16:30（開場 12:30）
会場：東京証券会館ホール（東京都中央区日本橋茅場町1-5-8 交通案内）
主催：言語系学会連合
共催：国立国語研究所
- プレゼンテーションスキルに関するDVDの作成
手話通訳・リレー通訳が入る場合の学術プレゼンテーションのコツを解説したDVDについて、英語、日本語、アメリカ手話、日本手話、国際手話版を作成した。
- プロジェクト広報のためのウェブサイトを一斉更新、サーバーを切り替え、以下にURLを変更した。
<http://www.sillr.jp/>（プロジェクトウェブサイト）
<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/sl>（団体サイトからのリンク）
- 学術手話通訳研修事業のための読み取り教材作成（飯泉）

その他（継続中）

- 学会研究報告書
-SSLL2016論文集は準備中
-SSLL2017論文集は準備中
-石原和・菊澤律子（編）『民博セミナー暮らしの中の言語学 交通事故裁判と言語学』査読のため提出済み
- 手話言語の展示のノウハウに関する調査と手話言語展示に向けての準備（菊澤）
- 手話通訳者のための手話言語学テキスト（『みんなばくで手話言語学を学ぼう！』書き起こしデータをもとに準備中：飯泉）
- 関西地区における学術手話通訳ニーズ発掘のための高等教育機関との連携、ネットワーク構築（飯泉）

「台湾文化光点計画——台湾の飲食文化を学ぶ」

委託者：台湾（中華民国）文化部

担当教員：野林厚志

実施期間：2017年7月1日～2017年10月30日

目的と概要

本事業は、台湾の社会や歴史を飲食文化という切り口で多くの市民に学んでもらう機会をもうけることを目的とする。身近な話題である食べ物や飲み物は、人々の暮らしや歴史を理解するうえで有効であるとともに、社会的課題や将来の問題を考えるきっかけを作ることが期待できる。

内容

1. 連続講座「台湾飲食文化を学ぶ」

開催回数と期間：3回（7月17日、8月20日、9月16日）。

実施場所：国立民族学博物館第5セミナー室（定員80名）

第1回

開催日：2017年7月17日（月・祝日）10:30～12:00（10:15 開場）

会場：国立民族学博物館第5セミナー室

講師：河合洋尚（国立民族学博物館）

講義タイトル：「客家料理とは何なのか？——台湾から考える」

内容：台湾で客家料理と呼ばれる飲食物にはいかなる特徴があるのか、グローバルな視点から見つめ直す

第2回

開催日：2017年8月20日（日）10:30～12:00（10:15 開場）

会場：国立民族学博物館第5セミナー室

講師：野林厚志（国立民族学博物館）

講義タイトル：「伝統？健康？——原住民族の食文化」

内容：台湾の健康ブームも手伝い、注目を浴びている原住民族の人たちの伝統的な食品や料理を紹介する

第3回

開催日：2017年9月16日（土）10:30～12:00（10:15 開場）

会場：国立民族学博物館第5セミナー室

講師：林淑美（関西学院大学）

講義タイトル：「阿宗麵線を食べたことがありますか？——台湾鯉節の歴史」

内容：日本統治初期にカツオすし食材としてあまり用いられていなかった台湾で、鯉節を製造・食用するようになった。その歴史の展開を追う

参加人数

第1回 51名

第2回 58名

第3回 61名

計 170名

2. みんなく映画会

開催期間：1回実施（10月14日）。

実施場所：国立民族学博物館講堂（定員450名）

上映作品：「總舖師（祝宴シェフ）」

実施状況

*参加人数337名

*上映作品「祝宴！シェフ」（台湾映画）

*配布物・レジュメ

・チラシ（次回ワールドシネマほか）

・アンケート

*上映はブルーレイディスク映写

*開場～開映の間に次回ワールドシネマの予告編を上映

- *上映前に野林教授、吉田館長、台湾文化センター長の挨拶
- *上映後に野林教授による、映画に関連した解説・質疑応答
- *最後に野林教授の挨拶
- *整理券を配布
- *閉会后、ハワイエにて野林教授による個別の質疑応答を実施
- *アンケートを実施（192名の回答あり・回答率57%）
- *上映中に素材の不備で映像が一度中断したが、あとはスムーズに続映できた。お詫びのアナウンスを上映後に入れる。

記事掲載

- ・万博記念公園だより10月号（9月19日）
- ・サンケイリビング新聞北摂中央（9月23日）
- ・サンケイリビング新聞北摂西（9月23日）
- ・サンケイリビング新聞北摂中央（9月30日）
- ・サンケイリビング新聞北摂西（9月30日）
- ・朝日新聞夕刊（10月4日）

広報状況

当館の出版印刷広報誌である「月刊みんぱく」への告知掲載、Webページへの掲載、公式Facebookによる情報発信、メールマガジンへの掲載を原則として実施する。また、新聞社を対象として実施しているプレス懇談会（月1回開催）でも積極的に事業紹介を行った。地方公共誌にも掲載をはかった。

民間などの研究助成金などによる研究活動

・寄附金

菊澤律子准教授研究助成金（りそなアジア・オセアニア財団）	菊澤律子
外来研究員井家晴子研究助成金（住友生命 未来を強くする子育てプロジェクト スミセイ女性研究者奨励賞）	井家晴子
早川真悠外来研究員研究助成金（公益信託 澁澤民族学振興基金）	早川真悠
順益台湾原住民博物館研究賛助金	順益台湾原住民博物館
日本カナダ学会年次研究大会運営助成金	日本カナダ学会
荘司一步研究助成金（高梨学術奨励基金 若手研究助成）	荘司一步
八木百合子機関研究員研究助成金（公益財団法人日本科学協会 海外発表促進助成）	八木百合子
伊藤渚外来研究員研究助成金（公益信託 澁澤民族学振興基金）	伊藤 渚
博物館活動助成	イカリ消毒株式会社
博物館活動助成	立命館大学
博物館活動助成	尾川文彦
博物館活動助成	神戸親和女子大学
博物館活動助成	学校法人神奈川大学
博物館活動助成	柴田 仁
博物館活動助成	学校法人龍谷大学
博物館活動助成	日本液炭株式会社
研究助成金（荘司一步）	荘司一步

2-3 文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設の基盤業務」からなり、文化資源運営

会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、情報管理施設の支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2017年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 運営体制

文化資源関連事業の体制整備

2017年度に再編を実施した文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設の基盤業務」の3種類のカテゴリーによって実施した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクト（以下「プロジェクト」という。）は、本館あるいは大学等関連機関が所有する学術資源の体系化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、期間として実施する研究プロジェクトである。

プロジェクトは、4つの分野（調査・収集、資料管理、展示、博物館社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記4分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1) 調査・収集分野

アイヌ文化を題材とした絵はがきの購入

提案者：齋藤玲子

アイヌならびにアイヌ文化を題材にした写真絵はがき（16組／133枚）を購入した。購入した資料は、古書店から購入するものであるが、発行地やおおよその時代の情報は付随しており、同時代の出版物などと照合した。

2) 資料管理分野

該当するプロジェクトなし。

3) 展示分野

特別展「ビーズ——つなぐ かざる みせる」

提案者：池谷和信

私たち人類が作り出した最高の傑作の一つとしてビーズをとらえて、つくる楽しみ、飾る楽しみをとおして日本や世界の人びとにとってのビーズの魅力を紹介した。とくに、人類が植物の実、動物の骨、貝殻などの多様な素材を加工してビーズに使用していることから、今回の展示をとおして小さな物（ビーズ）に反映した人類の叡智を伝えることをねらいとした。

特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」

提案者：園田直子

本特別展は、人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクトによるシーボルト父子関係資料の総合的調査の成果をもとに、シーボルトがヨーロッパでおこなった日本展示を紹介するもので、国立民族学博物館開館40周年記念特別展として開催した。

特別展「万博資料収集団」（仮称）

提案者：野林厚志

本館が所蔵する、1968年から1969年にかけて「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」（「万博資料収集団」）が収集した世界の諸地域の標本資料、資料収集に関連した書簡や写真等を展示する特別展示会を開催した。あわせて、展示品の解説、資料収集やコレクション形成の過程ならびにそれらの現代的意義等についての論考を収録した図録を刊行した。

企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」

提案者：日高真吾

2016年1月19日より2017年4月11日にかけて、国立民族学博物館企画展「津波を越えて生きる：大槌町の奮闘の記録」を実施した。

企画展「カナダ先住民の文化の力」

提案者：岸上伸啓

2017年に建国150周年を迎えるカナダにおける国家と先住民の関係の変遷を歴史的に検証し、カナダにおける先住民文化の過去、現状そして未来について儀礼具・生活具やアート作品等のモノ、写真、パネル等を用いて紹介する企画展を2017年9月7日から12月5日まで、国立民族学博物館本館・企画展示場において実施する。

企画展「アイヌ木彫のいま——藤戸竹喜の世界」(仮称)

提案者：齋藤玲子

北海道を代表する彫刻家の一人で、アイヌとしての誇りを持つ藤戸竹喜氏(1934～)の半世紀以上にわたる創作活動の軌跡をたどるとともに、その背景としてのアイヌ文化をとりまく社会の変化をも紹介した。(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構が主催する2017年度アイヌ工芸品展の道外会場として、同財団と共催で実施した。

標コレクション新着展示

提案者：西尾哲夫

標コレクションとは、かつて吉祥寺にあった自家焙煎珈琲専門店『もか』のオーナー、標交紀が生前収集したコーヒー関連の資料である。同コレクションの展示をとおして、中東・北アフリカ地域から世界中へとひろまったコーヒー喫茶文化を紹介した。

巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

提案者：上羽陽子

2014年2月～6月に国立新美術館で開催され、同年秋、本館特別展として開催された「イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる」を巡回展として、2017年7月22日から9月3日の会期で石川県金沢市の石川県立歴史博物館にて開催した。

特別展「子ども・誕生——モノからみる子どもの近代」(仮称) 準備

提案者：笹原亮二

2018年度春特別展として、「子ども・誕生——モノからみる子どもの近代」(仮称)の準備をおこなった。今年度は準備期間として、展示のコアメンバーで展示内容を固め、資料選定の作業を進めた。また、展示内容に合わせて、ゾーニングプランの調整を行った。

特別展「驚異と怪異の世界へ」(仮称) 準備

提案者：山中由里子

「驚異」や「怪異」の表象の展示を通して、人間の好奇心と想像力、自然界・神に対する畏怖の念についての思考を喚起するような展示の構想を練った。具体的には、「人魚」(幻獣)、「犬頭族/犬戎」(異形の民族)、あるいは「彗星」(天変地異)といったテーマを設定し、関連する絵画、書籍、民族資料、映像音響資料の展示構成とした。

企画展「『簡素な人々』のウェルビーイングと生活文化——米国のアーミッシュ・キルトとそのストーリーに注目して」(仮称) 準備

提案者：鈴木七美

米国において宗教的信条に基づき産業化・近代化を問い「簡素な生活」を続ける「プレーン・ピープル」と呼ばれる人びとの暮らしと一般社会との関連について考える素材として、アーミッシュ・キルトのデザインとそのストーリーを提示する企画展に向けて準備を進めた。

沙漠のイスラム女性の暮らしと半世紀の変容に関する企画展

提案者：西尾哲夫

文化人類学者片倉もところによるサウジアラビア現地調査資料（写真ほか）ならびに収集による本館所蔵資料（民具・衣装ほか）と、現地での最新の調査結果にもとづくデータを中心に、物質文化に焦点を当てることで、この半世紀における沙漠環境や社会構造の変化に伴うオアシスでのイスラム女性たちの生活の持続と変容について検証した。

企画展「旅する音楽——南アジア、弦の響き」(仮称) 準備

提案者：寺田吉孝

2018年10月に開催予定の企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」の準備の一貫として、展示の内容に関する研究会を開催し、熟覧を通して展示資料を選定した。

特別展「工芸継承——現在から捉えなおす国立工芸指導所」(仮称) 準備

提案者：日高真吾

2018年度秋の特別展の準備をおこなった。今年度は準備期間として、東北歴博で開催した工芸継承展の内容をさらに充実させるための打ち合わせを展示会メンバーでおこない、展示タイトル、展示期間、展示内容を整理した。

音楽展示へのインドの太鼓タブラーの追加展示

提案者：福岡正太

2017年4月にタブラーの展示方法、キャプション等について検討し、5月に追加展示の演習作業をおこなった。その後、7月から8月にかけて、新たな展示に合わせて写真パネルの修正について検討し、8月に修正を実施した。

4) 博物館社会連携分野

館外で実施可能なワークショップ開発

提案者：樫永真佐夫

館外の施設で実施可能なワークショップを開発し、2017年度熊本県立装飾古墳館にて開催されるミュージアムキッズ全国フェアでアウトリーチの試行を行う。その成果、課題、意義を整理し、博物館社会連携専門部会において今後アウトリーチ活動を行う際の条件等を検討した。

3. 文化資源計画事業

「文化資源計画事業」は、研究成果を普及することを目的とした事業で、3つの分野（資料関連、展示、博物館社会連携）に分けられる。

1) 資料関連分野

標本資料の撮影等業務

本事業は、標本資料の正確かつ詳細な画像情報を記録し、標本資料を有効に活用するための基礎的データの蓄積を目的としており、大学共同利用機関として資料に付随する情報の公開等に供するデータを作成することを目的としており、2017年度は3,600点（みなし点数）の資料を撮影することとした。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関する情報サービス、展示準備・展示運営のための資料管理及び情報の作成・管理等を行うものである。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関するデータベース掲載情報の作成、更新作業及び「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」に係るデータ整理業務を行うものである。

有形文化資源の保存・管理システム構築

本プロジェクトでは、①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理の考えに基づいた生物被害対策、②資料管理のための方法論策定：博物館の環境調査、収蔵庫の狭隘化対策とともに、資料管理に関わる基礎研

究・開発研究と事業を企画、実施、統括した。

標本資料の寄贈受入

- ・関西大学環境都市工学部建築学科の西澤英和教授が、研究のために京都伏見の農家から入手した、日本の江戸時代中期以降に普及した灌漑用の足踏み式揚水機（踏み車）の寄贈受入をおこなった。
- ・岸和田市日中友好協会の役員をしていた鎮谷和夫氏が保管していた中国貴州省の女性用民族衣装の寄贈受入をおこなった。
- ・カザフの男児用衣装、腕輪、サモワールの部品等、中央・北アジア展示に係る資料を寄贈受入をおこなった。
- ・中央・北アジア展示で展示中のゲルとともに展示すべき生活用具として、ミルク桶と付属する飼料袋の寄贈受入をおこなった。
- ・東京都目黒区の民芸品ショップ「グラナダ」のオーナー、河村美代子氏から寄贈されたメキシコ国メキシコ州メテベックで制作された「生命の木」を受け入れた。
- ・中国雲南省大理ペー族自治州大理市の農村部に居住するペー（白）族が使用する楽器「雲羅」を打つパチの寄贈受入をおこなった。
- ・本館の庄司博史名誉教授が1993年に中国青海省現地でトゥー（土）族の調査を行った際、現地で購入女性が着用する刺繍靴の寄贈受入をおこなった。
- ・福井県福井市大森町に伝わる伝統行事「陸月神事」の衣装である笠を受け入れた。
- ・大野聡子氏から寄贈申し入れを受けたマレーシア先住民の彫像およびインドネシアの織物を、国立民族学博物館所蔵資料として寄贈受入を行なった。
- ・東京都世田谷区在住の立花雅子氏から寄贈された、メキシコ国ナヤリト州コラ民族居住地で制作された仮面（10点）、メキシコ市で制作された骸骨人形（8点）、その他の民芸品、計23点を受け入れた。
- ・カザフの装身具等、中央・北アジア展示に係る資料を寄贈するものである。
- ・日本の文化展示新構築に伴い、山の暮らし（家畜飼育）を紹介するための資料として岩手県岩泉町安家の牛市で使用されていた伝票（牛のせり出場名簿）を寄贈受入をおこなった。
- ・モンゴルの低発酵チーズである「スーンホロート」の製造に用いる木型2点の寄贈を受け入れた。
- ・吹田市に在住のカトリック信者の方から、年輩の女性信徒から譲り受けた祈りの道具（カメオのブローチ兼ネックレス・メダイ）の寄贈を受け入れた。
- ・結納の際に使用される昭和10年前後作製の西陣織のふくさ3点の寄贈受入をおこなった。
- ・寄贈者である大貝威芳氏が、1960年代半ばにカナダで入手した、カナダ・ラブラドルのイヌイットが制作した小型の滑石彫刻品を受け入れた。
- ・民族芸術の研究者である外山卯三郎氏が1970年代に収集した台湾原住民族のヤミならびパイワンの工芸品のコレクションの寄贈受入をおこなった。
- ・東南アジアにおける植物利用研究の専門家である吉田よし子氏が収集した、フィリピンならびに周辺島嶼地域における、衣服や織物のコレクションの寄贈受入をおこなった。
- ・著名な自然人類学者である尾本恵市氏が収集したオーストラリア・アボリジニに関する資料の寄贈受入をおこなった。
- ・宇治市在住の中井勉氏より、木彫レリーフの寄贈の申し出があり、背景情報の付随する貴重な資料であるため、受け入れた。
- ・中川健二氏より、木彫レリーフの寄贈の申し出があり、背景情報の付随する貴重な資料であるため、受け入れた。
- ・豊中市在住の安藤圭子氏より、木彫りの熊の寄贈の申し出があり、背景情報の付随する貴重な資料であるため、受け入れた。
- ・藤田裕二氏が、インド、ボンベイ（現ムンバイ）市に駐在時の1980年代に入手したインド楽器資料2点（シタール、ハルモニウム）を受け入れた。
- ・2017年4月15日に京都大学で「編組品とその植物素材」をテーマとする民族自然誌研究会（第86回）が開かれた際、報告者である西表島在住の星公望氏が教材として西表島から持参された資料を受け入れた。
- ・姉川みさ氏から寄贈申し入れを受けたインドネシアの民族工芸資料を、国立民族学博物館所蔵資料として寄贈受入を行なった。
- ・寄贈者である高橋博己氏が、カナダに駐在中に入手した、カナダ・ラブラドルのイヌイットが制作した石製彫刻品「セイウチ像」を受け入れた。
- ・失蠟法（lost-wax casting）の過程をよく示す、製作途中の真鍮細工装身具を資料として受け入れた。

- ・カナダ先住民メイティ（メイティス）の文化的象徴物であるサッシュ（飾り帯）1つとカナダ先住民オジブウェの画家ダフネ・オジグ（Daphne Odjig）の絵画カード4枚の寄贈を受け入れた。
- ・立教大学名誉教授の青柳まちこ氏が1962年7月から1963年1月にかけてトンガ王国のトンガタブ島とハアパイ諸島で行った調査において収集した樹皮布、ごぞ、スカート、カヴァ儀礼用具等の寄贈受入をおこなった。
- ・日本の日中友好協会の会員であった石渡歌子氏がチベット自治区訪問の折、チベット族から購入したチベット族女性用民族衣装の寄贈受入をおこなった。
- ・岸和田市日中友好協会の役員をしていた鎮谷和夫氏が保管していた中国貴州省の女性用の頭飾りの寄贈受入をおこなった。

2) 展示分野

中央・北アジア展示の部分改修

2016年にリニューアルした中央・北アジア展示を、より分かりやすく正確な展示に改めるため、一部の資料の追加やキャプション改訂などを行った。

アイヌの文化展示場の部分改修

「アイヌ」の英語表記の修正、キャプション解説等と映像機器の追加による情報の補填、一部のパネルのサイズと設置位置の変更、資料の演示位置の変更、および照明・什器の改修による見やすさの改善等をおこなった。

年末年始展示イベント「干支展」

2018年の干支である「いぬ」を題材に民博が所蔵する資料をパネルとともに展示し、人々の暮らしの中で犬が果たしてきた役割や姿を示した。また民博の教職員を対象にした研修として、展示資料の撮影と説明文の作成など、展示に関わる様々な活動の研修を行った。本年度は丸川雄三准教授が中心となり事業を実施した。

3) 博物館社会連携分野

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるMMP（みんぱくミュージアムパートナーズ）の活動支援をおこなった。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

ワークショップの実施、展示新構築にともなうワークシートの更新作業、ワークシート新規作成に向けた調査などを実施した。その目的は、本館での研究活動と展示の内容を、来館者を中心とする利用者に、たのしみながら効果的に理解してもらうためであり、また利用者からの様々な意見や要望を本館の活動に反映させるためである。

みんぱく「世界のイスラーム」(仮題)の制作

「普通のムスリム」の日常が知りたいという教育現場での需要に応え、アラブ世界に限ることなく地域横断的なムスリムの生活用品を集めたみんぱくを制作した。

みんぱく「エチオピアの装い」(仮題)の制作

本館の教育機関向け貸出キット「みんぱく」に関して、アフリカ地域を知りたいという教育現場からの要望が多いため、エチオピアの民族の多様性に焦点をあてたパックを新たに制作する。2018年度の制作実施に向け、2017年度は基本コンセプトと内容を検討し、内容物の収集を行った。

カムイノミ及び重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

当館が所蔵するアイヌの標本資料に対して祈りの儀式（カムイノミ）をおこない、あわせてアイヌ古式舞踊の演舞等を実施し、一般公開した。さらに、工芸品製作の実演「アイヌ工芸 in みんぱく」をおこなった。

みんぱくの改訂

「みんぱく」は学校や社会教育施設等に宅配サービスを利用し貸出をおこなってきた。しかし2017年度の宅配業者のサービス内容を変更に伴い、これまで通りの貸出ができないパックが発生している。本事業は引き続き宅配サービスが利用できるよう、これらのパック改訂をおこなうものである。

情報関連事業

情報関連事業は、2016年度まで文化資源関連事業として実施してきた事業の一部を再編し、2017年度から実施している事業である。本事業は、「情報プロジェクト」「情報計画事業」からなり、情報運営会議が募集し、選定する。2017年度の情報関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 情報プロジェクト

情報プロジェクトは、本館又は大学等関連諸機関が所有する学術資源の情報化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、実施する研究プロジェクトである。

情報プロジェクトは、3つの分野（取材・収集、展示情報化、情報化）に関わる研究開発、または研究成果の展開を目的とし、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元を前提としている。

その選定においては、提案者が作成した提案書に対して館外の研究者や専門家から意見を聴取している。その意見書と提案者が行うプレゼンテーションに基づいて、情報運営会議の委員が審査し、委員の審査結果と評価指標を基に情報運営会議での審議を経て採択している。

1) 取材・収集分野

●セネガルにおけるソニンケ民族祭の映像取材

提案者：三島禎子

移動の民として知られるソニンケ民族が、国家をまたがって居住する民族の連帯と統合をめざして行う「民族祭」について、祭りの中心をなす儀礼そのものと、運営する組織について映像取材を行った。

●「怪異の音」の映像音響資料収集

提案者：山中由里子

この世ならざるものの出現に伴う「異音」という観点から、岡山県「吉備津神社 鳴釜神事」、奈良県「春日若宮おん祭り」、長野県「新野の雪まつり お庭の儀」、鹿児島県「高橋十八度踊り ガラッパ [河童] 踊り」において映像音響取材を行った。

●在日コリアン音楽に関する民族誌映画の制作

提案者：寺田吉孝

2014～2016年度に収集した映像音響資料をもとに、在日コリアンの歴史や生活体験と彼らの音楽活動との関連を紹介する映像番組「アラン峠を越えていく——在日コリアンの音楽」（76分）を編集し完成させた。

●ネパールのバイラヴ仮面舞踊に関する映像資料制作

提案者：南 真木人

2015年度の文化資源プロジェクト「ネパール関連のビデオテーク番組の制作（C101）」で現地撮影した素材などを用いて、みんぱく民族誌映画「バイラヴダンス」（43分37秒）を制作した。

2) 情報化分野

●佐々木高明（故名誉教授）による写真資料の学術情報化プロジェクト

提案者：池谷和信

佐々木高明氏による実態調査時の記録は、日本文化の地域的多様性を考察する上で貴重な学術資料である。このプロジェクトでは、資料の整理作業を行うとともに、データベースとして公開した。

●三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築

提案者：佐藤浩司

2008年以降の文資プロジェクトおよび情報プロジェクトで製作された東南アジア諸民族の木造家屋の三次元CG53点を35件のデータベースにまとめ、「3次元CGで見せる建築データベース『東南アジア島嶼部の木造民家』」のタイトルで公開した。

2. 情報計画事業

情報計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、計画的に実施する事業であり、所掌事務又は本館専任教員からの提案を基に、情報運営会議で実施するか否かを審議する。

1) 特別展・企画展パノラマ映像制作

●特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」

- 特別展「太陽の塔からみんなくへ—— 70年万博収集資料」
- 企画展「カナダ先住民族の文化の力——過去、現在、未来」
- 企画展 アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命—— 木彫家 藤戸竹喜の世界」
- 新着資料展示「標 交紀の咖啡の世界」

2-4 人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターは、2016年度より6年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。基幹研究プロジェクトは、(Ⅰ)機関拠点型、(Ⅱ)広領域連携型、(Ⅲ)ネットワーク型(地域研究および、日本関連在外資料調査研究・活用)の、3類型から構成され、その研究成果については、出版、データベース、映像および展示の制作等を通じて、学界や社会に広く発信するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用をはかる計画である。

本館が担当しているプロジェクトは以下のとおりである。

●広領域連携型

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

みんなくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」

代表者：日高真吾

概要

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできた。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせている。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状がある。

そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにする。また、これらの動向に人間文化研究がいかに関与し、現在(いま)への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指す。

具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という三つの視点から研究を展開する。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって有意義な形で表象するためのシステムを構築する。

調査研究活動

1. 海外調査として、2009年の台風による土砂災害で壊滅的な被害を受けた台湾の小林村の文化復興をもとにした復興活動の現地調査と、高雄における地域文化の発見と活用に関する市民活動の実態調査を台湾芸術大学とおこなった。これらの調査結果は、来年度台湾で開催予定の国際フォーラム「地域文化を保存する——その手法と意義を考える」(仮称)に反映していく予定である。
2. 国内調査として、以下の調査、ワークショップを実施した。
 - 2-1. 別府大学の地域文化を活用した大学教育の実際についての調査をおこない、2017年10月に開催した国際フォーラムの準備を進め、2017年10月に別府大学において国際フォーラムを開催した。
 - 2-2. 村上市、京都市、枚方市、気仙沼市で研究会を開催し、教育キット「地域文化の宝箱」(仮称)の制作に向けての調査をおこない、2018年度、2019年度に本格制作をおこなうための準備を整えた。
 - 2-3. より実践的な研究体制を整えるため、和高智美、河村友佳子、橋本沙知を研究メンバーに加えた。

研究成果

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

〈報告書・成果論集〉

- ① 飯田卓編『文化遺産と生きる』403頁が、臨川書店より2017年5月に刊行され、地域に着目した論考が掲載された。
- ② ブックレット『地域文化の発見・保存・活用』を2018年3月に刊行する予定であり、昨年度の国際フォーラムの内容を取りまとめ、日本と台湾での情報共有を図る。
- ③ ブックレット『地域文化を見つめる——光学調査から見えてきた十日町市お召し替え縮』『かんおんじ市民大学講座「朝鮮通信使と神恵院扁額」』を2018年3月に刊行する予定であり、会場となった十日町市と観音寺市に配布し、市民主導の地域文化の活用の可能性についてあらためて考えてもらう機会とする。
- ④ 民博通信160号において、「地域文化を再価値化する試み」を掲載予定。本研究の学術的な意義について記載する。

〈シンポジウム〉

- ① 研究メンバーの黄貞燕が台湾歴史博物館において、2017年7月14日から15日に国際シンポジウム『負の歴史遺産、歴史認識と博物館』を主宰。200名近くの参加者を迎え、日本と台湾双方の災害時の文化活動について活発な議論がおこなわれた。
- ② 本研究会が主催して、国際フォーラム「地域文化の再発見——大学・博物館の視点から」を2017年10月21日から22日にかけて別府大学で開催。200名の参加者を得るとともに、各セッションのディスカッションにおいても積極的な意見交換がおこなわれた。
参考 URL: <http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20171021>
- ③ 研究メンバーの末森薫がエジプトのギザにおいて2017年11月8日から9日に開催した International Meeting “Saving Archaeological Heritage in Saqqara – Ten Years Achievements of Kansai University Mission”, において中心的な役割を果たし、今後のエジプトとの連携研究の体制を整えた。
- ④ 本研究会が共催して、公開シンポジウム『小学校を利用した民具収蔵施設を考える』（仮称）2018年2月3日に新潟県立歴史博物館で開催予定。地域に眠る地域文化財の活用の可能性についての議論が深まることが期待できる。
- ⑤ 本研究会が主催して、「郷土芸能復興支援メッセ in 釜石」を釜石市民文化ホールで2018年2月24日、25日に開催予定。地域文化の担い手となる市民との交流と地域文化の重要性について市民と議論を深めることが期待できる。

〈データベース〉

- ① 「津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース」を2017年11月6日に公開し、市民参加型のデータベースとしての運用を実施。
参考 URL: <http://sekihi.minpaku.ac.jp/>
- ② 「日本の文化展示場関連資料データベース（仮称）」を2018年3月に公開予定。日本の地域文化に関心のある市民や大学生、大学院生に使いやすいデータベースの構築を目指している。

(2) 教育プログラム等

教育キット「地域文化の宝箱」の制作設計の準備を実施。

(3) 展示等

- ① 研究代表者の日高真吾、研究メンバーの小谷竜介、加藤謙一、和高智美を中心に、2018年9月に開催の特別展「工芸継承」を国立民族学博物館、金沢美術工芸大学、静岡文化芸術大学で巡回開催するための準備を整える。
- ② 研究メンバーの加藤謙一が、金沢美術工芸大学美術工芸研究所ギャラリーにおいて、秋季特別展「平成の百工比照と工芸作品の精華」を2017年10月4日～11月11日に開催した。この展示の成果は、上記①の「工芸継承」に反映することとなっている。
- ③ 研究メンバーの加藤幸治が、石巻市復興まちづくり情報交流館・牡鹿館において、2017年7月7日～8月7日に第14回文化財レスキュー企画展「インディ・ジョーンズ、鮎川を往く」を開催。大学生主体の展示会として、教育効果の高さも注目される。
- ④ 研究メンバーの加藤幸治が、2017年8月9日～8月15日に石巻市復興まちづくり情報交流館・牡鹿館、および2017年8月19日～9月28日に東北学院大学博物館において、第15回文化財レスキュー企画展『描かれた神体島——日本画家・平山郁夫が描いた「金華山の朝陽」』を開催。大学生主体の展示会として、教育効果の高さも注目される。

- ⑤ 研究メンバーの加藤幸治は、2017年11月15日～2018年1月29日に石巻市復興まちづくり情報交流館・牡鹿館において、第16回文化財レスキュー企画展『おしかぐらし』を開催予定。大学生主体の展示会として、教育効果の高さも注目される。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- ① 国立民族学博物館 HP の日高真吾のページにおいて、当ユニットの HP を作成し、随時、研究活動の進捗について情報を更新し、研究のプロセスの情報発信に努めた。
- ② 2017年7月14日～16日に台湾歴史博物館において開催された国際シンポジウム『負の歴史遺産、歴史認識と博物館』を主催し、研究チームからは日高真吾が「生活文化の記憶を取り戻す——文化財レスキューの現場から」、加藤幸治が「復興キュレーション——復興期に展開する文化創造運動」と題して発表をおこなった。
- ③ 研究代表者の日高真吾は、2017年10月21日～22日に別府大学で開催した国際フォーラム「地域文化の再発見——大学・博物館の視点から」の要旨を日本語、台湾語で作成し、日台両国に配布。また、HP でも要旨を掲載し、情報の発信を実現した。
- ④ 2017年9月4日～8日にデンマークのコペンハーゲンで開催された第18回 ICOM-CC 大会において、園田直子を代表発表者とし、本研究プロジェクトからは日高真吾、末森薫が共同発表者となって、'Challenges and reflections for sustainable climate control at the National Museum of Ethnology, Japan' を発表した。地域文化財を安全に展示するために国立民族学博物館で開発してきた展示技術の内容について、大きな関心もたれ、活発な意見交換をおこなった。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- ① 国立民族学博物館 HP の日高真吾のページにおいて、当ユニットの HP を作成し、随時、研究活動の進捗について情報を更新し、研究のプロセスの情報発信に努めた。
- ② 2017年7月14日～16日に台湾歴史博物館において開催された国際シンポジウム『負の歴史遺産、歴史認識と博物館』を主催し、研究チームからは日高真吾が「生活文化の記憶を取り戻す——文化財レスキューの現場から」、加藤幸治が「復興キュレーション——復興期に展開する文化創造運動」と題して発表をおこなった。
- ③ 研究代表者の日高真吾は、2017年10月21日～22日に別府大学で開催した国際フォーラム「地域文化の再発見——大学・博物館の視点から」の要旨を日本語、台湾語で作成し、日台両国に配布。また、HP でも要旨を掲載し、情報の発信を実現した。
- ④ 2017年9月4日～8日にデンマークのコペンハーゲンで開催された第18回 ICOM-CC 大会において、園田直子を代表発表者とし、本研究プロジェクトからは日高真吾、末森薫が共同発表者となって、'Challenges and reflections for sustainable climate control at the National Museum of Ethnology, Japan' を発表した。地域文化財を安全に展示するために国立民族学博物館で開発してきた展示技術の内容について、大きな関心もたれ、活発な意見交換をおこなった。

若手研究者の人材育成の取組み

- ① 別府大学で開催した国際フォーラム「地域文化の再発見——大学・博物館の視点から」において、地域文化をテーマに研究をおこなっている別府大学、京都造形芸術大学の学生、東北学院大学の大学院生が発表するセッションを設け、研究活動を通じた地域と学生の関係性とその可能性について議論を深めた。
- ② 加藤幸治が中心となって開催した第14回から第16回の文化財レスキュー展では、東北学院大学の学生、大学院生が展示の企画から運営を担う役割を果たし、これからの担う若手研究者として、地域文化とのかかわり方について学ぶ機会となった。

その他

1. 本研究を大学間連携のもとにさらに深化させるため、学術交流協定を以下のように締結した。
 - ① 大妻女子大学と協定を締結し、国立民族学博物館所蔵の大阪府指定有形文化財「時代玩具コレクション」をもとにした特別展「子ども誕生」（仮称）を2019年3月に開催し、日本各地における子ども文化の研究を進める。
 - ② 京都造形芸術大学と協定を締結し、2020年に「地域文化の再発見——保存と活用の視点から」を通信教育の教科書としての刊行を目指す。
2. 産学連携として、国立民族学博物館において実施している「展示情報高度化事業」で実施する電子ガイドの次世代モデルについて、パナソニックと協定を結び、共同研究を展開する環境を整えた。この共同研究会において、

日本の地域文化遺産として展示している日本の文化展示場資料を研究対象として研究をおこなうこととし、その案内システムの情報について、本研究会のこれまでのシンポジウムや調査結果を活かしつつ、システムの構築を目指す体制を整えた。

3. 地域連携として、「郷土芸能復興支援メッセ in 釜石」を釜石在住の郷土芸能継承者を実行委員長に迎え、企画運営することで、本メッセがより地域住民主導の企画へと成長できる基盤を整えることができた。

●広領域連携型

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

みんなくユニット「文明社会における食の布置」

代表者：野林厚志

概要

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することである。

食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきた。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っている。

こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いである。

なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける『エコヘルス』の新展開」の一つのユニット研究として実施する。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究しようとする新たな研究の視座である。

調査研究活動

本年度は研究計画にしたいがい、ユニット内研究会（3回）、国際学会におけるパネルの企画と実施（計1件）、一般市民へ向けた学術講演会、映画会（計4件）、ユニット内研究参加者の調査支援（計6件）、若手研究者への調査支援（計3件）、若手研究者の国際学術雑誌の投稿支援（計1件）、文献情報データベースの試験運用ならびに内部利用を実施した。

国際学会におけるパネルは、野林と濱田が企画、申請し、国際人類学民族学協会（the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)）とカナダ人類学会の合同会議に応募、採択され、外国人研究者3名とともに実施した（パネルタイトル：Taste in motion: movement, placement, and localization of new food and beverages in the past and present）。パネルには、アメリカ合衆国の人類学会において食文化研究の指導的存在であり、Encyclopedia of Food and Cultureの編者であるSolomon H. Katz氏の参加を得ており、当該分野における本プロジェクトの展開の可能性を得た。

一般市民へむけた学術講演会、映画会は外部資金を導入し、連続講座「台湾の飲食文化」、みんなく映画会「祝宴！シェフ」を国立民族学博物館で開催し、研究成果を活かした一般社会への貢献をはかった。また、ユニットの主催ではないが、ユニット研究参加者が中心となり、国立民族学博物館と日本経済新聞社共同主催のみんなく公開講演会「料理と人間——食から成熟社会を問いなおす」を東京日経ホールで開催し、本ユニットの研究活動についても一般への発信を行った。

ユニット内研究参加者への調査支援は、トルコ、台湾、インドネシア、ラオス、タヒチを対象地域とし、生態資源の利用の変動、栄養学調査、食品加工の歴史的变化、食の地域化に関する内容を、若手研究者への調査支援は、健康観、移民の食生活とアイデンティティに関わる課題について、タイ、フィリピン、日本を調査地域として、修士課程2名、博士課程1名について実施した。海外調査においては、文献情報データベースは、ユニット内研究会で発表された研究報告に関連した文献情報の蓄積を中心に試験運用を実施し、実用化にむけての検討を行っている。

また、研究プロジェクト全体の推進のために、地球研で実施した3ユニット合同研究会（1件）、国内学会合（日本健康学会）同シンポジウム（1件）、一般向け公開講演会（人間文化研究機構主催）（1件）に参画した。

関連した査読、審査付き業績は、査読付き論文4件（国際4）、審査付き口頭発表4件（国際3、国内1）である。Human Ecology、Journal of Archaeological Science等、各分野での国際的な水準の高い学術雑誌に関連業績

が掲載されている。また、若手研究者による審査付き口頭発表を国際学会でも得ており、若手研究者の育成につながった研究活動が実現している。

(1) 研究成果について

ユニット研究参加者はそれぞれの専門領域における学術論文、学会発表、一般書等を通じた研究成果の公開を行なっている。また、国際学会でのパネルの企画や国際学会での研究成果の発表、ユニット間合同での国内学会におけるシンポジウムによる研究成果の公開も実施している。

(2) 研究水準について

本年度は、IUAESにおいて本ユニットの研究主題を活かしたパネルを実施したことで、国際的なレベルでの研究水準が示されたと考えている。また、人類学や関連分野における欧米の国際学会では、日本からのパネルの提案で食文化、食を主題にしたパネルは、あまり見られないことから、日本における人文社会科学における食文化研究の存在感を相応に示したと判断できる。

(3) 研究体制について

本ユニットは、19名の研究参加者によって調査、研究が進められている。中心となる国立民族学博物館に所属する研究者を除き、7名が国立大学、4名が私立大学に所属、若手研究者（39歳以下）もしくは学位取得後3年程度の研究者は3名であり、研究体制には所属機関ごと、年齢や職位等による偏りはない。広範な食の課題を、制度、身体、生態という3つのアプローチで取り組む体制は、研究の推進には適切であり、生態班が独自の研究会を開催するなどして自律性の保たれた研究活動が実現している。

(4) 教育について

修士課程の学生の調査、研究支援（2件）、博士課程の学生の調査（1件）を行うとともに、ユニット研究会での発表を実施し、大学を超えた研究領域の研究者による若手研究者の教育の機会を創出している。これらは、当該学生の学会発表等に非常に有効なものとなっている。なお、修士学生1名については、本ユニットの支援した調査にもとづいた論文により課程を修了した。

(5) 人材育成について

人材育成については、本ユニットでは、1)異なる分野の研究者が参加した学祭的な取り組みであること、2)研究会での発表を段階的に発展させ、国際学会等での発表につなげること、また連続性を作ること、3)食文化や食の問題に特化した学部や専攻の所属していない研究者に当該分野の研究力を涵養する機会を与えていること、に留意しながら、研究会の実施、学生、若手研究者を中心に国際的な発表への支援を実施している。

(6) 社会連携と(7)社会貢献について

本ユニットの研究成果の一般公開の一環として、みんなく映画会（1回・337名参加）、連続講座（3回・計170名参加）を実施している。この際に、本プロジェクトならびに本ユニットの研究内容についても、解説、講演の中に必ず組み込み、研究課題および成果の公開、普及を行なっている。

(8) 国際連携について

調査、研究支援を行なったそれぞれの研究者による、海外研究者、海外研究機関との連携がはかられており、成果公開や発信時における連携、協働がとれる体制をとっている。また、台湾文化部より受託事業の資金助成を受け、研究成果の公開（映画会、連続講座）を実施している。

(9) 国際発信について

本年度は、IUAESにおいて本ユニットの研究主題を活かしたパネルを実施したことで、国際的な研究成果の公開が実施されたと考えている。また、研究参加者も国際学会、国際誌等での研究成果の公開を実施しており、研究成果が積極的に海外にむけて発信されていると判断できる。

研究成果

【報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等】

国際学会パネルの企画と実施

Taste in motion: movement, placement, and localization of new food and beverages in the past and present. (IUAES 2017国際人類学民族学協会年次大会) を、ユニット代表者の野林と研究参加者の濱田で企画、応募し、採択されて実施した。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

本ユニットの研究成果の一般公開時（みんなく映画会、連続講座等）、関連した講演会（みんなく公開講演会）において、本プロジェクトならびに本ユニットの研究内容についても、解説、講演の中に必ず組み込み、研究課題お

よび成果の公開、普及を行なっている。

若手研究者の人材育成の取組み

修士課程の学生の調査支援（2件）、博士課程の学生の調査支援（1件）を行うとともに、ユニット研究会での発表を実施し、大学を超えた研究領域の研究者による若手研究者の教育の機会を創出している。なお、修士学生1名については、本ユニットの支援した調査にもとづいた論文により課程を修了した。

若手研究者の国際学術雑誌の投稿支援（計1件）、調査支援を行なった若手研究者の国際会議での口頭発表（審査付）が実現した。

所属を超えた研究者による助言、ユニット内研究会合から国内発表、国際発表への段階的な育成が本ユニットにおける通常の取り組みであり、これらは形式的な制度には特に依ってはいない。

●ネットワーク型：北東アジア地域研究

北東アジアにおける地域構造の変容——越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」

代表者：池谷和信

概要

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、民博館内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、および連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成され、北東アジアを対象に、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指している。

ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としている。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みである。

なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学北東アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進している。

調査研究活動

- ① 館内研究会：北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（以下、「月例会」）をこれまでに5回開催した。(1) 2017年5月17日には連携拠点である国立歴史民俗博物館と合同による「北東アジアのビーズ」を開催した（「②連携拠点との研究会」参照）。(2) 7月13日には本拠点構成員岸上伸啓が北東アジアと北アメリカとの交流史の復元をテーマとして「北太平洋沿岸における先住民社会と交易について——北太平洋地域の交流史の復元と同地域のグローバルヒストリーへの位置づけのための序論」を発表し、北東アジア地域と隣接地域との交流の可能性を再確認する契機となった。(3) 9月28日には池谷和信、岸上伸啓、辛嶋博善各構成員が国際学会（ICAS10）への参加報告を行い、今後の国際発信のあり方を議論するとともに若手研究者らに国際学会の状況を教える場にもなった。(4) 10月26日には富山大学人文学部・呉人恵教授が北東アジアの言語と人間の移動をテーマとして「新旧大陸の要的言語、コリヤーク語——その移動と相互影響の痕跡をたどる」を発表し、言語学的な視点から北東アジアの人的移動を考える場となった。(5) 12月7日には立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構富田敬大助教が当時の文書資料等を用いながら「社会主義モンゴルにおける牧畜システムの変容とその特徴——土地法令および土地利用の観点から」を発表し、社会主義というシステムが北東アジアの国々に移入され、どのように生産の現場に浸透したのかを議論する場となった。年度内には1、2、3月に予定している。本会は昨年度から継続して行われ、研究を積み重ねてきている。本年度は拠点構成員が発表、議論を行うとともに、他の研究機関（富山大学、立命館大学）から発表者を招聘して議論を行ったことで、個々の構成員が研究内容を共有するだけでなく、他機関の研究者と連携を深め、さらに順調に成果を蓄積して最終年度の成果公開への準備となるものである。
- ② 連携拠点との研究会：国立歴史民俗博物館と合同で研究会を開催した。2017年5月17日に「北東アジアのビーズ」と題し、月例会として国立民族学博物館で行った。拠点代表池谷和信が、ビーズの素材や分布、流通経路などについて、展示品を用いて報告を行い、高田貫太「5、6世紀における朝鮮半島と倭のアクセサリー——金・銀・金銅製資料を中心に」、齋藤玲子「アイヌのタマサイ（首飾り）研究の概観」の報告を行い、日本と朝鮮半

島と北海道を經由する大陸との複数のルートを題材として議論した。また、3月に国立歴史民俗博物館にて研究会を開催する予定である。これは研究成果、水準の向上に寄与するとともに、本拠点内で別機関に跨る連携を強化することに繋がっている。

- ③ 調査：拠点構成員各人が調査に赴き（モンゴル、中国、アメリカ、カナダ、カザフスタン、日本）、資料整理を行っている。また、国立歴史民俗博物館の構成員により、2016年12月にサンプリングを実施した韓国昌原市（財）ウリ文化財研究院収蔵の金海市退来里遺跡出土柱材資料について、本年度、酸素同位体比測定を実施し、実年代の決定に至った。この調査結果を報告書として執筆し、ウリ文化財研究院に提出した（報告書の刊行日は未定）。これらは今後の研究の質的、量的両面の礎になるものである。

研究成果

(1) シンポジウム等

- ① 国際学会でのパネル組織：2017年7月20～23日にタイ・チェンマイにおいて開催されたICAS10（The 10th International Convention of Asia Scholars）に池谷和信、岸上伸啓、辛嶋博善が参加した。タイ・ラジャマンガラ工科大学のサッカリン・ナ・ナン講師をディスカッサントに迎えてパネル“PRODUCTION AND DISTRIBUTION OF NATURAL RESOURCES IN NORTHEAST ASIA”を組織した。北東アジア地域の自然資源の多様性を軸として、日本の海産物を扱った“Changing Marine Resources in Japan: Abalone, Kelp, Sea urchin”（池谷）、モンゴルにおける肉の流通をテーマとした“Reduction of transaction costs: a case study of the market economy of Mongolian pastoralists”（辛嶋）、18世紀以降の北東アジアと北米の先住民交易を対象とした“Indigenous trading networks across the Bering Strait from the eighteenth to the twentieth centuries”（岸上）の3件の発表を行うとともに、東南アジアからの視点にも留意した議論を行い、世界レベルで研究成果を示した。
- ② 国際ワークショップ：国立歴史民俗博物館の構成員により、2017年8月20日に韓国・ウリ文化財研究院などとの共催で国際共同ワークショップ（“Korea-Japan dendrochronology workshop towards a new phase of archaeology”, August 20, 2017@Woori Research Institute for Cultural Properties）を行った。このワークショップの開催により、韓国の先史・古代史の若手研究者に、日本において著しく発展を遂げている「酸素同位体比年輪年代法」の成果を周知することができ、新たな若手研究者同士の国際的ネットワークが構築された。
- ③ 国際学会開催：2017年10月27～29日に、中国・中南林業科技大学、韓国・江原大学、富山大学経済学部とNIHUプロジェクト（国立民族学博物館拠点・富山大学拠点）がNortheast Asia Academic Network第15回年次大会を開催した。本大会は北東アジア地域を包摂する形で開催され、研究水準向上・体制・連携強化に繋がった。
- ④ 民族誌映像上映と討論：2018年2月11日に映画「鳥の道を越えて」を民族誌映像として上映し、今井友樹監督らを招聘して（公開）討論を行う予定である。これは北東アジアにおける渡り鳥を対象として渡り鳥と人間との関係について鳥類の専門家を交えて高い水準での議論を行うものであり、研究成果の普及に貢献するものと考えられる。
- ⑤ 国際セミナー：2018年2月末にモンゴル国において都市と牧畜に関するセミナーを行う予定である。本セミナーは地方都市を視野に入れた定住地と牧畜の関係に焦点を当てたもので、今後の発展が見込まれる研究であり、また国際連携に資するものである。
- ⑥ 国内シンポジウム：2018年3月上旬に「北からの焼畑、南からの焼畑（仮）」としてシンポジウムを行う予定である。日本の焼畑の研究においては南方からの伝播や南方との焼畑との共通性から行われてきたが、北方（北東アジア）からの視点での研究報告がない。本シンポジウムは日本の焼畑について北からの道を探ることを目的とする（サハリン、アムール川流域、あるいは朝鮮半島を対象とする）。北東アジアを軸としたオリジナリティーの高いシンポジウムとなる。

(2) 教育プログラム等

大学院生の研究会への参加：先述の月例会において、総合研究大学院大学地域文化学専攻・比較文化学専攻（博士後期課程）の大学院生、民博外来研究員も出席し、議論に積極的に参加しており、若手の人材育成につながっている。

(3) 展示等

- ① 特別展への協力：国立民族学博物館で2017年3月9日から6月6日まで開催された特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」において、北海道を越えるアイヌを介したビーズのつながりを提示するなど展示解説と

して研究成果の一部を提示した。

- ② 映画会の開催：2018年2月11日に今井友樹監督作品「鳥の道を越えて」を踏まえた討論とともに、映画会として一般向けに公開する。
 - ③ 企画展：国立歴史民俗博物館において2018年3月6日から5月6日まで構成員（松木武彦教授）が代表を務める企画展「世界の眼でみる古墳文化」を開催する予定である。
- ①～③は研究成果を社会へ還元し、社会貢献に資するものである。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

ウェブサイトの運用：昨年度に引き続き、「北東アジア地域研究みんぱく拠点」のオフィシャルウェブサイトを活用し、事業の概要、所属メンバーの紹介の他、ニュース、イベント、活動報告、研究成果、出版物の項目を設け、随時更新を行っている（<http://www.minpaku.ac.jp/nihu/cnaas/index.html>）。また、一部英語による対訳を付している。これにより研究プロセスを国内外に提示している。

若手研究者の人材育成の取組み

- ① 国立民族学博物館：推進センター研究員の辛嶋博善に先述の国際学会での発表の機会、およびモンゴル国での調査への機会を与えることにより、若手研究者の育成を図っている。また、国立民族学博物館中央・北アジア展示の部分改修に委員として協力するなど、博物館事業への理解の機会を与えている。
- ② 国立歴史民俗博物館（連携拠点）：特任助教の箱崎真隆に、先述の韓国と日本の国際共同ワークショップ（“Korea-Japan dendrochronology workshop towards a new phase of archaeology”）を企画・運営させ、本プロジェクトによって進めてきた韓国南部の出土遺物の年代測定結果を発表させた。
これらはともに若手研究者の育成に寄与するものであり、特に両博物館の特性を生かした部分も大きい。
- ③ 民博外来研究員の中田梓音が発表者（タイトル：The role of meal scene-focused on Korean TV drama）として韓国・ソウルで開催された国際会議（2017年11月3-5日 “7th Asian Food Study Conference, Korean Society of Food Culture Annual Meeting, “Toward Convergence of Culture and Technology in Asian Food”（第7回アジア食会議））へ参加することを支援した。

その他

- ① 現代中東地域研究国立民族学博物館拠点との共同研究会：2017年11月14日にフランス国立科学研究所（CNRS）ブノワ・グレヴァン博士（Dr. Benoît Grévin）を招聘し、“Between Linguistics and Magic: The ‘Power’ of Chinese Characters Linking Medieval Europe, Middle East and Northeast Asia”（言語学と魔術のはざままで、——中世ヨーロッパ・中東・北東アジアをつなぐ漢字の「力」）を共同研究会として開催した。モンゴル帝国の拡大などにより北東アジアと中東、さらにヨーロッパと接合させたテーマにおいて、北東アジア地域研究からの視点で議論を行った。また、2018年2月2日に第2回の共同研究会を開催する予定である。
- ② 国立歴史民俗博物館による協定等：2017年7月25日に連携拠点の構成員（藤尾慎一郎）が代表としてソウル大学校博物館、及び考古美術史学科（金壯錫・考古美術史学科教授・学科長）と学術研究交流に関する協定を締結し、また日本学術振興会による2018年度二国間交流事業（共同研究・セミナー）に申請（代表：藤尾）した。これにより国際シンポジウムやデータベースの作成、若手研究者の交流などを行うことを計画しており、国際連携の構築を進めている。

●ネットワーク型：現代中東地域研究

地球規模の変動下における中東の人間と文化——多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化」

代表者：西尾哲夫

概要

現代中東地域研究では、国立民族学博物館拠点を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めている。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会（共同体）のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究である。

本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知

識の資源化プロセスに着目して研究している。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っている。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となる。そこで (1)「個」から世界への視点による他者観と、(2)社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施している。

調査研究活動

- ① 個から世界への視点による他者観をめぐる研究班については、昨年度から継続して国立民族学博物館共同研究事業「個—世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」(代表・齋藤剛)と連携して研究会を重ね、次年度に国際研究集会でのパネル組織など成果発信に向けた取り組みを本格化させた。他方、社会的心性としての世界観をめぐる研究班は、拠点が設置されている国立民族学博物館と連携しながら研究・展示活動などを実施した。
- ② 早稲田大学とのエジプト映画の上映会開催や国際シンポジウムにおけるオックスフォード大学中東研究所の協力など国内外の他の外部資金で研究を実施する研究グループとも積極的にコンタクトをとり、共益的な協力体制の構築を継続的に行った。また機構本部の学術協定に基づき、協定機関から研究者を招聘し、本プロジェクトへの参加を促したほか、協定機関と共催で国際シンポジウムを開催するなど国際連携を強化した。
- ③ 北東アジア地域研究と共同で研究会を開催し、地域研究プロジェクト間の研究上の活動連携強化に着手した。

研究成果

- (1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等
 - ① 機構本部が協定を結んだ国際交流基金パリ日本文化会館と共同で2018年2月7、9-10日に国際シンポジウムをパリで開催する。同シンポジウムは、グローバルな知識の環流という観点から現代中東世界と日本との文化的関係について検討した昨年度の国際ワークショップを通じて浮かび上がった日本と中東の媒介者としての西洋の存在を射程に入れた昨年度の研究成果の発展である。また昨年度から実施しているレクチャー・シリーズで招聘した研究者も参加し、昨年度から構築してきた研究体制を発展させるという意義をもつ。さらに研究集会だけでなく、フランスの市民向け公開討論会も実施することで日本の研究活動のプレゼンスを国際的に示す意義がある。
 - ② 昨年度から国立民族学博物館の共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシアの沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」(代表・縄田浩志)と共同で行ってきた民博や国内大学所蔵の中東民族資料に関する調査を、国立民族学博物館フォーラム型「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」と連携し、データベースとして発展させるための準備を行った。フォーラム型データベースとして発展させることで、収集した民族資料のデータに対して日本の社会に成果還元が図られるだけでなく、英語に加え収集したソースコミュニティの言語も使用するため中東社会の人々に成果還元を図ることも可能になるという意義がある。
 - ③ 中東地域内外の博物館等における文化表象に関する動向調査ならびに関連データベース構築にむけて昨年度から整理したトルコ共和国のデータを汎用性の高いウェブベースで他の地域のデータ公開の際にもモジュールとして利用できるシステム設計をしながら公開する。
- (2) 教育プログラム等
 - ① 昨年度から準備してきたイスラーム世界の現代的多様性をテーマとした教材とそれを用いた実践的教育プログラムを次年度以降に運用を行えるようなレベルにまで開発を進め、2018年1月には実際に大学の講義内で最終的な使用実験を行う。また国立民族学博物館の業務と連動させ、教育パックと同じくイスラーム世界の現代的多様性について主に小学生を対象とした来館時の学習用ワークシートの作成・監修に協力した。
 - ② レクチャー・シリーズの講師を海外の若手研究者だけでなく、日本の研究者にも広げながら定着化させた。また他の拠点の分担と共通性の高い研究の場合には、共同で研究会を開催した。
- (3) 展示等
 - ① 2019年度開催予定の国立民族学博物館拠点と秋田大学拠点との共催による企画展示にむけ、展示品のデータ整理を国立民族学博物館のプロジェクト「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」(代表：西尾哲夫)と連携しながら行った。
 - ② コーヒー文化が中東を基点に広がった代表的民衆文化の一つであることと関連し、国立民族学博物館で開催した開館40周年記念新着資料展示「標交紀の咖啡の世界」の開催協力およびワークショップ等関連イベントを共

同で開催した。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- ① 昨年度の拠点の研究活動の総括を公表するとともに、コンテンツの英語表記の併用などを随時進め、国内外に研究プロセスの可視化を進めた。
- ② 昨今の我が国における中東地域に対する社会的な関心の高さを鑑み、一般市民への研究プロセスの可視化とプロジェクトへの社会的な理解を図るため、「アラブの春」後の中東社会に生きる若者たちをテーマとしたドキュメンタリー作品や国際的な評価の高い新進気鋭のエジプト人映画監督による最新作の上映会を実施した。拠点が設置されている国立民族学博物館の広報係とも協力し、一般公開イベントの広報の円滑化を進めた。ドキュメンタリー上映会には大学生を中心に120名を超える一般の参加者が、映画会には東京で約250名、大阪で約320名が参加し、盛況な会となった。
- ③ エジプト映画上映会では、国立民族学博物館の手話言語部門と協力することで、研究成果の社会発信に際するバリアフリー化につとめた。また東京で開催した上映会はNHK ラジオ（アラビア語放送）でも取り上げられ、活動についてアラビア語圏の中東地域の人々にも知られる機会が得られた。

若手研究者の人材育成の取組み

- ① 若手研究者の研究力強化と拠点の研究目標を相互補完する目的の共同研究「グローバル化時代における文化の資源化と共同性の再構築をめぐる中東的展開」（代表：谷憲一）を開始した。
- ② 若手研究者の積極的な国際成果発信を促すことを目的に、若手（40歳以下）に位置づけられる拠点構成員および拠点研究員に国際的なジャーナルへの論文投稿ならびに国際研究集会での研究報告などを促した。

その他

- ① 映画会を笹川平和財団と協力して開催するとともに、新聞等メディアと協力しながら開催告知を行うとともに、企業と連携した講演会を行うなど中東研究のステークホルダーとの協力・連携した研究体制の構築に向けて着手した。
- ② 昨年度申請を促した若手の研究分担者の競争的外部資金として科学研究費若手研究（B）「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」（代表・相島葉月）を獲得し、若手研究者の自立を促進した。
- ③ 研究分担者の嶺崎寛子（愛知教育大学教育学部・准教授）がイスラームの言説に対する現代エジプトのイスラーム女性による様々な場面の実践という本拠点の個一世界の研究班にも深く関係する内容『イスラーム復興とジェンダー——現代エジプト社会を生きる女性たち』昭和堂（2015年3月）が、第43回澁澤章を受賞した。
- ④ 春の叙勲で研究分担者の水野信男（兵庫教育大学名誉教授）が、教育研究功勞により瑞宝中綬章を受賞した。

●ネットワーク型：南アジア地域研究

グローバル化する南アジアの構造変動——持続的・包摂的・平和的發展のための総合的地域研究

中心拠点「南アジアの文化と社会」

代表者：三尾 稔

概要

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変わりつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではない。本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進している。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学（中心拠点）、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の6拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っている。

民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献する。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、国際研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っている。

調査研究活動

本拠点メンバーの中から計4名（予定を含む）の研究者をインド、タイ、インドネシア、マレーシア、フランス等に派遣し、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会の実態について、個別の事例を比較検討するために現地滞在調査を行った。

今年度から研究ユニット1「南アジア社会におけるレジリエンス」を「南アジアにおける社会変動と親密圏」「宗教」「布」、研究ユニット2「環流する南アジア」を「音楽・芸能」「移民・移動」という各班にわけ、具体的なテーマに絞った個別の研究会を計10回（予定を含む計90名が参加）と各班を統合した合同研究会と国際セミナーを1回実施し、昨年度からの課題である研究成果の公表について、本拠点独自の成果論文集の出版（2020年度刊行予定）に向けた問題意識の共有と議論をさらに深めた。

本プロジェクトの国際化を担う当拠点の活動として、国際的な（特にアジア圏）南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して、2016年度に発足させた「アジアにおける南アジア地域研究コンソーシアム」の第1回国際シンポジウムをタイ国立チュラロンコン大学と共催で開催し（タイ・バンコク、11/4-5）、本拠点メンバーの中から3名の研究者を派遣して研究発表を行った。また、シンポジウム後に開いたコンソーシアム運営会議において、研究成果の刊行や今後の共同的研究ネットワークの構築と発展に関して意見交換を行った。

南アジアのグローバルな重要性が高まるなかで、アジア諸国には南アジア（またはインド）研究センターが次々に設立されつつあるが、各研究センター間を横断した連携は皆無に等しい。本コンソーシアムは南アジア研究の厚い蓄積を有する日本が機軸となっており、アジアにおける南アジア研究の連携を図り、欧米によるコロニアル/ポストコロニアルな枠組みとは異なる関係を育んできたアジア諸国の歴史的経験に立脚した南アジアへの視点を新たに確立することで、南アジア研究の国際的な活性化を狙う特色がある。運営面では、第1期事業以来ネットワーク型地域研究の経験を積み重ねてきた本研究プロジェクトが主導し、とくに本プロジェクトの国際化を担う国立民族学博物館がハブとしての役割を果たし、シンポジウムの成果論文集の編集やメーリングリストを通じた情報共有、次回開催（2018年、韓国）に向けた協議などで中心的な役割を担うことによって、アジア圏を中心に本プロジェクトの存在を広く海外に発信することに貢献している。

くわえて、本プロジェクトが主催する第9回INDAS全体国際シンポジウム（ネパール・カトマンドゥ、2018年1/5-6 予定）の準備・運営面において、カウンターパートとの協議や国内外研究者の招へい手続き、フルペーパーの取りまとめなどを担当し、国際化を推進する役割を果たした。

さらに、国立民族学博物館に外国人客員教授（8～12月）として来日していたインド人研究者を本拠点主催の国際セミナーに招へいし、インドの国公立大学をめぐる展望と問題について知見を深め、情報を共有した。インドの社会運動史、女性史、教育史に造詣が深く、インド研究者の間に幅広いネットワークを持つ同研究者とは、今後も本プロジェクトの運営に関して協力関係を維持することで合意している。それは研究上の貢献や国際的ネットワークの確立はもとより、本プロジェクトが主催するINDAS全体国際シンポジウムや上記のコンソーシアムによるシンポジウム等の開催に際して、企画や招へい研究者等について助言を得るなど幅広い文脈で有益であり、今後の国際的な学術交流も期待できる。

研究成果

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

「報告書・成果論集」

2015年12月に国立民族学博物館で開催した第7回INDAS全体国際シンポジウムの英文での成果論集を国立民族学博物館から刊行する予定であり、その編集作業の最終段階にある。同館発行の出版物は海外の大学・研究機関へ広く配布されるものであり、研究成果の国際的な発信に大いに貢献できるものである。

前述した「アジアにおける南アジア地域研究コンソーシアム」第1回国際シンポジウムの成果論集について、World Scientific社（シンガポール）と協議を進め、刊行の承諾を得たことから編集作業に着手した。同社はアジア地域を中心に広いシェアをもつことから、研究成果のグローバルな発信が期待される。

「データベース」

国立民族学博物館で公開中の写真家沖守弘氏が撮影した約2万点のインドの祭礼・工芸・芸能等に関する写真データベースについて、英語での検索機能をつける等の改良を行い、国内外から広くアクセスできることで貴重な写真データベースの活用性が高まるよう務めた。

(2) 教育プログラム等

① 国立民族学博物館と大学間の連携促進にむけ、本拠点メンバーが関西圏の大学で担当する南アジア関連の授業において、同館が収蔵する文献・映像資料の活用方法や南アジア展示に関する解説を行い、学生にとって馴染

みのない南アジア地域に対する理解を促した。また、同館にて受講学生（日本人および外国人留学生）を対象とした博物館実習も実施し、南アジア社会の暮らしをモノから体験する機会を提供することで、南アジア地域をより身近に感じさせることに貢献した。

- ② みんなくミュージアムパートナーズ主催の社会人向け講座において、本拠点メンバーが南アジアの手織絨毯に関する講演を行い、南アジアの織技術について参加者の理解を図った。

(3) 展示等

- ① 国立民族学博物館の事業と連携し、一般来館者が南アジア地域に関する展示により親しみやすくなるよう、同館の南アジア展示場「躍動する南アジアの現在」の展示改修や新しい展示ガイドの製作に協力した。
- ② 同館の開館40周年記念特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」(3/9～6/6)や、石川県立歴史博物館で開催した「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」(7/22～9/3)において、展示資料を提供し、一般向けに南アジア文化の理解を図った。また、石川県立歴史博物館での上記関連事業において、本拠点メンバーがインドの伝統的な刺繍に関する体験型ワークショップの講師を務め、地域の人々の異文化体験に貢献した。
- ③ 同館にて来年度に予定されている南アジア弦楽器の起源と伝播に関する企画展示について、関連する研究会の開催を支援し、情報収集および新たな研究プロジェクトの草案に協力した。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

本拠点が運営するホームページの英文情報のさらなる充実につとめ、班別および合同研究会に関する情報や研究発表の英文要旨を掲載するなどして、研究情報の国内外への発信をより一層強化した。同ホームページを通じて、海外研究者からは研究活動や共同研究に関する問い合わせ、国内企業からは南アジアの文化動態に関する助言を求める依頼があったことから、ホームページを通じた情報発信が国際連携や社会連携のきっかけとなりうる一定の効果がみられた。

若手研究者の人材育成の取組み

本拠点メンバーや他大学のPD、助教、講師、准教授レベルの若手研究者に対して、本拠点が主催する班別および合同研究会での発表機会（予定を含む13名）を提供し、学際的な視点をふまえた研究能力の育成に務め、ワーキングペーパーや論文などの研究成果に結びつくよう働きかけた。また国際学会（タイ・7/21-23）や前述の国際シンポジウム（タイ・11/4-5、ネパール・2018年1/5-6 予定）での研究発表に伴う旅費を支援し、国際的な学術交流の機会を提供することに取り組んだ。

その他

2016年度に当拠点の拠点研究員を務め、2017年度は拠点共同研究員として研究プロジェクトに参画している中川加奈子氏（現・追手門学院大学社会学部・准教授）が、2017度（第6回）日本南アジア学会賞、ならびに2017年度公益信託澁澤民族学振興基金2017年度（第44回）澁澤賞を受賞した。両賞は地域研究ならび文化人類学の分野において名誉あるものであり、当拠点の活動に深く関わっていた中川氏の受賞は、若手研究者の育成における大きな成果といえる。

2-5 研究成果の公開

刊行物

● 国立民族学博物館研究報告

42巻1号（2017年9月29日発行）

・ 論文

情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用 —— 寺村裕史
物質文化を「翻訳」する——国立民族学博物館における展示解説の多言語化実践現場から —— 山中由里子

・ 研究ノート

オーストラリアの反捕鯨思想と人々の考える「理想的なオーストラリア」 —— 前川真裕子

42巻 2号 (2017年12月28日発行)

• 論文

なぜ宇治川の鶴飼においてウミウは産卵したのか——ウミウの捕獲作業および飼育方法をめぐる地域間比較研究
 卯田宗平
 ロマンティストであり、リベラリストである——「柳田国男」の自己創造
 竹沢尚一郎

42巻 3号 (2018年2月28日発行)

• 論文

北インドにおける婚資婚再考——ラージャスターン州西部に暮らすジョーギーの姻戚関係を事例に
 中野歩美

• 資料

最近の狩猟採集民研究の動向——第11回国際狩猟採集社会会議 (CHAGS11) に出席して
 池谷和信・岸上伸啓・佐々木史郎・戸田美佳子

● Senri Ethnological Studies

No.95 (2017年11月21日発行)

Kazunobu Ikeya (ed.) *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa National Museum of Ethnology Japan*

No.96 (2017年12月15日発行)

Minoru Mio, Koichi Fujita, Kazuo Tomozawa, and Toshie Awaya (eds.) *Structural Transformation in Globalizing South Asia: Comprehensive Area Studies for Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development*

No.97 (2018年3月12日発行)

韓敏・色音編 人類学視野下的历史、文化与博物馆——当代日本和中国的理论实践

No.98 (2018年3月16日発行)

Ritsuko Kikusawa and Lawrence A. Reid (eds.) *Let's Talk about Trees: Genetic Relationships of Languages and Their Phylogenetic Representation*

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.142 (2017年11月15日発行)

塚田誠之・河合洋尚編『中国における歴史の資源化の現状と課題』

No.143 (2017年12月1日発行)

浜田明範・戸田美佳子編 *How Do Biomedicines Shape People's Lives, Socialities and Landscapes?*

No.144 (2018年2月20日発行)

河合洋尚・刘征宇編『社会主义制度下的中国饮食文化与日常生活』

No.145 (2018年3月12日発行)

山本紀夫著『展覧会の研究 「ラテンアメリカの音楽と楽器」展アンケート調査を中心として』

No.146 (2018年3月16日発行)

Sabino Sauchomal, Tomoya Akimichi, Shuzo Ishimori, Ken'ichi Sudo, Hiroshi Sugita, and Ritsuko Kikusawa (comps.) Lawrence A. Reid (ed.) *Satawalese Cultural Dictionary*

● 民博通信

No.157 (2017年6月25日発行)

評論・展望 社会的なものをいかに描くか——ケアが発動する場所への関心 森 明子

No.158 (2017年9月29日発行)

評論・展望 文明の転換点における人類学と博物館——民博の開館40周年にあたって考える 吉田憲司

No.159 (2017年12月25日発行)

評論・展望 アフリカにおける障害者の生活世界——その地域性と歴史性 戸田美佳子

No.160 (2018年3月30日発行)

評論・展望 日本における地域文化研究への新たなアプローチ 日高真吾

●研究年報2016 (2018年3月30日発行)

●外部出版

飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』ミネルヴァ書房 (2017年6月8日刊行)

福岡正太・福岡まどか編『東南アジアのポピュラーカルチャー：アイデンティティ・国家・グローバル化』スタイルノート (2018年3月26日刊行)

小野林太郎・長津一史・印東道子編『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』昭和堂 (2018年3月30日刊行)

●共同研究の成果

小野林太郎・長津一史・印東道子編『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』昭和堂、2018年。

*共同研究「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較」(2012～2015年度)

福岡正太・福岡まどか編『東南アジアのポピュラーカルチャー：アイデンティティ・国家・グローバル化』スタイルノート、2018年。

*共同研究「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」(2013～2016)

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんなくりポジトリ」は、2010年1月12日に一般公開され、8年が経過した。2017年度は、館内出版物『国立民族学博物館研究報告』、『Senri Ethnological Studies』、『国立民族学博物館調査報告 (Senri Ethnological Reports)』に加え、『民博通信』の登録を開始した。また、館外出版物について、登録対象物・対象者・登録までの流れを整備した。

2017年度新たに登録したコンテンツは121件で、2017年度末のコンテンツ登録数は4,579件となった。コンテンツのダウンロード数は、年間566,456件に達している。

また、同一論文のタイトル等を日英両言語で表記するクラウド型のグローバル・リポジトリ事業に着手し、「タイトル」、「著者名」、「キーワードまたは抄録」に英語表記を追加する作業を300件行った。

さらに、館内出版物の論文にDOI (デジタルオブジェクト識別子) を付与し、永続的アクセスに必要な情報を提供できるようにし、アクセシビリティを向上させた。

学術講演会

●みんなく公開講演会

「料理と人間——食から成熟社会を問いなおす」

実施日 2017年11月17日(金)

場 所 日経ホール (東京)

共 催 日本経済新聞社

参加者 407名

概要説明 「文明と文化のはざまの料理」

講 師 野林厚志 (国立民族学博物館教授)

内容 増加していく世界の人口を支えるための食料生産の仕組みと、そうした食環境のもとで行われる食事のありかたは、文明と文化がつながる将来的課題である。生態資源の利用、共食や分配等の社会的機能、味や食感を伝える調理の技術等、食に関わる様々な要素を考えながら、文明と文化の境界面としての料理を考える。

講演1 「ポスト食遷移と新たなフードシステムの可能性」

講師 中嶋康博（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

内容 第二次大戦後、人類は、人口の激増、急速な経済成長、都市化による人口偏在を背景に、「食遷移」と流通システムの大変革を経験することになった。しかし世紀末を境に、世界のあちこちで人口、経済、都市化をめぐる事情が大きく変容し始めていて、社会は新たな食のあり方を模索しつつある。環境・倫理問題も踏まえながら、これからの食をポスト食遷移と新たなフードシステムの視点から展望したい。

講演2 「イタリア料理からみるグローバル、ナショナル、ローカル」

講師 宇田川妙子（国立民族学博物館准教授）

内容 料理は文化的なものだが、国や市場などの思惑も関与し、意味や形を変化させてきた。世界的に知られるイタリア料理もその一つであり、現在はスローフードや地中海料理などの言葉とともに注目されている。では、イタリア人自身は実際に料理とどう向き合い、それを通して自らの社会文化とどう関わってきたのか。食と社会文化の密接な関係と、その意義について考える。

パネルディスカッション

中嶋康博×宇田川妙子×野林厚志

「'70年万博からみんぱくへ」

実施日 2018年3月23日（金）

場所 オーバルホール（大阪）

共催 毎日新聞社

参加者 349名

講演 「『太陽の塔』とみんぱく」

講師 吉田憲司（国立民族学博物館長）

内容 日本が高度経済成長のなかにあった1970年、大阪で日本万国博覧会が開催されました。岡本太郎の指揮のもと、万博のシンボルとなる太陽の塔のなかには、人類の原点を示すというねらいから、世界各地から集められた生活用具や仮面や神像が展示されました。みんぱくは、その万博の跡地に、万博での展示物を収蔵品のひとつの核として、1977年に開館しました。ここでは、現在の文化人類学・民族学とみんぱくが、万博の遺産をどのように継承し、それを今、どのように展開させているのかをお話します。

パネルディスカッション

石毛直道（国立民族学博物館 元館長）×ヤノベケンジ（現代美術家）×吉田憲司（国立民族学博物館 館長）

2-6 学会開催

学会開催

2017年9月9日～10日 日本カナダ学会 第42回年次研究大会

開催場所：国立民族学博物館。

2-7 研究員制度

外来研究員

AL MSHAILH Ibrahim Mohammad Ibrahim (アル マシヤラ イブラヒム モハマド イブラヒム) ヨルダン ペトラ開発観光局 (PDTRA) 文化資源局キュレーター

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

ALI, Gehad Shawky Ibrahim (アリ ゲハド ショーキイ イブラハム) エジプト エジプト考古庁エジプト考古学博物館キュレーター

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

ERTL, John (アートル ジョン) 米国 金沢大学外国語教育研究センター/国際文化資源学研究センター准教授

研究課題：考古学の民族誌：考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究

FIGARO, Natasha Fiona (フィガロ ナターシャ フィオナ) セーシェル 青少年スポーツ文化省文化部 (国立自然史博物館) 上級博物館アシスタント

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

GAO, Qian 高 茜 (カオ チエン) 中国 神戸東洋医療学院孔子課堂講師

研究課題：中国南西部の少数民族地域における芸術・文化の変容に関する研究

HAKOBYAN, Aleta (ハコビヤン アレタ) アルメニア アルメニア国立 Komitas 博物館 展示教育部部長アシスタント

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

IVGIN, Ilkay (イヴギン イルカイ) トルコ 文化観光省文化遺産・博物館局アンカラ地域修復保全ラボ修復官

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

KIM, Satbyul 金 セツピョル (キム セツピョル) 韓国 蕪田学園女子大学非常勤講師

研究課題：韓国における国家主導型の自然葬の形成に関する人類学的研究

KIM, Wolduk 金 月徳 (キム ウオールドク) 韓国 芦屋大学国際交流センター客員研究員

研究課題：民俗文化の解釈と変容についての談論の検討

KUNIK, Damien Benoit (クニク、デミアン ベヌア) スイス ジュネーブ大学文学部東洋学科専任助教

研究課題：日本とフランス文化圏における物質文化研究の比較史：過去・現在・未来

MARZEC, AGNIESZKA (マジェッツ アグネシカ) ポーランド

研究課題：異文化接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー～在日外国人を中心に～

MUBIANA, Precious (ムビアナ プレシャス) ザンビア 国立ルサカ博物館教育部副教育担当

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

PURSEY, Lance (パーシー ランス) 英国 バーミンガム大学 博士後期課程

研究課題：北東アジア前近代史における都市的なものの解明

SAUCEDO SEGAMI, Daniel Dante (サウセド セガミ ダニエル ダンテ) ペルー 立命館大学言語教育センター外国語嘱託講師

研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する研究

SHALWINDI, Choolwe (シャルウィンディ チョールウェ) ザンビア リビングストーン博物館自然史部門植物学担当

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

TUMAMA, Matauaina Christina Lakena (ツママ マタウアイナ クリステイナ ラケナ) サモア 教育・スポーツ・文化省文化部 (サモア国立博物館) 博物館担当

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

WAUNDU, Tiko (ワウドゥ ティコ) パプアニューギニア 国立博物・美術館人類学部主任キュレーター

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

WULEP, Kaitipsal (ウレップ カイティプサル) バヌアツ 法務・社会事業省国立博物館上級キュレーター

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

Yimin 伊敏 (イミン) 中国

研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化——内モンゴル地域におけるモンゴル語と満洲語の地名を中心に

ZHANG, Ying 張 穎 (チョウ エイ) 中国 四川美術学院・中国藝術遺産研究中心准教授副主任

研究課題：文化財の保護、展示と研究——日本を例として

ZHAO, Furong 趙 芙蓉 (チョウ フヨウ) 中国

研究課題：中央・北アジア展示の部分改修——北アジア地域の自然環境への適応と民族の多様性を示す「帽子と靴」を中心に

ZONG, Xiaolian 宗 曉蓮 (ソウ ギョウレン) 中国

研究課題：中国雲南省麗江市における「世界遺産テーマパーク」開園以降の文化の資源化をめぐる研究

荒田 恵 (あらた めぐみ) 日本 関西大学政策創造学部非常勤講師

研究課題：アンデス形成期の祭祀遺跡における工芸品製作

安念 真衣子 (あんねん まいこ) 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：ネパールにおける教育の市場化と生活世界の変容——貧困層の親族・移動・暴力に着目して

飯田 淳子 (いいだ じゅんこ) 日本 川崎医療福祉大学医療福祉学部准教授

研究課題：医療者向け医療人類学教育の検討：保健医療福祉専門職との協働

池谷 航介 (いけたに こうすけ) 日本 東京大学先端科学技術研究センター学術支援専門職員

研究課題：高等教育機関における意思疎通支援人材育成システムの開発

市野澤 潤平 (いちのざわ じゅんぺい) 日本 宮城学院女子大学学芸学部准教授

研究課題：確率的事象と不確実性の人類学：「リスク社会」化に抗する世界像の描出

伊藤 渚 (いとう なぎさ) 日本

研究課題：ラオス北部サムヌア・サムタイ地方の女性による織りとその変容

伊東 未来 (いとう みく) 日本 大阪大学人間科学部非常勤講師 / 関西大学社会学部非常勤講師 / 龍谷大学社会学部非常勤講師 / 摂南大学外国語学部非常勤講師

研究課題：西アフリカにおける交易都市の歴史人類学的研究

井家 晴子（いのいえ はるこ）日本 アムステルダム大学客員研究員
研究課題：妊娠・出産の異常とその対処法に関する文化間比較研究

井上 航（いのうえ こう）日本
研究課題：カンボジア山地民における音と身体のかかわり

今井 彬暁（いまい あきとし）日本
研究課題：ベトナムのモン社会における死者のエージェンシーの研究

上畑 史（うえはた ふみ）日本
研究課題：セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究

浮ヶ谷 幸代（うきがや さちよ）日本 相模女子大学人間社会学部教授
研究課題：現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究

宇田川 彩（うだがわ あや）日本
研究課題：アルゼンチンとイスラエルを中心としたユダヤ人類学の展開

内田 修一（うちだ しゅういち）日本
研究課題：都市的環境におけるソンガイの精霊憑依の実践に関する研究

蛭原 一平（えびはら いっぺい）日本
研究課題：ポスト過疎時代における資源管理型狩猟に関する民俗知形成のモデル構築

大石 高典（おおいし たかのり）日本 東京外国語大学世界言語社会教育センター特任講師
研究課題：消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究

太田 美沙代（おおた みさよ）日本 関西学院大学非常勤講師
研究課題：近代台湾の鰹・鯖漁業と水産加工業

太田 好信（おおた よしのぶ）日本 九州大学大学院比較社会文化研究院教授
研究課題：政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する

大場 千景（おおば ちかげ）日本 日本学術振興会特別研究員PD（大阪府立大学）
研究課題：南北エチオピア、ライヤにおける社会変動と歴史認識の動態

岡田 朋子（おかだ ともこ）日本
研究課題：インドにおける名づけと名乗りに関する人類学的研究

岡田 浩樹（おかだ ひろき）日本 神戸大学大学院国際文化学研究所准教授
研究課題：宇宙開発に関する文化人類学からの接近

岡本 尚子（おかもと なおこ）日本 洗足学園音楽大学音楽学部非常勤講師 / 実践女子大学非常勤講師
研究課題：「J.-C. マルドリュス遺贈コレクション」中の『詞華集』研究（～4月30日）
『千一夜物語』仏語訳者マルドリュス再考——〈遺贈コレクション〉の分析を中心に（5月1日～）

奥村 京子（おくむら きょうこ）日本
研究課題：現代作曲家ジェルジ・リゲティの音楽プロジェクトノート分析

金田 純平（かねだ じゅんぺい）日本 神戸大学大学院国際文化学研究所非常勤講師

研究課題：笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較

金谷 美和（かねたに みわ）日本 京都大学地球環境学三才学林研究員／大阪芸術大学芸術学部非常勤講師

研究課題：インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

川田 牧人（かわだ まきと）日本 成城大学文芸学部教授

研究課題：呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して——

神田 每実（かんだ つねみ）日本 愛知県立芸術大学美術学部教授

研究課題：造形美術様式と風土の関係

工藤 由美（くどう ゆみ）日本 東邦大学看護学部看護学科非常勤講師／東海大学文学部アメリカ文明学科非常勤講師

研究課題：チリの先住民マプーチェによる文化復興運動に関する人類学的研究

児玉 徹（こだま とおる）日本 駐日スウェーデン大使館科学イノベーション部アナリスト／一般財団法人国際貿易投資研究所客員研究員

研究課題：産官学民連携のもとでの文化ツーリズム推進策の人類学的な分析——ワインツーリズム推進政策の国際比較を中心に——

呉屋 淳子（ごや じゅんこ）日本 山形大学教育開発連携支援センター講師

研究課題：高等教育機関における伝統芸能の教授に関する研究

是澤 博昭（これさわ ひろあき）日本 大妻女子大学家政学部准教授

研究課題：モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に——

齋藤 剛（さいとう つよし）日本 神戸大学国際文化学研究所准教授

研究課題：個-世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム

末森 薫（すえもり かおる）日本 関西大学国際文化財・文化研究センターポスト・ドクトラル・フェロー

研究課題：博物館における資料保存・管理に関する実証的研究

杉本 敦（すぎもと あつし）日本 東北学院大学文学部・法学部非常勤講師／盛岡大学文学部非常勤講師

研究課題：EU農政下におけるルーマニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究（～4月30日）
農の「EU化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究（5月1日～）

鈴木 博之（すずき ひろゆき）日本 オスロ大学人文学部ポスドク研究員

研究課題：チベット文化圏における諸言語の言語地図作成と地理言語学的研究（～4月30日）
チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究（5月1日～）

高木 仁（たかぎ ひとし）日本

研究課題：人類のウミガメ利用に関する環境人類学研究——西カリブ、ミスキート・インディアン の事例

高橋 晴子（たかはし はるこ）日本 大阪大学COデザイン・センター招へい教授

研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブ

竹内 明美（たけうち あけみ）日本 アイヌ工芸家

研究課題：ゴザ編みについての技術研究

- 田中 鉄也（たなか てつや）日本
研究課題：国家とのかかわりの中で変容する宗教：インド商業集団による宗教的・慈善的な公益活動
- 田沼 幸子（たぬま さちこ）日本 首都大学東京大学院人文科学研究科准教授
研究課題：ネオリベラリズムの中のモラリティ
- 玉山 ともよ（たまやま ともよ）日本 南山大学人類学研究所非常勤研究員
研究課題：北米先住民聖地での地下資源開発をめぐる国際的な「協働」のありかたについての研究
- 辻本 香子（つじもと きょうこ）日本
研究課題：東アジア地域におけるリズム楽器を使用したパフォーマンスの研究
- 東城 義則（とうじょう よしのり）日本
研究課題：現代日本社会における狩猟活動の組織化をめぐる人類学的研究
- 常田 夕美子（ときた ゆみこ）日本 大阪大学大学院人間科学研究科招へい研究員
研究課題：現代インドの村落・都市中間地帯における親密圏の再編——移動社会を支えるケア関係
- 中川 敏（なかがわ さとし）日本 大阪大学大学院人間科学研究科教授
研究課題：文化人類学を自然化する
- 中田 梓音（なかた しおん）日本
研究課題：対人関係の構築過程における言語コミュニケーション研究
- 中野 歩美（なかの あゆみ）日本
研究課題：インド・タール砂漠地域における定住後の移動民に関する人類学的研究
- 中原 聖乃（なかはら さとえ）日本 中京大学社会科学研究所准教授
研究課題：放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究
- 中道 静香（なかみち しずか）日本 大阪大学非常勤講師／天理大学非常勤講師
研究課題：「アラビアンナイト」写本および刊本の文献学的研究
- 中村 真里絵（なかむら まりえ）日本 岡山理科大学非常勤講師／四條畷学園短期大学非常勤講師
研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会：住民の生活史の視点から
- 中村 亮（なかむら りょう）日本 福井県里山里海湖研究所研究員
研究課題：漁民とジュゴンの海域利用特性の解明による共存型海洋保護区モデルの創出
- 西 佳代（にし かよ）日本
研究課題：1950年代アメリカ海軍のグアム島における風下被ばく調査に関する研究
- 野澤 豊一（のざわ とよいち）日本 富山大学人文学部准教授
研究課題：音楽する身体間の相互作用を捉える：ミュージッキングの学際的研究
- 登 久希子（のほり くきこ）日本
研究課題：社会をつくる芸術：「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究
- 野呂(左地) 亮子（のろ(さち) りょうこ）日本 四天王寺大学人文社会学部非常勤講師
研究課題：フランスにおけるジプシーのノマディズムと共同体に関する研究

萩原 英子（はぎはら えいこ）日本

研究課題：喫茶文化にみられる和様化と日常性の研究

萩原 卓也（はぎわら たくや）日本

研究課題：身体を基盤とした他者理解をめぐる、ケニアにおけるスポーツ実践の生態学的探究

長谷川 清（はせがわ きよし）日本 文教大学文学部教授

研究課題：資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から

早川 真悠（はやかわ まゆ）日本 摂南大学外国語学部非常勤講師

研究課題：会計学と人類学の融合——ジンバブエのハイパー・インフレ状況下における都市民の経済実践の事例から

平田 晶子（ひらた あきこ）日本 日本学術振興会特別研究員（京都文教大学総合社会学部）

研究課題：身体技法をめぐる科学技術の利用に関する学際的研究

藤井 真一（ふじい しんいち）日本 天理大学国際学部非常勤講師

研究課題：贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究——ソロモン諸島の事例から

松田 有紀子（まつだ ゆきこ）日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：花街の担い手コミュニティの日常実践に関する歴史人類学的研究

松平 勇二（まつひら ゆうじ）日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究

村尾 静二（むらお せいじ）日本 総合研究大学院大学学融合推進センター客員研究員

研究課題：デジタル時代に求められる映像人類学——新たな映像民族誌の創造に向けて

盛 恵子（もり けいこ）日本

研究課題：ティジャーニー教団の分派ニアセンにおける女性の宗教指導者たち

安野 早己（やすの はやみ）日本 山口県立大学国際文化学部教授 / 同大学院国際文化学研究科併任教授

研究課題：カス・アーリヤを名乗る高カースト：ネパールにおける政治の民族化

矢野原 佑史（やのはら ゆうし）日本 京都大学アフリカ地域研究資料センター科研費研究員

研究課題：知識 / 経験 / 想像の共有のための映像人類学

山本 文子（やまもと あやこ）日本 和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師

研究課題：現代ミャンマーの都市部の精霊信仰に関する文化人類学的研究

吉根 とみ子（よしね とみこ）日本 アイヌ刺繍家

研究課題：古いアイヌの木綿衣およびマエタレ（前掛け）の縫い方と文様について

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることがで

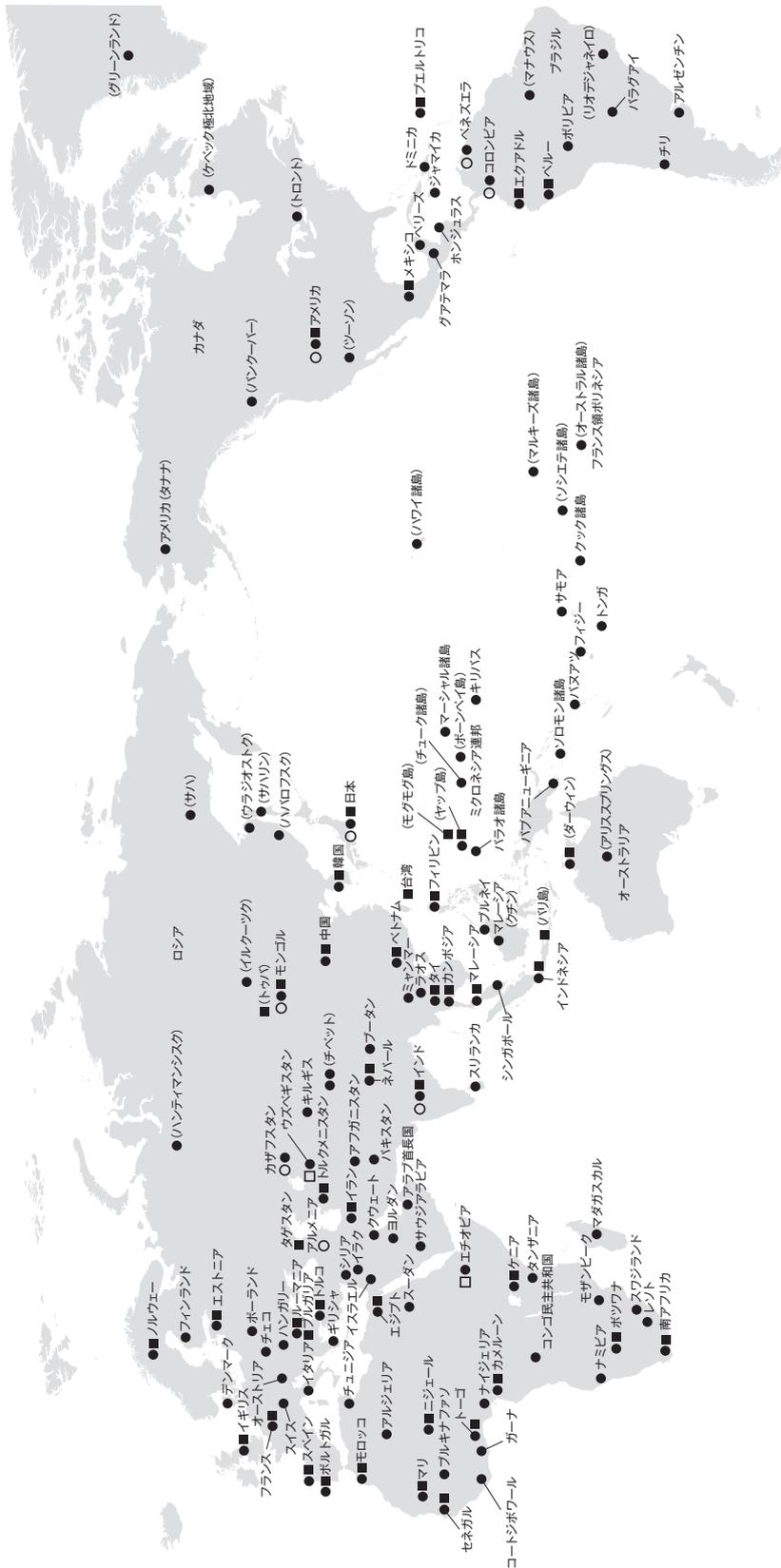
きる。

2017年度は、国立大学2人、私立大学2人、計4人の大学院生を受け入れた。

2-8 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料および映像取材地域



- 2017年度までの標本資料調査・収集地域
- 2018年度の標本資料調査・収集計画地域
- 2017年度までの映像取材地域
- 2018年度の映像取材計画地域

研究および
共同利用

●標本資料の収集・利用状況

• 2018年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料／178,979点 (未登録資料含む) 国内資料／164,749点 (未登録資料含む) 総点数／343,738点 (未登録資料含む)

• 大学・博物館等への貸し出し

貸し出し件数／10件 総点数／631点

●映像音響資料の収集・利用状況

• 取材

三島禎子 セネガルにおけるソニンケ民族祭の映像取材
セネガル 2017年11月21日～12月5日

山中由里子 「怪異の音」の映像音響資料収集
鹿児島県南さつま市 2017年8月21日～22日
岡山県岡山市 2017年12月12日～13日
奈良県奈良市 2017年12月16日～17日
長野県下伊那郡 2018年1月13日～16日

• 制作

寺田吉孝 在日コリアン音楽に関する民族誌映画の制作
南真木人 ネパールのバイラヴ仮面舞踊に関する映像資料制作

• 2018年3月現在の収蔵資料数

映像資料／8,199点 音響資料／62,651点 総点数／70,850点

• 資料の利用

利用総件数／125件 (内、大学22件) 資料利用総点数 902点 (内、大学304点)

館内利用など

利用件数／89件 資料利用点数／617点

特別利用 (館外での上映・試聴など)

利用件数／36件 資料利用点数／285点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2017年度図書室の活動

1. 利用者サービス

利用者支援の一環として、図書室案内・見学対応等を行った。

- 1) 外来研究員オリエンテーション
- 2) 総研大新入生ガイダンス
- 3) 民博新任職員研修
- 4) JICA 委託事業「博物館とコミュニティ開発コース」
- 5) 若手研究者奨励セミナー 等

2. 資料整備関連

- 1) 遡及入力事業として、国立情報学研究所 NACSIS-CAT (全国規模の総合目録データベース) への登録作業を推進している。2017年度は冊子体については雑誌168タイトルの入力を行い、図書に続き雑誌の遡及入力もほぼ完了した。マイクロ資料については、原資料が北米の大学の博士論文4,859件、図書20件、新聞雑誌106タイトルの遡及入力を実施した。
- 2) 書庫4層の一部および閉架書庫等の資料164,279冊の蔵書点検を行った。
- 3) 購入雑誌については、購読形態が電子ジャーナルと冊子のセットであるもの21タイトルを電子ジャーナルのみにすることで、購読タイトル数を維持しながら経費削減をはかった。

3. 施設整備

- 1) 書庫1～3層の照明をLEDに交換した。
- 2) 書庫1層で資料にカビが発生したことをうけて、書庫内の温湿度対策として空気清浄機および除湿機を設置。また、マイクロフィルムキャビネットの劣化したゴムパッキンの交換等、書庫内環境を整備した。

4. 広報、社会貢献その他

- 1) 「みんなく図書室ニュース」を月に一度発行した。
- 2) 国立国会図書館2017年度3級研修外部機関実習生2名を受け入れ、組織内での連携や資料のデジタル化等について情報交換を行った。
- 3) 中学生の職場体験学習を受け入れた。
茨木市立西中学校 2名(2017年11月1日)
箕面市立第一中学校 2名(2017年11月15日)

●2017年度新規受入数

日本語図書	2,259点	外国語図書	2,108点		
AV資料他	46点	製本雑誌	714点	合計	5,127点

●2018年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書	266,444点	外国語図書	411,083点	合計	675,527点
日本語雑誌	10,129種	外国語雑誌	6,970種	合計	17,099種

●利用状況(2017年度)

入室者	全体	9,867人	文献複写	受付	国内(うち謝絶)	1,442(192)件
	館外者	1,684人			依頼	国内
時間外入室者	166人		現物貸借	受付	国内	660(38)件
うち日曜、祝日	57人				依頼	国内
貸出	図書	12,357冊	事項調査	受付	国内	42件
	雑誌	511冊			国外	1(0)件
うち館外貸出図書	2,790冊					
HRAF利用受付	5件 (カウンター受付件数)					

民族学資料共同利用窓口

2006年度に、本館が所蔵する民族学資料の利用に関する問合せ窓口として「民族学資料共同利用窓口」を設置した。本館の民族学資料が、館内外における各分野の研究・教育において有効利用され、社会に還元されることを目的に、問合せ窓口を一本化したものである。

2017年度の問合せ件数は、282件であった。

問い合わせ者別	(件)
教員(大学)	24
大学院生	5
大学生	8
教員(小・中・高)	4
学生(小・中・高)	3
博物館・美術館関係	27
図書館	8
教育・研究機関	11
マスコミ関係	6
会社・団体	48
一般	48
民博教職員	90
計	282

問い合わせ者の所属機関別	(件)	
公的機関	大学・大学図書館	41
	博物館・美術館	42
	小・中・高	6
	その他教育機関	1
	研究機関	7
	公共図書館	4
	地方公共団体	12
	各種団体	3
	民間	研究機関
会社		32
団体		13
個人	館外	47
	館内	73
	不明	0
計	282	

資料の利用目的

(件)

調査・研究	研究* ¹	87	業務用	展示用	33
	論文作成	7		番組制作	12
	学習* ²	3		出版物作製	20
	図書館から	2		参考資料	6
	授業で利用	32		入手方法	1
	その他	23		その他	3
	小計	154		小計	75
館内利用	刊行物作成	3	その他	寄贈申出	8
	館の事業	24		その他	1
	参考資料	4		小計	9
	資料の複製	13	合 計		282
	小計	44			

* 1 大学生以上の調査を「研究」とする

* 2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズHome Pageを立ち上げ、これまで青木文教、泉靖一、岩本公夫、梅棹忠夫、大内青琥、桂米之助、鹿野忠雄、菊沢季生、杉浦健一、土方久功、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブの資料目録の作成等を行い、その成果を順次公開している。

2017年度から、アーカイブズ部会において研究アーカイブズ資料に加え、映像音響資料の寄贈受入についても協議することとなった。資料の受入の流れを確定し、「ミクロネシア・サタウル島写真コレクション」、「滋賀県朽木村針畑における生活に関するアーカイブ資料」を受け入れた。また、引き続き未公開の資料について目録公開に向けた整理作業を行った。

目録を公開し、利用に供しているアーカイブは13件である。2017年度の利用状況は閲覧・視聴が22件、特別利用が10件、事業利用が14件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

●標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2016年度までの作成件数	283,275
2017年度の作成件数	1,847
2017年度のアクセス件数	78,273

●標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2016年度までの作成件数	68,019
2017年度の作成件数	1,694
2017年度のアクセス件数	5,757

●標本資料記事索引

本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2016年度までの作成件数	60,473
---------------	--------

- | | |
|---------------|-------|
| 2017年度の作成件数 | 2,050 |
| 2017年度のアクセス件数 | 3,240 |
- 韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2016年度までの作成件数	7,827
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	2,238
 - ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	2,992
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	1,527
 - 映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。

2016年度までの作成件数	8,168
2017年度の作成件数	31
2017年度のアクセス件数	7,267
 - ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。

2016年度までの作成件数	767
2017年度の作成件数	8
2017年度のアクセス件数	2,409
 - 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2016年度までの作成件数	849
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	318
 - 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	170
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	663
 - 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	22,361
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	3,026
 - 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション。

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	7,889
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	1,587

• アフリカ カメルーン民族誌写真集——端信行コレクション

端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査の際に撮影した写真の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	6,530
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	1,281

• 沖守弘インド写真（日本語版、英語版）

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	20,125
2017年度の作成件数	1,846
2017年度のアクセス件数	3,728

• ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	3,879
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	1,857

• 音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2016年度までの作成件数	62,651
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	1,468

• 音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一文単位で収録した情報。

2016年度までの作成件数	351,802
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	1,019

• 図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。

2016年度までの作成件数	650,624
2017年度の作成件数	—
2017年度のアクセス件数	655,034

• 梅棹忠夫著作目録（1934～）

著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。

2016年度までの作成件数	6,643
2017年度の作成件数	24
2017年度のアクセス件数	8,628

• 中西コレクション——世界の文字資料——

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2016年度までの作成件数	2,729
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	40,467

• 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2016年度までの作成件数	33,450語（40,596頁）
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	229

- Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok (ボントック語音声画像辞書)
Lawrence A. Reid氏(ハワイ大学名誉教授)が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2016年度までの作成件数	7,637
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	404
- 日本昔話資料(稲田浩二コレクション)
稲田浩二氏(当時京都女子大学教授)らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料(446本のテープ・約190時間)の情報(音声あり)。音声は館内限定公開。

2016年度までの作成件数	3,696
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	783
- rGyalrongic Languages(ギャロン系諸語)[英語、中国語]
長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース(音声あり)。81の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200の文例を収録している。

2016年度までの作成件数	39,826語(文例:15,706件)
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	6,320
- 衣服・アクセサリー
本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報(画像あり)。

2016年度までの作成件数	26,539
2017年度の作成件数	1,162
2017年度のアクセス件数	22,478
- 身装文献
身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事(カレント)、2) 服装関連日本語雑誌記事(戦前編)、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2016年度までの作成件数	173,386
2017年度の作成件数	3,017
2017年度のアクセス件数	8,779
- 近代日本の身装電子年表
洋装がまだ日常に定着していなかった1868年(明治元年)から1945年(昭和20年)の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2016年度までの作成件数	11,549
2017年度の作成件数	359
2017年度のアクセス件数	856
- 身装画像——近代日本の身装文化
和装と洋装が拮抗していた1868年(明治元年)から1945年(昭和20年)までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。

2016年度までの作成件数	5,108
2017年度の作成件数	1,053
2017年度のアクセス件数	36,080
- 津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース
日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報(画像あり)。

2016年度までの作成件数	—
2017年度の作成件数	333
2017年度のアクセス件数	64,335

- 3次元CGで見せる建築——東南アジア島嶼部の木造民家

佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。民家の3次元CGから作成したgifアニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。

2016年度までの作成件数	—
2017年度の作成件数	34地点52棟
2017年度のアクセス件数	—

- 館内で利用できるデータベース

- 標本資料詳細情報（館内専用）

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2016年度までの作成件数	264,429
2017年度の作成件数	31
2017年度のアクセス件数	56,132

- カナダ先住民版画

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2016年度までの作成件数	158
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	43

- 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2016年度までの作成件数	849
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	135

- 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	42,195
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	573

- 梅棹忠夫写真コレクション

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	35,481
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	1,421

- オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真

小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	7,999
2017年度の作成件数	0
2017年度のアクセス件数	77

- 朝枝利男コレクション

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2016年度までの作成件数	3,966
2017年度の作成件数	0

- 2017年度のアクセス件数 175
- 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション。
大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。
2016年度までの作成件数 8,842
2017年度の作成件数 0
2017年度のアクセス件数 294
 - 沖守弘インド写真（日本語版）
写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり）。
2016年度までの作成件数 20,274
2017年度の作成件数 1,846
2017年度のアクセス件数 172
 - 西北ネパール及びマナスル写真
「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。
2016年度までの作成件数 620
2017年度の作成件数 0
2017年度のアクセス件数 80
 - タイ民族誌映像——精霊ダンス
田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。
2016年度までの作成件数 10,082
2017年度の作成件数 0
2017年度のアクセス件数 27
 - 東南アジア稲作民族文化総合調査団写真
日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。
2016年度までの作成件数 4,393
2017年度の作成件数 0
2017年度のアクセス件数 173
 - 日本昔話資料（稲田コレクション）
稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。
2016年度までの作成件数 3,696
2017年度の作成件数 0
2017年度のアクセス件数 8
 - 国内資料調査報告集
日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。
2016年度までの作成件数 21,373
2017年度の作成件数 0
2017年度のアクセス件数 6
 - 焼畑の世界——佐々木高明のまなざし
佐々木高明（本館元館長）が、調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録（画像あり）。
2016年度までの作成件数 —
2017年度の作成件数 454
2017年度のアクセス件数 —

●2017年度に館外公開されたデータベース

- ・津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース (2017年11月6日公開)
- ・3次元CGで見せる建築——東南アジア島嶼部の木造民家 (2018年3月28日公開)

●2017年度に館内公開されたデータベース

- ・焼畑の世界——佐々木高明のまなざし (2018年3月30日公開)

2-9 みんなく施設の利用

博物館施設の利用状況

●展示場を利用した大学・研究機関等 (50音順、カッコ内は人数)

愛知教育大学 (8)、追手門学院大学 (285)、大阪学院大学 (60)、大阪教育大学 (81)、大阪芸術大学 (74)、大阪工業大学 (15)、大阪国際大学 (16)、大阪樟蔭女子大学 (8)、大阪成蹊大学 (83)、大阪大学 (91)、大谷大学 (2)、岡山大学 (13)、沖縄県立芸術大学 (28)、金沢星稜大学 (36)、関西医科大学 (12)、関西大学 (55)、関西学院大学 (48)、岐阜大学 (5)、京都教育大学 (39)、京都産業大学 (27)、京都市立芸術大学 (13)、京都精華大学 (124)、京都造形大学 (42)、京都大学 (10)、京都橘大学 (209)、京都ノートルダム女子大学 (11)、京都府立大学 (40)、京都文教大学 (5)、近畿大学 (15)、高知大学 (11)、甲南女子大学 (52)、甲南大学 (80)、神戸学院大学 (17)、神戸芸術工科大学 (13)、神戸市外国語大学 (5)、神戸女学院大学 (151)、神戸女子大学 (112)、神戸親和女子大学 (15)、国立臺灣藝術大学 (25)、滋賀県立大学 (35)、滋賀大学 (6)、四天王寺大学 (5)、信州大学 (3)、杉野服飾大学 (9)、杉野服飾大学短期大学部 (45)、成蹊大学 (12)、摂南大学 (61)、園田学園女子大学 (7)、多摩美術大学 (30)、中国学園大学 (47)、帝塚山学院大学 (32)、桐蔭横浜大学 (4)、東京藝術大学 (17)、東京大学 (15)、同志社大学 (26)、東北学院大学 (60)、東北生活文化大学 (22)、獨協大学 (9)、奈良教育大学 (26)、奈良芸術短期大学 (29)、奈良大学 (104)、梅花女子大学 (30)、羽衣国際大学 (8)、阪南大学 (15)、広島市立大学 (6)、福井大学 (7)、佛教大学 (25)、平安女学院大学 (16)、香港專業進修学校 (34)、明治大学 (18)、桃山学院大学 (125)、立命館大学 (20)、龍谷大学 (327)、早稲田大学 (8)

*注 利用申請手続をおこなった大学・研究機関等

●来館目的 (アンケート回答より、順不同抜粋)

- ・授業で触覚に基づくアクセサリを作っており、世界のビーズについて学ぶため
- ・卒論で民族服飾をテーマにあげた学生がいたため
- ・食料人類学という授業の基礎となる文化人類学の授業として
- ・現代韓国の社会経済を対象としたゼミの一環として、韓国の日常生活やその歴史を学ぶ機会を提供したいと考えたため
- ・多様な文化コンテンツを展示しているので、異文化をより分かりやすく理解することができると思ったから
- ・世界中の民族の展示資料が多岐に渡り、質と量ともに充実しているから
- ・「多様性を理解する」というテーマで、アクティブラーニングのフィールドワークとして設定するのに最適であるため
- ・クラフトデザインコースの研修旅行
- ・今後、卒論を作成するにあたり、視野を広げ世界に目を向けるため
- ・民博の展示を通して異文化に触れ、関心をさらに高めることができると考えたため
- ・ゼミのテーマ「アジアの文化とメディア」に関連する展示を見学するため
- ・ビーズ展が非常に興味深かったため、学生にも見せたいと思ったから
- ・世界の民族学の貴重な実物の資料を見ることで今後の学習に役立つことを期待するため
- ・世界各地の文化を多角的に展示してあるので
- ・ハンズオンのもも多く、子どもに親しみやすいので
- ・梅棹先生の“民族”ではなく“民族学”の展示という理念に学生達が少しでも触れることができたらと考えたため
- ・授業を進めるにあたり、貴重な教材が多数そろっていると考えたため。
- ・ビーズ展が興味深く、学生にも有益と考えた

- ・世界でも有数の民族に関する資料があり、大人数でも受け入れ可能な施設であるため
- ・世界中の様々な文化をみるため
- ・研究機能としての大学院と展示機能としての博物館が一体化しているところが他に類を見ないため
- ・文化人類学の研究への理解を深めるため
- ・あらゆる素材、環境の異なった地域の資料が展示・収蔵されているから
- ・世界各地の文化や歴史が本や教科書を通して知るより、はるかに分かりやすく興味を引くように展示されているため
- ・昨年度利用し、学習効果が高いと感じたため
- ・ゼミの卒業研究のフィールドワークとして利用
- ・博物館実習、学生に充実した展示を観て学んでもらうため
- ・世界の多様な文化に触れられる場所であり、大学生には知っておいて欲しい場所なので
- ・個人的にも長年友の会会員で利用しているため
- ・国内最大級の規模の展示品・映像資料を所蔵するミュージアムとして、また世界の民族の文化の類似性と差異を比較しながら理解できる他にはない学習の場として
- ・人の多様性の理解とそれぞれの道具や衣服の形への道筋を知る機会によい
- ・民博の展示を通して異文化に触れ、関心をさらに高めるためです
- ・最先端の展示や収集・保存の状況について学んでもらいたい
- ・民族の多様性を実感して卒論のテーマ選択にいかすため
- ・博物館実習の一環
- ・シーボルトの特別展が開催されていたため
- ・大学のセミナーでシーボルトに関する内容を扱ったため
- ・収蔵庫を含むバックヤードの見学も可能であることを知ったので
- ・文化人類学の授業の一貫として利用
- ・展示が多数あり、民族も多いので、留学生にとっては興味を持って学習できる。
- ・日本について学べる。
- ・スペースが広いので、多い人数でも見学可能である。
- ・観光関連で働くことをめざす学生に対して、異文化理解の場として体験してほしいと考えたため
- ・座学で学んだことを、展示資料や映像資料から学ぶことで、より深く異文化を理解するため
- ・大学から比較的近いため
- ・座学で得た知識を、視覚・五感で定着させたいから

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教学園〔大学・短期大学〕、同志社大学〔文化情報学部・文化情報学研究所〕、千里金蘭大学、学校法人立命館〔立命館大学・立命館高等学校・立命館宇治高等学校・立命館守山高等学校・立命館慶祥高等学校〕、学校法人塚本学院〔大阪芸術大学・大阪芸術短期大学・大阪芸術大学付属大阪美術専門学校※通信課程含む〕、京都大学（3,351）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 障害を有する来館者等への配慮についての取組状況

- ・敷地北側駐車場と通用口周辺の舗装を改修し、路面平坦性の改善、専用駐車スペースの配置等バリアフリーに配慮した環境とした。

2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

- ・施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2017年度は11回開催した。

3) 施設の維持管理の取組状況

- 老朽劣化していた展示場中庭（第3展示パティオ）について、防水、床タイルの改修を行った。
- 設置後40年程経過している本館エレベーター3号機について、巻上げ機、ロープ、制御盤等の主要な設備の更新を行った。
- 衛生的環境を確保するため、2017年度も館内害虫駆除を行った。
- 自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- 安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。

4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- 昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。
- 書庫の1から3層やセミナー室等の点灯時間が長い場所の照明器具をLEDタイプに更新し、省エネルギー化に努めた。

2-10 受賞・特許

受賞

●2017年度の職員受賞者

左地亮子 2017年11月9日 第39回「サントリー学芸賞」〔思想・歴史部門〕

知的財産形成・特許出願など

●特許出願

発明の名称：紙の強化方法

特許出願日：2017年12月27日

出願番号：特願2017-252277

発明者：園田直子、日高真吾、岡山隆之（東京農工大学 理事・副学長）、小瀬亮太（東京農工大学）、門屋智恵美（東京農工大学）、関正純（高知県立紙産業技術センター）、殿山真央（高知県立紙産業技術センター）

